

清水長一郎遺文集(6)

清水長一郎遺文集(6)

目次

一、大詰を迎えた 修史(続日高郡誌)の大事業	1	一、余滴③	19
一、鳶松	2	一、沖野岩三郎の短冊	20
一、道成寺の柏楨	4	一、蛙の文鎮	22
一、紀州関係文献蒐集 郷土史の資料として	6	一、古瓦片	24
一、余滴①	7	一、実全老師の菊花図	25
一、一の札松	8	一、小熊野村から小熊村へ	27
一、祝 ^{はふり} 松	10	一、岩波文庫	29
一、昔の正月	12	一、丑の刻参り	31
一、酒中花を読む	13	一、牛と農村	32
一、枝垂梅	14	一、改造文庫	33
一、余滴②	17	一、田淵豊吉議会演説集 小山仁示編	35
一、藤の花	18	一、山路の松煙と墨	38
		一、木下幽山と松煙	40

一、続・山路の松煙と墨	40
一、句集「紺碧集」	42
一、明満作の庚申像 産経新聞	44
一、五行上人の作品？ 川辺町円通寺に所蔵の庚申像	45
一、木喰明満上人の作か 川辺・円通寺の板彫庚申像	45
一、木喰明満作庚申像 紀州新聞	46
一、随筆 みなべ集	48
一、水 泳	50
一、徳本上人と木喰行道	51
一、墨と古文書と句集	53
一、梅 仙 墨 展	55
一、新年随想・正月の童歌	57
一、灯火雑談	59
一、田淵豊吉議会演説集 ②	61

一、丹生都比売神社 小山仁示編	62
一、十津川から伊勢路へ	64
一、信覚上人の碑について	71
一、法灯円明国師 卯年の聖僧	74
一、紀州日高地方における 地主制資料刊行によせる	76
一、海鳴りの和歌の軸	77
一、続日高郡誌	80
一、消えんとする大正の名残	81
一、真 妻 山	83
一、祝 歌	85
一、祝続日高郡誌の発刊	87
一、氏 子 札	89
一、随筆 日高郡誌	91

一、随筆 垣のうちよりに寄せて	92
一、歩きさん	95
一、随想紀州第二集を拾い読みして ①	97
一、随想紀州第二集を拾い読みして ②	99
一、小学生の頃	101
一、龍女がくれた宝珠	102
一、明治初年の日高川改修	103
一、交通史話 汽船が通っていたころ	105
一、龍のはなし	106
一、交通雑話 汽船が通っていたころ	109
一、道成寺の縁日	111
一、交通雑話 汽車がついたころ	113
一、交通雑話 日高川の船運	114

大詰を迎えた

「紀州新聞」昭和四十六年一月二十三日

修史（続日高郡誌）大事業

要海 正夫

日高地方公民館連絡会が、一連の文化事業として企画した、郷土資料シリーズ第三集「紀伊日高民話伝説集」が上梓したのは、昭和三十八年九月のことだった。その喜びを分かち合う出版記念式の帰り道、当時郡公連の事務局を担当されていた東公君と連れだって、市役所の横を歩きながら、次のような対話をしたことを、今更のように思い出すのである。

「要海さん、よかったナア、もうこれで公連の大事業も終ったナア」

「いやいや、もう一つ大きいのがあるんやで」

「へえッ、大きいのでなによ」

「郡誌だよ。続日高郡誌だよ。森彦太郎先生の日高郡誌は大正十二年迄^{（一九二三年）}まで。それから後の五十年間の変わりようをみてミイ。それ以前の長い日高の歴史なんかと、較べものにならないかわりようやで、それに敗戦のおかげで古い記録は全部焼かれてしまったし、町村合併で旧村単位の記録なども殆んど反古にされてしまったし、今にして修史の事業を起こさないと、今後誰かがこの事業を手がけるとしても、この空白は埋めようもないで……」

「そやけど大きな仕事やナア、郡公連では、オコが折れるで」

「いや、やれるで、郡公連がオコを折ったら町村会があるやないか。道をつけたり、橋をかけたりすることも大事やけど、町村長さんにとってもこれほどの大事業があるかい。たのめばきつと、尻抱いてくれるで、それに井上さん（故）、芝口さん（故）、清水さんや小谷さん、郷土史家もいっぱいあるで、今ならきつとやれるとおもうんや」こんなことから、やがて続日高郡誌刊行の大事業が、郡公連の場で正式に採りあげられ、郡公連の五力年継続事業として緒についたのであった。

またその節、僕は、東君と同道して内原の森彦太郎先生の霊前におまいりし、つつしんで「紀伊日高民話伝説集」一冊をお供え申し上げるとともに、

「先生、おかげさまでこんなものが出来上がりました。どうか御照覧下さい。尚先生の衣鉢を継ぐ郷土史家が、今日高には大勢いられます。その方々のお力におすがりして、先生の日高郡誌の続きをなんとかものにしたいとおもっています。どうかお力添え下さい」とお祈り申し上げたことだった。

といっても、東君が指摘されたように、この大事業は、その規模の大きさからいってもたしかにオコが折れるかも

知れないと、僕も思ったことはたしかである。既刊の、民話集や、伝説集のように、一年や二年の歳月の中で到底、成就するものとは考えられない。幸い委嘱申し上げた編集委員の諸氏が、欣然参画を約束され、そこで鳩首協議の結果、一応のメドを五カ年として、一九七〇年には上梓の運びという段取りとなったのである。

その間僕は、昭和四十年から潮岬の方へ去ることになり、東君も又、子十浦小学校に転出されてしまったが、後を受け継がれた大野惣一郎会長や、岡本建一主事さんの御努力により、着々と進捗していたのである。といっても、最初の計画であった五カ年の歳月は夢の内に過ぎ去り、今年で八カ年目を迎えることになってしまった。最近僕は東君ともども、再び編集委員のメンバーに加えていただき、尽きぬ執念を燃やすようになったが、委員諸氏の研究の現段階も大凡の資料の整備の段階に入り、もうあと暫くでメドのつくところまで来ているようである。

「日曜も、祭日も、余暇という余暇は全部郡誌で使い果して、好きな小説もこの八年は、筆をつけたことはない。一日も早う終筆してこの苛酷からのがれたい」

とほとほと慨歎されるのが小谷緑草氏。

「公民館に泊めて貰ったり、お寺に泊めて貰ったり、学校の宿直室に泊めて貰ったり、冬休みもなければ夏休みもなかった」とおっしゃられる尾浦先生、谷口先生、清水先生、

「どうまとめてよいのやら、突っ込めば突っ込むほど奥行きが深くなるばかり」

と嘆かれるのが山本暢先生。

誰も彼も、本当にわがことのように、夜を日に継いで一生懸命に取り組んで下さっている。こうして生みの悩みを繰り返しながらも、^{（一九七三年）}修史の大事業は、今年いっぱいで完稿し、来年は清水長一郎編集委員長の手許で、総まとめをされ、来々年には（昭和四十八年）^{（一九七三年）}どうやら刊行というところまで漕ぎつけた。

どれくらいの頁数になるのか、頒布価格がどれ位になるのか、今の処予測は立たないが、恐らく一千頁を超える堂々たる続日高郡誌が誕生することだろう。八〇〇部の限定出版ということで、日高郡市民の為の永遠の文献になることは間違いない。その日の一日も早からんことを願いつつ、郡市民の一層の御協力とご助力をお願い申し上げる次第である。

鳶松

「紀州新聞」昭和四十六年五月二十二日掲載

五月十五日、野口山に登って頂上の鳶松を訪ねた。私の家は日高川をへだてて、ちょうどこの山の真北に当たってい

るので、もの心ついてこの方、朝夕眺め馴染んできた山なのだが、山頂をきわめたのは、この日でようやく二回目である。

第一回目は、もう年月も思い出せぬ程ふること、彼これ二十年もたつていよう。金屋の淵に近い熊野に越す山道を経て、馬の背ような峰伝いに歩き、鳶松を仰いで下野口へ下つたような気がする。今度は鳶松を見るのが目的なので、前回とは逆に下野口から登ることにした。

麓から見た野口山は、松をはじめ雑木がかなり繁っているようで、登山路といえ少々大袈裟になるが、はたして道があるのか、あるとすればそれがどこら辺りか、今も通れるのかも一向に不案内であった。しかし何にしても、ただか海抜百五十米の、山というよりもむしろ丘とよぶ方がふさわしい小山なので、村まで行けば見当が付くに違いないと、ともかく出かけてみた。

さいわいなことに御坊市農協野口支所前で偶然、旧知の岡本寿雄氏にお逢いして、氏の御案内で山の入り口まで歩いた。山の登り口は夏柑畑の中から始まっていた。しばらく畑の間を進むと道が二筋に岐れていたが、ここでも夏柑の手入れをしている村人から、とにかく左へ左へと道をとって行くことだと教えて貰うことができた。

山は松の木と馬目櫟が多かった。ジャングルのようにしげった中を、細い道がつづいていた。樹海をはなれると深い齒朶原であった。ところどころに盛りをすぎた山つつじの花が咲いていた。道は次第にけわしく岩肌のむきだした所もあった。しげみの間から時々、いましがた通ってきた野口の集落や、日高川の流れや、さらに川向かいの川辺町から藤井、吉田あたりの人家が小さくみえた。

いくたびか齒朶原や松の木立の下をくぐって、やっと頂上へ出た。時計をみると山へかかってから三十分程しかたっていない。しかし目的の鳶松へは、もう少し行かねばならぬ。一度のぼった山頂からまた十四、五米下がって更に上るのである。

やっと最も高い峰に出た。そこは十数坪の広場で、南は松林がつづくが、北には大きな木がなく視界が広がっていた。

鳶松はその南よりの所に、大きく枝をひろげていた。六十年ちかくも朝に夕べに仰ぎみてきた松である。思ったほど太い木ではなかった。早速巻尺をあててみると、胸高で一米九六と出た。そして高さ一米六〇のところから東西と南の三方に太い枝をのばしていた。いまは周囲の松が大きくなって、それ程でもないが、麓から仰ぎみると、あたかも鳶が羽をひろげたようにみえるのは、この三本の枝のせいである。

さて、またしても私の悪い癖なのだが、昭和十年四月発行の「和歌山県史蹟名勝天然記念物調査報告、第十四集」に、芝口常楠委員が、「見山の鳶松」と題して、この松の詳細な報告をよせているので、参考までに転載してみる。

けだし見山というのは野口山のことで、この山が平野部に聳立して、山頂の見はらしのよいところから、見山の名が生じたと伝えられる。

芝口委員の文にいう。

幹周胸高一・九五米、樹高四・三米、今ヨリ約百二十年以前コノ山林伐採ニ当リ頂上ノ一樹ヲ残シタルモノ即チコノ鳶松ニシテ樹令百五十年ヲ算ス。樹木トシテ老木大樹ニアラザルモ見山(標高一五〇米、俗ニ此山ヲ鳶松ノ名ニ因ミテ鳶山ト称ス)ハ日高川ノ日高平野ニ湾曲セル部分ニ聳立シ鳶ノ翼ヲ張リタルガ如キ鳶松ノ雄姿ガ日高平野ニ於ケル目標トシテ万人ノ齊シク称揚スル所蓋シ名木タリ。陸地測量部五万分ノ一ノ地図ニモコノ名称ヲ記サレタリ。

左程ノ老木ニアラザルモ、諸種ノ伝説ヲ生メルモノ蓋シ名木タル所以ナルベシ。

引用が長くなるのでこの辺で省略するが、芝口委員はこのほか、昔、日高川が大洪水の時、人間の苦しみをよそに空を飛び回っていた鳶が、ついに鳶松となった伝説や、「鳶山から熊野谷見れば、裸馬かよ鞍(倉)がない」の俚謡に発奮して、熊野谷が今日の富力を作った話を報じておられる。

ところで、ここで面白いのは昭和十年芝口先生が登山された時と、三十六年後私が登った時と、松の太さはわずかに一センチしか違ってはいない。一センチというとは或は巻尺をあてた場所の相違もあるうし、約四十年間に太さは殆んど増していない計算になる。松のある力所は岩の多いやせた地である。山頂のことで風も強いにちがいない。私のみたところでは鳶松の樹勢は、やや衰え気味のようであった。樹令二百年を重ねて鳶松は、いまは生きることが精いっぱいかも知れぬ。だが然し、

鳶松よがんばれ！ 麓の人々はお前の姿を、みんなで見まもっている。

と、心から声援をおくりたいのである。

道成寺の柏槨

「紀州新聞」昭和四十六年八月二十二日掲載

道成寺の柏槨をみてきた。

道成寺には勝れた仏像をはじめ、有名な縁起絵巻や古い建造物など、第一級の文化財が多いので、つい見すごされ勝ちになるが、この書院の庭に枝をひろげた柏槨は、その樹令、樹勢、樹の大きさともに、県内では屈指の名木である。

道成寺では折よく堀田広海師が本堂の縁におられた。書院の門があいている。自由に見るようにとのこと庭へは

いった。柏槇は庭の西南の築山に磐石のようにどっしり根を張り、空をおおっていた。用意の巻尺をとり出したが、石組みの上でおまけに植え込みがあったりして、足場がすこぶるよくない。一人で蜘蛛の巣を払いながら、散々苦勞して測った結果、胸高でちょうど四米の数字が出た。

日高地方で柏槇の巨樹として知られているのに、データは少々古いが昭和四年(一九二九年)の調査で、日高町小中の誓願寺境内の、地上五尺の処で樹周一丈二尺五寸、樹高約七間。栽植年代は宝徳元年(一四四九)或は永祿五年(一四六二)と云われるもの、及び御坊市南塩屋、光専寺境内の、地上五尺の処で樹周一丈八尺、樹高七間。印南町宮前、慶雲寺境内の幹周一丈、樹高七間、推定樹令三百五十年(これは昭和十二年報告一九三七年)などが挙げられている。このうち慶雲寺のそのの現況は知らぬが、誓願寺の柏槇も光専寺の柏槇もお健在である。

またこのほか私がみたものに、川辺町土生の来迎寺境内のものは、胸高、樹周二米二四あるし、塩屋町天田の極楽寺表のそれは、大分倒伏し樹幹が空洞になっているが、樹周一米八五、樹令四百年と推定される。

ひとしきりためつ、がめつ柏槇の老樹を仰いだり、その堅い幹にふれたりした私は、少しはなれた所から、もう一度ゆっくり見直したいと庭外へ出た。暑かった一日もどうやらかげりはじめた時刻であったが、本堂にはまた参拝者の姿がのこっていた。書院を囲んだ土塀の上に標札が見えた「柏槇樹令六百年」と墨書してあった。

ところで私は「樹令六百年」が気になった。推定ではなく六百年と云い切っている根拠を知りたかったのである。「本堂大修理の際、記念に植えられたという寺伝があります。大修理は天授四年(一三七八)ですから、まず六百年という所でございましょうか」と堀田広海師のお話であった。

話しかわるが井上靖に「樺の木」という小説があつて、その中にちよつと狂的とも思える樺の愛好老人が登場し、小説の主人公を案内して、東京界隈の樺の名木をみて回る場面がある。

「二百年から三百年という頃が、けやきはよろしゅうございますな」

「ほう」

「四百年になりますと盛りは過ぎます。二百年から三百年、この時期のけやきは立派でございます。人間で申しますと壮年期―四十代というところでございましょうか」

「ほう、けやきの木の壮年期は二百年から三百年ですか」

「そうだと思います。大学の先生などは、どのように申しますか存じませんが、私の見た感じにおいては、そのように思います。四百年、五百年になると、もういかんようでございます。東京にあるけやきの木で高令のものは、大体三百年ぐらいのものかと思ひます。老木と言われたり、おかみの特別の保護を受けたりしておりますが、さぞ心外だろうと存じます。まだまだ生命力もさかんでございまして、あと百年や百五十年の寿命は持

っております」

まだまだ樗に関する会話が続くのだが、すっかり転載する訳にもゆくまい。ここらで省略しよう。

それにしても柏槓と樗ではどちらが長命なのか私には分からないが、いずれにせよ四百年、五百年という生命は大変なものと思われる。道成寺の柏槓が寺伝のように六百年の樹令とすれば、その芽生えは足利義満の頃で、日高地方では源万寿丸や、吉田金比羅丸が勢力をふるっていた時代に当たり、有名な寺の縁起絵巻のできたのは、これよりなお五十年の後になる。

だが、やがて万寿丸も、金比羅丸も没落して、その後へ亀山城の湯川一族や、和佐、手取城の玉置一族が勢力をふるうに至るが、天正十三年、^(一五八五年)豊臣軍の南征に亡んだ。この時、道成寺は秀吉の日高攻撃軍の本陣となつたとも伝えられる。したがってこの老柏槓は亀山城や小松原館の兵火や、本堂や子院に溢れた強者どもの勇姿を、目のあたりにみている筈である。つづいて徳川三百年の平和と年毎の会式の賑い、暴風雨や洪水、ちかくは第二次世界大戦の混乱と世の中の推移を、ものこそ云わぬがその年輪に、しかと刻みこんでいるのである。

老柏槓の樹勢はまだまだ衰えをみせてはいない。柏槓よ元氣であれ、私はいく度か戦場をくぐり抜けた古武士を思わせる柏槓の姿を仰いでは、いつまでも立ち去りかねたのである。

紀州関係文献蒐集

郷土史の資料として

「紀州新聞」昭和四十六年七月二十日掲載

マニアでも蒐集家となると何か縁があつてそれを始めるものである。例えば十二支などに因んで自分のエトの置物ものなどを集めるようなケースが多い。川辺町小熊、清水長一郎氏Ⅱ商工会経営指導員、本紙随想同人Ⅱは、郷土史家として知られるが、古い郷土を探るためにも必要に迫られるものが古い郷土の文献である。紀州関係、特に日高関係文献を持つのでは同氏が日高地方ピカ一だろう。最初はその必要からその文献を探しているうちに、それが高じて集める方にも興味が移ってくる。マニアとはそんなものではないだろうか。

紀州関係文献といってもその範囲は広く、宗教的なものから歴史的なもの、それに文芸物もある。続日高郡誌の編集委員でもある同氏は、日高人著書目録なるものを個人的にまとめているが、古いものでは芦津実全、沖野岩三郎など、それに自費出版で歌集などを出している人々もいるが、その著書を殆んど揃えている。その蔵書は数百冊に及ん

でいるが、なかには少し特異なものもあり、それを紹介すると、「和歌山県日高郡農具図絵」（桂又三郎編、中国民族学会発行、昭和九年刊^{（一九三四年）}）、これなどは発行所は岡山市で、どういうことで日高郡に限って農具が絵図によりその呼称が紹介されたのか不明である。また、十年近く前に和歌山市の古本屋で手に入れたそうであるが、南部天花蔵の印があり、これは故井上豊太郎氏の印。井上氏の手を離れたものが、いま清水さんの下にあるという奇しき縁である。清水さんの蔵書のなかにこの井上氏から贈られた本も一、二冊ある。この井上豊太郎という人も多くの蔵書を持っていたことで有名。

そのほか昭和の初めに文芸誌としては、名声を博した「南紀芸術」が創刊号から廃刊の十号まで揃っている。創刊号には表紙を保田竜門が書き、谷崎潤一郎の扉字、佐藤春夫も寄稿している。これには日高地方で山中三郎・湯森順吉・山本好一氏らが寄稿している。美浜町和田出身で浜田峰太郎氏の「中国最近金融史」・「支那資本機構」もある。これは昭和十二年の刊で著者は和田で代用教員、御坊で新聞記者などをしたと云う。そのほか古いものでは、正保二年^{（一六四五年）}の「法燈国師法話」、文化三年^{（一八〇六年）}の「俳諧百画賛」は道成寺の石段に「陽炎やその石段の六十二」とある松尾塊亭の句集である。塊亭は画匠でもあり一句一句に画を添えている。新宮城主の風葉和歌集「丹鶴叢書」、これは全部で一七一巻一五二冊と云われるが、うち数十冊を蔵している。また湯川玄洋の「精華硯譜」上中下三巻。玄洋は七石翁と号するが「七石翁遺愛品展観図録」など。昭和十三年^{（一九三八年）}ごろに田辺市で発行された「紀伊考古」もこれは十巻ばかり続き創刊号を除いて揃っている。「紀州郷土玩具集」なども珍しい。カラー絵で御坊天神、立雛だるま、練物鯉抱などが紹介されている。

先に紹介したが、沖野岩三郎などの著書などはほとんど古書店をさがして求めたものである。多くの蔵書のなかに古ぼけた日記様のものがあり、これなどは古本屋でページを繰っていると道成寺などの文字が目に入り、それを買って求めてきたというようなこともある。いまでも定期的に送られてくる古本の紹介などに目を通して、掘り出し物を探している。県下では紀州関係文献を多く集めている人に、元紀陽銀行頭取の和中金助氏、県文化財委員・田中敬忠氏があり、和中氏など豊富な財力と専門の郷土史家をかかえて集められるのだから、私などはかないません。いまでもですが古本など求めてくるとこんなものと、家内に叱られていますと清水さんは苦笑いしていた。

余滴①

「紀州新聞」昭和四十六年八月十八日掲載

関西大学の小山という教授が田淵豊吉氏について書きたため資料集めに来訪したそうで、こうしたことには早耳であ

り足まめである清水長一郎氏が「田淵さんが選挙の演説で、鉄道を引っぱってきてやるとも道路や河川の改修などそっちのけで、大きく天下国家を論じていて、それでよく当選したものですな、と小山教授は感心していたそうだ」と話していた

▽ 田淵氏の選挙演説は二、三回しか聞かなかったが、演説の内容は、天下国家のみならず、人文全般にわたっていたが、政府糾弾（きゅうだん）にも遠慮することがなかった。当時の選挙演説には警官が臨席していて、演説者の政府攻撃の度が過ぎると「弁士注意」を宣し、それでも改めなければ「演説中止」を宣した。ところが日吉座での演説で「弁士注意」をくった田淵氏が、それまで聴衆に向いていたのを、臨席警官の方に向き直って、弁士注意の理由と根拠を反問し、さらに政府攻撃を鋭くする演説をやって、聴衆を湧かせたことをおぼえている。これなど田淵氏の計算ずくめのデスチャアーであったのかもしれないと今にして思う。

▽ 田淵氏は学生時代「弁論における早稲田の三羽ガラス」と称されたと伝説されているとおり、たしかに弁論で聴衆を酔わせる能力を持っていた。その説くところは、ひとつの命題を演えき解明して、更に帰納させるといふようなものでなく、数珠玉式に前後脈絡のないことを並べていくふうなものであった（ように余滴子は記憶している）。それは日本の国情を論じ、アメリカの国情を論じ、一転して釈迦の像が片手の掌を膝の上で天に向け、もう一方の手の人差し指と拇指で円を作っている、その形の仏法上から説明するというふうであった。そして、そのように語られる内容が、聴衆の平均的知識水準より次元の高いことによる魅力と、弁論のテクニクの巧みさがミックスして、聴衆を酔わせたもののようである。しかしこうした演説が票獲得に大した力のないことを田淵氏は先刻承知していたそうで、田淵氏の当選は田淵宗徒の献身的運動によるものであることは動かせない。

▽ さきに行われた知事選挙で、革新候補は現実問題を論じ、これに対して世耕候補は哲学的なことも論じていたそうである。世耕氏の当選は保守和歌山県の所産であるとしても、やれ保守だ、やれ革新だとギスギスしたことをいつている世界の外で、新しい動きが始まっている。その現れが現状における政治への無関心ではあるまいか。この無関心組をリードする能力を持つ者こそ、将来性のある政治家といえるのではなからうか。

一の札松

「紀州新聞」昭和四十六年九月二十二日掲載

南部川村大字晩稻（おしね）字大谷池尻に一の札松と呼ぶ名松がある。昭和（一九七一年）四十六年三月和歌山県の天然記念物に指定されたほどの名木であるが、もともとこの松の所在地大谷池尻は、県道龍神線からはれている上、山かげの今はめ

つたに車も人も通らぬ所なので、最近までその存在を知る人は少なかった。

ちょうど昨年の春であったか、毎日新聞が「ふるさとの植物風土記」と題して、関西各地の名木・巨樹を紹介した際、担当の田中武文記者がこの松をとりあげて、最大級の賛辞をよせて以来、一の札松はにわかには世人の注目をあびるに至った。田中記者は「植物風土記」連載するにあたって、ひろく各県の山中まで足を踏み入れているが、一の札松にはすっかり傾倒したとみえ、南部川村へは二回も訪ねてきているのみならず、ほかの新聞や雑誌にも、この松に関する随想めいたものを発表している。

今年の正月二日、私は小谷緑草君の案内で一の札松をみるべく、藤田草宇君をさそって出かけたのだが、出発時間がおくれてそれをはたさず、かわりに熊岡附近を歩いて、同地葬場の一本松(幹周五・二寸)をみて引きかえした。

しかし私の念頭からは常にこの松のことがはなれなかったが、八月十六日、南部町在住の続日高郡誌編集委員山本賢氏の御厚意で、やっと長い間の念願を達することができた。この日私は山本氏の車に乗せて貰い、西本庄から高野・市井川・滝・熊岡の月向峠・常楽の岡・久地峠、再び訪ねる機会のなさそうな南部川村の隅々まで終日案内していただいたが、最後に待望ひさしかった一の札松を仰ぎみた感激はいまもなお忘れがたい。

南部平野の地理にうとい私の記憶はたしかでないが、大谷池尻へはこの正月に訪れた常楽の岡のふもとから、ゆるやかな農道を登ったような気がする。道の左右も行く手もすべて梅畑がつづいていた。「本当の梅の花の美しさはここまでこないと味あえない」ハンドルを持ったまま山本氏が話した。「松がみえてきた」氏が前方を指さした。なるほど車の正面に堂々と四方に枝をひろげた一の札松の雄姿が、全く忽然とその全容をあらわしていた。「この辺からみるのが一番よさそうだ」山本氏はこう云つて松の数寸手前で車をとめた。

目通りの幹周四寸六〇、樹高も十寸あまりで、特別な巨松ではないが、クロ松独特のたくましさをみなぎらせた太い枝が四方八方へと枝垂れ気味にのび、しかもその枝張りは樹高の二、三倍もある。磐石のような重量感、実に堂々とした松である。

弘法大師見返りの松は幹周六寸四〇、樹高二〇寸(那賀郡粉河町上瀬淵清川)この一の札松よりはるかに大きい。が、樹高にくべて枝張りがいま一步、しかも折損した枝もあつて樹姿にやや均整を欠いている。これに對して一の札松は四方に出た枝が殆んど同長同大で少しの折損もなく完全無欠、見事な均整、それに樹令も見返り松より若く、まだ壮年期だ。淡路島の千年の松もこの一の札松と同形のクロ松で国の天然記念物になっているだけに、幹周約七寸、樹高一八寸枝張りの東西、南北ともに三〇寸をこえ、格段の差のある巨松だが、すでに老年、あふれるばかりの力量感、小さくても一の札松の方が勝っている。

大分ながい引用になったが、田中記者の職業意識をはなれての、心の底からの賞讃ぶりを紹介し、彼をこれほどまでに心酔させたの一の札幌の立派さを伝えたく、あえてこれをこころみた訳である。

私たちは車をおいて、畑中の道をゆっくり松を仰ぎながら歩いた。松の周囲に柵をめぐらし、樹下には天然記念物の木札が建っていた。

村人たちもこの松をふかくいくつしみ、村のほりりとしていたあらわれかと、何かさわやかなものが感じられた。さすが見事な黒松である。田中記者が二度も訪ねてきた筈である。県文化財研究会発行の「文化財だより」第十六号に、この松の「推定樹令四〇〇年位」とあるのに従うと、一の札幌がここに芽生えたのは元龜、天正の昔にあたる。あたかも我が国の群雄割拠、戦国動乱の時、日高地方では和佐手取城の玉置一族や、龜山城主の湯川直光が活躍していた時代である。また南部川筋ではここから山を一つ二つへだてた平須賀城に拠った野辺弾正が近在の農民に苛政をつづけ、天正八年（一五八〇）南部町勝専寺の第四世了玄を盟主とする農民一揆のため亡ぼされている。されば一の札幌の年輪の中には、こうした血なまぐさい出来ごと、その他もろもろの事件とともに、しっかりと刻みこまれている筈である。

山路をわたる夏の風が颯々として一の札幌の枝に鳴るのをききながら、私はこの松が生きてきた四百年という歳月を、しずかにもう一度噛みしめてみた。

祝松

「紀州新聞」昭和四十六年十月二十二日掲載

御坊市をはじめ日高地方の多くの人々の御協力によって、小竹ノ祝（はふり）の歌碑がみごとにでき上がった。歌碑建立趣意書を読まれた方々には今更説明するまでもないが、碑に刻まれた

雪ふりて昏（く）るる

光りの遠じろに

小竹の祝のはかどころ見ゆ

の一首は万葉学者であり且つ民俗学者として知られた釈超空、折口信夫の作である。明治四十二・三年（一九〇九・一〇年）ごろのこと、御坊市松原通りの塩路写真館の先代が御坊の風景絵葉書をいく組か作った。國學院大學を卒業して間もなかった松原村吉原（現美浜町）の田端憲之助氏は、たまたまその中の一枚である「祝塚の雪景色」を、学友である折口のもとに送った。折りかえし折口信夫から「雪ふりて……」の歌がとどいた。これは田端翁のご生前、直接うかがった裏紙で

ある。つまり折口信夫は祝塚を見ることなく、一枚の絵葉書をもとにして、これだけの名歌をうたい上げたのである。この歌はいま折口信夫全集第廿一卷におさめられているが、超空の数おおい作品の中でも、有名な「葛の花ふみしだかれて……」などとともに、傑作の一つであると素人の私には感じられる。

さて、歌によまれた祝塚というのは御坊保健所から数十歩へだてた地に遺る小さな塚である。

神功皇后が新羅から凱旋の途中、日高の地で皇太子と会い、小竹宮に本営を移した。この時どうしたことか天日にわかにかく、夜のような日がつづいた。皇后は左右の者にどうしたことかときくと、一人の老翁が進み出て、「話にきいた阿豆那比（あづない）の罪というのがこれらしい」と答えた。皇后は「阿豆那比とはなんのことか」と重ねて問うと、「二人の死者を同じ穴に埋葬することだ」と語った。

調べてみると小竹の宮の祝（はふり）——祝は神主のこと——と天野の祝は（伊都郡天野神社）は親友であったが、小竹の祝が病死した。天野の祝は悲しみのあまり「私も小竹の祝と同じ穴に葬ってほしい」と云いのこして死んだ。人々は遺言どおりに同じ穴へ埋葬した。天変はこのあたりであるとわかったので、二人を別々に改葬した。天日は再び明るく照りかがやいた。日本書紀に見える祝塚の塚の由来である。

私の所蔵する郷土資料の中に、享和四甲子年（一八〇四）の「紀伊国御菌莊小竹宮・寄進帳」の写本一冊がある。昭和二十八年秋、この原本を美浜町田井の田端春三氏にみせられて、その絵図に興味をひかれて借用の上、当時、南美会同人であった塩路香蘭女に模写して貰ったものである。絵図は小竹八幡神社を中心に、小竹元宮や清水井、日高別院を配したものであるが、その一部に祝塚も描かれている。周囲に水田がつづき、その中に小さな塚があり、塚の上には三本の木と碑が一基たっている。

この祝塚は昭和十七年五月に、井上豊太郎先生が書かれた「小竹八幡神社誌」によると

これは、はふり塚の現在尚残存している元宮東南、一本松がそれであるというのである。公簿上では菌統二百四十九番地小竹八幡神社有地墓地十二歩となっており、天明年間（一七八一〜一七八八）に建てられた小竹祝塚の碑が、松の根方に残っているのである。……とある。

つい最近までと云っているも昭和二十三・四年ごろまで、祝塚は享和の昔の描かれていた絵図のように、田圃の中にぽつんと残っていた。絵図の三本の木にかわって、一本の松を中心に数本の雑木が生いたち、松の根もとには小竹祝塚と刻んだ碑がたっていた。それは雪景色でなくても超空の歌のごとく見る人に何か心のやすらぎと詩情を感じさせるものであった。ところがいつの間にか周辺の水田が埋立てられて、あつといううちに家が建ち並んだ。いまは塚の象徴であった松の木さえ氣息えんえんの態である。

「雪ふりて昏るる光の遠じろに……」と折口信夫が詠んだ当時の姿を、再びとり戻すことは、今となつては困難

であろうが、せっかく郡市民多数の協力で歌碑もできたことである。この機会にせめて塚の整備をできないものであろうか。「何とかして欲しい。私は苦しい」祝松のこう訴える声が私にはきこえてくるような気がする。

昔の正月

「紀州新聞」昭和四十七年一月一日掲載

子供のころ、正月は待ちどおしかった。正月を待ちかねたのは、正月そのもののたのしさは云うまでもないが、暮れのお餅つきが一方ならず、子供の興をそそつたのである。

私の父は若死をしたため、私と弟は母と祖母に育てられた。したがって暮れの餅つきは、親類の男がした。餅つきは夕方からはじまることもあったし、朝早くにすませることもあった。寒い十二月の朝、家の中が何となくざわめく気配に目をさまし、あたたかい蒲団の中から頭をあげると、竈の火があかあかと燃え、祖母と母がいそがしく立ち働いている。やがて、「せいろう」からもうもうと湯気がたちはじめたと思うと、ぺったん、ぺったんと景気のよい餅つきの音が聞こえてくる。

もう、そうなるとじつとしてはいられない。寢床を出て叱られながら、大人の邪魔をしたものである。いまの中年以上の人には、誰しもこれに似た思い出があるに違いないが、近年は人々の嗜好がかわって、農村でも昔ほど餅をつかぬようになった。また便利な餅つき機械ができて、あまり杵の音がきこえなくなった。もう十年もたつと、なつかしい餅つき風景など、町でも農村でも見られなくなるかと思うと、一抹の郷愁を感じるのは、やはり私の年令のせいであろうか。

畏友・山本不艸君は元旦に御坊近在の神社、仏閣に初参りをつづけているが、日高地方では道成寺をはじめ、由良の興国寺や川辺町和佐の光性寺（俗に和佐の開山という）に、初詣でをする人がおおい。車の普及した現代、たいいてい車で乗りつけるが、私の少年時代は歩いたり自転車で行くより外はなかった。炬燵の中でまだうつらうつらしている頃、私の家は御坊方面から和佐へ向かう街道のすぐ側なので、もう、開山詣りの人の足音でにぎわった。

若野と対岸の和佐を結ぶ若野橋のできたのは、昭和三十一年（一九五六年）のこと、それまでは渡し舟であった。渡し舟には船頭がいて客を運んだが、運賃は昭和初年（一九二六年）で大人一回一銭、自転車一銭であったと記憶する。正月三日間の船頭の収入は、その年一カ年間の運賃と同じくらいであったときいている。それほど開山参りがさかんであった。車や汽車を利用する現代からみると随分不便であったが神仏のご利益は、かえって苦勞をかさねてお参りした方がおおく与えられるのではないかという気がする。

小学校に入学してからは、元旦は拝賀式があった。ふだんは鼻汁や垢でよごれた着物も、この日は、こざっぱりした紺緋などに着かえて登校した。女の先生も美しく着かざってオルガンを弾き、腕白どもは大きな声で

年のはじめのためしとて 松竹たてて門ごとに
祝う今日こそめでたけれ

と正月の歌を合唱し、校長先生は白い手袋をはめて、うやうやしく教育勅語を奉読した。私の小学校時代は笹裏栄蔵という人が校長であったが、この人の勅語の奉読はその態度といい節まわしといい、実に上手であった。私は後年、多くの人の勅語奉読をきいたが、笹裏校長先生ほど、立派な奉読に接したことはない。

勅語の奉読がはじまると全校の職員も来賓も児童も、一斉に頭をさげ不動の姿勢をとって、咳ばらい一つする者はない。その反動であろうか勅語がおわると、あちらでもこちらでも、待ちかねたように鼻汁をすする音が式場内に充滿するのであった。

正月元旦といえども昔も、寒い北風が吹くか、しんしんと冷え込むかしたのであるが、不思議に式場の寒さの記憶がなく、校長先生の勅語を読まれた姿や、奉読後の鼻汁をすすりあげる光景が、つい昨日今日のように臉の裏に浮かんでくる。しかし、もう半世紀余りも昔のことになった。

酒中花を読む

「日高新報」昭和四十七年一月一日掲載

もう数年前、街を歩いているうちに、足が冷たくなった。靴をあらためると、底が紙のようにすりへって、小さな孔があいていた。路上にまいた水が、そこから滲んできたのであった。

すでに初老を過ぎた身ではずかしいが、私は、それほど貧乏ぐらしをつづけている。小遣い銭の大半がろくでもない本代に消えてゆくからである。毎朝、新聞がくると、まっさきに本の広告をみる。郷土史関係のものが中心であるが、文学書にも注意を払う。新刊書のほかに毎月とどく古書目録の中から注文する。こうして私は、いつまでも孔のあいた靴をはき、よれよれの背広を着て、わずかに寒さをしのいでいる始末である。

考えてみると私の購書癖も小学生時代に道成寺の会式で、二銭、三銭の豆本を買うことから始まるのだから、随分ふるいものである。したがって本をみる目だけはと己惚れているものの、とき／＼下らぬものをつかんで後悔することがある。

昨年、買ったとめた雑書の中でおもしろく読んだものは、杉村武著の随想「水中花」であった。書店で立読みして

いるうちに、「紀州田辺風物誌」や「紀伊白浜の天皇陛下」・「三枝さんと日本古典科学全書」・「川島草堂」・「おやじ杉村楚人冠」などの項が目についたので、一も二もなく本を包ませたのだが、これは期待以上に読みごたえがあった。私は、今ここで、この書の内容をひとつく紹介するつもりはないが、「三枝さん」と「日本科学古典全集」には思い出がある。というのは、この全書中の一冊を故井上豊太郎先生からいただいたものである。井上先生の晩年、先生のおびたらしい新聞の切抜帳と雑書を贈られたのだが、その中に、「科学古典全書」がまじっていた。たしか昭和十六、七年ごろの出版であったと記憶するが、戦時中の発行としては造本も印刷もしっかりしていた。江戸時代の代表的な農書を複製したもので、古い農具の絵図を興味ぶかくみたことなどを、かえりみながら、その項を読んだものである。

また「川島草堂」というのは、大正から昭和初年頃へかけての田辺の画家で、蛇やむかでを食膳にのぼしたり、奇行に富んだ人物であった。晩年、御坊市の保田屋へもしばく逗留したといい、私も拾数年前、和歌山市の古書店でこの画家の椿の小幅を手に入れた因縁がある。

さらに「おやじ杉村楚人冠」は、現代六拾歳前後の人に馴染みのふかい朝日新聞社の記者、杉村広太郎楚人冠に外ならぬ。楚人冠は当時、有数の名文家としてたたえられ、初期の「へちまの皮」からはじまって、晩年の随筆「湖畔吟」・「続湖畔吟」・「続々湖畔吟」・「と見こう見」・「山中説法」等の軽快な行文に心酔した感激は今も忘れがたい。そして「酒中花」の著者こそは楚人冠の令息なのであった。

著者・杉村武は戦時中に病没した村人冠の最晩年を、子としてのあたたかい目で細かく伝えていた。

私は近年、年令のせいとか人の最期の姿に深い関心をもちはじめた。ことに世に盛名を馳せた人物が、どのようにして世を去ったかに興味といつては語弊があるが、とにかく一方ならぬ関心をおぼえるのである。たまたま店頭で手に入れた「酒中花」は、楚人冠の死にいたる様を伝えて余すところなかった。私は肅然として、これを読んだが、それにしては父子二代にわたる杉村家の著書に接した私のよるこびは大きかった。

新年早々くらい話になったが、これも年令のなせる業であろう。

門松や冥途の旅の一里塚 めでたくもありめでたくもなし (伝一休禅師作)

枝垂梅

「紀州新聞」昭和四十七年二月二十二日掲載

一代の文豪とうたわれた永井荷風は、その生涯のほとんどを独身でとおしたため、買物籠を片手に自分で、よく市

場などへ出かけたので、新聞や雑誌で買物姿の荷風を、しばしば見かけたことがある。

荷風と私では勿論比較にならないが、私も買物籠をぶらさげて、食料品店の食品棚を、あれこれと物色するのは、そうきらいではない。二月十三日の日曜日には、御坊歩こう会で、川辺町和佐の手取城址に登ることになっていた。前日の土曜日の午後、当日の弁当の買出しに千寿堂へ出かけた。ひとわたり目的の品物を仕入れて、店を出ようとしたとき、これも買出しに来られたのであろう岡本かおる夫人の姿をみかけた。

「今年は、もう枝垂梅の花が散りましたか？」

とお尋ねした。

「いいえ、花盛りはすぎましたが咲いています」

というお返事であった。

よく十三日は夜半からの雨が降りつづき、手取城址行きは中止になった。私はお昼前おり柄の雨の中を御坊まで出かけて枝垂梅を見せてもらった。実は岡本邸の枝垂梅を觀賞させていたくのは、今回で三度目か四度目になる。数年前、御坊で文協か何かの会合があった時、会が終って、当時の山本好一会長その他三、四人で夕刻岡本邸をお伺いしたのが最初でなかったかと記憶する。

枝垂梅は岡本邸の中庭にある。昨年の三月にお亡くなりになった御主人の岡本豊太郎氏も、ご生前この梅をことのほか愛好されて、以前お訪ねした時は、梅の見えるお座敷で花を眺めながら、この花の写真をおさめたアルバムをくりかえし、この木の由来をいろいろとお話になった。岡本さんのお話によると、このお宅はもとと御坊北新地の玉置楼の客座敷であったのを、昭和十八、九年（一九四三・四年）ごろアメリカから引揚げられた氏が、そのままお求めになったもので、枝垂梅はそのときすでにいまとあまり変わらぬ大きさであったという。

大体、御坊の町のあちこちに散在していた御茶屋をあつめて、当時、水田や畑地であった地を埋めたてて、北新地ができたのは大正九年（一九二〇年）のことであるから、この枝垂梅がその時に植栽されたものとする、いまでは樹令五十年を越す計算になる。

話は横道に入るが、この家（玉置楼）の前の所有者であった玉置氏は、今はそのお名前さえ失念したが、久しく旧野口村長をつとめられ、役場へはここからお通いになっていた。御茶屋の仕事はもちろん夫人があたっておられたのであるが、端正なお顔のようにきわめて温厚でまじめな方で、およそお茶屋御主人とは想像もできぬお人柄であった。また玉置楼のお隣が松月楼で、ここは旧藤田村長の瀬戸長兵衛氏の第二夫人が、お女将さんとして万事をとりしきっていた。玉置・瀬戸両氏はそれぞれ村長であると同時に、家に帰ればお茶屋の御主人でもあった。いまなら反対党からやかましく攻撃されるかも知れない。何と云つてもものんびりしたよき時代であった。

枝垂梅は木の太さは目測で大人の太股ぐらいはあろう。樹高は四米と昭和（一九六〇年）三十五年の新聞記事にある。普通梅の木という、骨ばったごつごつした枝が八方にひろがっているものだが、この木は幹が一本だけまっすぐに伸びて末を切りつめ、そこから四方に枝を張り、さらにその先から昨年出た新しい枝が、おもしろいことに、すべて地面にむいて垂れ下がっているのである。枝垂梅とよばれる所以であるが、それがことごとく目にしむような緑色で、その枝にはびつしりと、もはや盛りをすぎた花が、早春の雨にぬれて咲いていた。

昔から梅の花の形容には凜烈とか、清楚とか清浄とかいう言葉が用いられるのにきまつているが、この枝垂梅の花には、それに加えて他の梅の花に見られない、一まつの色つぼさと称していいすぎであれば清婉さと改めてもよい。とにかくおおうべくもないあでやかさがある。

枝垂梅は花が終ると、古枝のところから切りすてるのだが、程なくそこから新芽が出て、やがて四米の地上にとどくまで伸びてゆく。ちょうど新しい枝が地上に達するころになると九月の台風期で、あらしにもまれた枝は地面でその先を摩滅して成長をやめる。また新しい枝は害虫の好物で、春さきは時々消毒液を散布してやる必要がある。

枝垂梅の手入れをするのは従来ご主人の役目であったが、昨年はご病氣のためかおる夫人がかわれた。慣れぬこととて充分でなかったのか、この春は例年よりも枝の数が少なく、かつ丈が伸びなかった上に、花の数も少なかったと苦笑された。二・三年前県文化財研究会御坊支部の催しで、和佐大八郎ゆかりの田辺市江川の某寺を訪ねた際、この寺の境内で枝垂梅の花をみたが、その梅は岡本邸のそれにくらべて、ずっと樹令も若く木の姿も小さかった。

夜来の雨はなかなかやみそうもなく降りつづいた。私は早春の雨に洗われて散りいそぐ枝垂梅をながめながら、かつて玉置楼時代にこの座敷で梅を賞しつつ、妓を侍らせて酒を酌んだであろう酔客の身に、ひそかに思いをめぐらせてみた。玉置楼が廃されて岡本氏の手にこの家が移ってからでも、すでに三十年ちかい歳月が流れている。往年の酔人たちも、多くは白頭の翁となったか、世を去っているにちがいない。人生無常の感がそこはかとなく去来するのであった。

追 二十二日付随想で、清水長一郎氏が一寸触れておられた、旧野口村長の玉置という人は、旧姓藤田で名は留吉、新地玉置楼の婿養子となったが、大正十年（一九二一年）、日高郡農会書記であったのを、迎えられて郷里村長に就任したものの。昭和二十年（一九四五年）の終戦までかつきり二十四年間勤続した。二十年以上勤続した村長は私の知っている範囲では、ほかには比井崎の若田浅次郎氏と、川上の桑兼義氏ぐらい。玉置村長の月俸は退職直前ホンのチョッピリ十円か二十円昇給しただけで、二十四年間五十円也の据え置きでした。当時の村長は、半ば奉仕みたいなものでした。

(昭和四十七年二月二十九日 御坊市野口 林 松二)

余 滴 ②

「紀州新聞」昭和四十七年二月二十九日掲載

ただけなことの筆頭は自慢話である。これは直説法と間接法がある。二番目にいただけないのが仲間ぼめで、これはまた楽屋ぼめともいう。仲間内のこととは仲間たちで認め合えばよく、楽屋話は楽屋内で話していればよいわけで、これを社会という場へ持ち出すと鼻もちのならないものになる。そうしたことを承知しながら書くことにする。

▽ 毎日お届けする紀州新聞で、記者が書いたもの以外にいろいろ載ってある。毎日登載されてあるのが紀州随想と紀州柳壇、不定期なのが紀州路(絵)、碑巡礼で、以上は特定者に執筆を依頼し、グループに登載を約束してある。これ以外では二十日会句会、日高短歌会の作品と、特定個人の投書である。

▽ 随想欄は開設以来執筆者に新陳代謝があり、現在までの執筆者総計は百名内外に達しているであろう。これは一人が一ヶ月に一回執筆することになっているので、月に一回ならワケはないと引受けてくれた人でも、三々五回も書けばタネがなくなるそうで、それ以後は人生や社会の観察眼をとぎすまさぬことには脱落するかお茶濁しになるしかないという。紀州路のスタッフは自身の精進にいそがしくて投稿が留守になりがちらしいが、それだけに作品が載れば「ああ載った」という気にならされる。真面目なのは碑巡礼の清水長一郎氏で、原稿は常に、四、五回分先行しているのだが、一般ニュースに押されて登載延期の厄に遭っている。柳壇はますます隆盛だが、冠壇はもう一つ意気があがらない。二十日会句会は県下的にみても隠然たる力を持っているであろう。主宰者山中不艸氏は近く作品集を刊行するが、不艸氏につづいて作品集を刊行しうる実力者は三、五人にとどまらないかもしれない、また不艸氏の指導によって八日句会、名田句会が誕生して健全に育っている。日高短歌会は会員数においては二十日会句会や日高傘川柳会をしのいでいるであろうが、総体的にみて作品が足ぶみしていないか。個人の投書者も多士済々で、めばしい人々について書きたいが割愛するとして、このように紙上に花を添えてくれる人々のいることは、日高地方の文運隆盛を意味するものであつて喜ばしい限りで、今後更に投稿者の増加を待つわけだが、依頼寄稿・一般投書を通じて紙面に登載されることは、自分がマナイタの鯉になるのだということとを反省したい。むろんこのことはわれわれ編集委員もその埒外にあるものではない。

藤の花

「紀州新聞」昭和四十七年四月二十一日掲載

今年は四月に入ってから肌さむい日が続いたり、三日にあげず雨が降ったり、とにかく不順勝ちな毎日であったが、この二・三日来どうやら本格的に春めいてきた。

話は変わるが私には妙な癖があつて、日曜日というときまって朝が早い。仕事から解放されて、きままな一日がすごせると思うと、つい早く目がさめてしまうのである。十六日の日曜日にも、例によって六時前に床をはなれた。家族に気づかれぬように、そつと離れの雨戸をくると、前日来の風雨がすつかりおさまつて、外はさわやかな春日和であった。朝食にはまだ大分間がありそうなので、御坊まで車を走らせた。

目的は十五日と十六日の新聞を二・三種買い求めることにあつた。私の家では久しく朝日新聞をとっているが、勤め先でも他の新聞にざつと目をとす。そして関心のふかい記事の出ている日は、特にその新聞を買いに出かける。したがつて三月末の高松塚古墳の報道があつてからは、考古学にはまったくの素人ながら、もの好きにいく種類もの新聞を集めては、関係のある箇所をスクラップしてきたのであつた。

二・三の新聞販売所をまわつての帰りに、車の上でもうそろそろ藤の花の咲く頃だが、この辺りでは「はこぶね幼稚園」のそれが、一番うつくしかつたことを思い出して訪ねてみた。まだ咲き揃うところまではゆかぬものの、四分咲き位のすがたであつた。藤は庭園に二株あつた。園児たちが根元を踏みかためるせい、今年の春寒が禍したのであろう、思いなしか花房は例年よりも短いような気がした。日曜日のしかも早朝のことで、人影はなかつた。

前日の雨に洗われた藤の花は、まだ咲きそろわないだけに、その花房の紫の一層清新な美しさをみせていた。平日なればもうそろそろ気の早い園児たちが姿をみせ始める時間である。うらうらと照りかがやく春の日を体いっぱいに浴びて咲きほこる藤棚の下で遊びにふけり、小さな喧嘩をくりかえし走りまわる園児たちの姿は、想像するだけだったのしい。最近は何もかもが便利になりすぎて、幼稚園児はもとより、所によっては小学生までも、学校への行き帰りに車を使つたりするになる程、便利にはちがいないが、それがはたして子供達の将来にとって、しあわせかどうかは疑わしい。

「はこぶね幼稚園」の園児たちも、やがて大きくなってそれぞれの道を歩むのであるが、何かの折に子供の時、咲き匂うこの藤棚の下で遊びほうけたことを回想して、どのようになつかしく思うことだろう。どんな拍子であつたか花を仰ぎながら、自分の柄でもない説教じみた考えや、感傷的な思いにふけつたことであつた。

話はまた横道にそれるが、私の居村に來迎寺という一字がある。日高地方の多くの寺院がそうであるように、この

寺院はじめは古義眞言宗であったが、天正十二年（一五八四）僧道全によって浄土宗に転じ、寺の名もとの尊勝寺から来迎寺と改めたと伝える。その後来迎寺は慶応四年（一八六八）四月、原因不明の火災のため焼失したが、大正十一年四月今の本堂を再建した。

寺は日高平野を一望にする景勝の地にある。古い栢植の木や数本の杉の老樹、それに周囲には竹藪があり、庫裡の前の方には蔓の太さ八〇センチばかりの藤の老株が、広い藤棚に仕立てられていた。そして温厚な和尚夫妻が仏に仕えていた。和尚は碁が好きであったし強かった。村の青年達は夜を待ちかねて和尚のもとに集まり、世間噺にふけり囲碁の手ほどきを受け、平易な読経を教わった。

二十歳を出たばかりの私も、勿論その仲間の一人であった。一時は雨が降っても風が吹いても毎晩のように寺の高い石段を上ったが、人のよい和尚夫妻は今から考えると、迷惑な夜もあったに違いないが、一度として不機嫌な顔をみせたことはなかった。のみならず境内の藤の花が―これは白藤であったが―咲く季節は檀家の仏事が続くため、和尚は昼間の仏事の御馳走などをとり出しては青年たちを歓待した。和尚は格別學僧でもなければ名僧でもなかった。しかし無為にして化するという言葉がある。或は一見平凡なようにみえた和尚こそ、気取りのない本当の宗教家ではなかったかという気がする。

和尚夫妻はとうの昔に亡くなられた。年ごとに昔の美しい花を咲かせた白藤の老株もずっと以前に枯死した。当時、寺に集まった若者たちも既に老境に入りつつある。茫々四十余年の歳月が流れた。

余滴③

「紀州新聞」昭和四十八年一月二十八日掲載

御坊歩こう会で川辺町和佐の手取城跡へ行った。別所谷という谷にある一六〇〜一七〇呎の高さに土塁などがあって、規模は亀山城より大きい。登りつめると西の丸跡で、のろし台というのは急な坂になっている。郷土研究家の清水長一郎氏が、プリントを作成して全参加者に配布して、遺構についてくわしく説明してくれたが、それによるとこの城は、西の丸・本丸・二の丸・東の丸・付曲輪などが完備していて、西の丸と東の丸の間には空堀が設けられ、空堀の東端には溜池があったという。一つの城を廓に分割しているのは、一つの廓が攻め落とされても、他の廓によって防戦するためで、そうしたことから考えて手取城は用意周到に築城されている。

▽一行に西瀬市郎氏に加わっていて、「城では日常生活をしたのであろうか」という。しかし交通不便な城で生活するのは不便であろうから、城主やその家族、武将たちは平素は和佐の平地に住んでいて、一朝有事の際に城に

詰めかけたのにちがいない。亀山城の湯川氏も平素は小松原に住んでいたという。城とは生活の場ではないようだ。

▽秀吉が紀州へ侵攻してきたとき、亀山の湯川氏は抗戦を決意、手取城の玉置氏は恭順を決めたというが、亀山城にしろ手取城にしろ規模も小さく守勢も少人数では到底抗戦しきれない。恭順するのが利巧というものだが、湯川氏にすれば、家門の意地があったのだろう。しかし時代の流れを洞察できなかった憾みは免れない。

▽城跡からの眺めは亀山のほうが視界が広く、手取城跡からは日高平野の北部が望まれるだけである。亀山城跡といい、手取城跡といい、その昔、この城に拠った人々は一体どうゆうことを考えていたのか―と、ひとしきり昔を想ったことだった。

沖野岩三郎の短冊

「紀州新聞」昭和四十七年七月二十二日掲載

最下級サラリーマンの私が、書画の骨董の人並みな口をきいては、物笑いの種になるが、これまで郷土史に心を寄せてきた関係もあって、どこへ伺っても床の掛軸や置物についで目がつる。一概に決めつけるわけにもゆきかねるが、思わぬところで結構な書画にめぐり合わせたり、時代がかった置物を見かけたりすると、何とはなしにその家の、ゆかしい心根がしのばれる反面、新築の堂々とした座敷に通されても、床には縁日に並べられているような、安物の書画がかかっていたり、プラスチック製の床置が違い棚に、大きな顔でおさまっているのに接すると、すっかり興ざめた気持ちになる。

ところで口ではえらそうなことを並べても、私などの境涯ではいくら力んでみても、雪舟や応挙や等伯では、もともと手にできる筈はなく、といって家に四季おりおりの掛物ぐらないようではわびしい。まず私などでもどうやら手がとどき、しかも筋の通ったものと考えて、ここ二十年ばかりの間、専ら郷土紀州の先賢・文人・墨客の作品を集めることにつとめてきた。

周知のように昭和二十年^{一九四五}年わが国は第二次世界大戦で全面降伏をしてからの数年間は、日本中は大混乱におちいり、町の古道具屋や古書店、骨董店に、地名の郷土人の書画や作品類が、今が考えると捨て値同様の価格で流れ出たことがあった。私が野際白雪や阪本皓雪・本居大平・野呂介石・華岡青洲のものを手に入れたのは、ちょうどこの時期であつた。

その後、世の中が次第に平静をとりもどすにつれて、そんな時代は去り、古いものの良さが改めて見直されるよう

になった。のみならず地方作家の作品も、安サラーマンの私などには、そう安々と入手しがたい価額となり、自然、私は収集目標を軸物から、より値がさの低い色紙・短冊の類に変更するのやむなきにいたったが、最近、私の収集短冊の一枚に加わったものに、故沖野岩三郎の和歌がある。

昨今の人々にはすっかり忘れられた存在になったが、美山村大字寒川字下長子で明治九年一月五日沖野みやの私生子として生を受けた岩三郎は、生まれながらにして数奇な運命を辿り、寒川村役場の給仕や土工、小学校教員、キリスト教の牧師と転々と職業をかね、明治四十三年新宮教会に勤務中、有名な幸徳秋水の大逆事件がおこり、危うくその渦中にまきこまそうな事態に遭遇した。

大正六年七月、岩三郎はこの稀有の事件をテーマにした小説「宿命」を大阪朝日新聞社の懸賞小説の応募作品として送って二位に当選し、この一作で一躍流行作家となった。その後岩三郎は「煉瓦の雨」・「渾沌」・「星は乱れ飛ぶ」等の問題作を次々に発表した。

余談になるが岩三郎はまた頗る話術に長じ、大正十年頃から自ら童話を書いたばかりでなく、依頼を受けると全国どこへでも童話行脚を試みた。私はたつた一度だけ彼の講演をきいたが、ユーモアをまじえた独特の話しぶりは、いく時間たつても聴衆を飽きさせなかった。私がこれまで聞いた多くの講演の中で、田淵豊吉・賀川豊彦・志賀義雄・杉山元治郎・下村海南・久留島武彦・藤沢恒夫等と共に、沖野岩三郎の講演は今も忘れがたい。

さて、最近わたしが求めた彼の短冊には、

変わりなき坦路の旅に飽きはてて

火を噴く山の麓にぞ来る

浅間にて 沖野岩三郎とある。

浅間山麓、軽井沢千ヶ滝の山荘に疎開したのは、昭和十六年第二次世界戦争がはじまって間もない時期であり、東京下落合の自宅が空襲のため焼失したのは、昭和十九年一月九日のことであるから、この歌は彼の晩年の作ということになる。

もつとも私はこの外に彼の色紙を一枚もっているが、それには、

沖野岩三郎

ひとすじに 唯一すじに 走せて来し

坦路の はての 見えぬ寂しさ

と七行に書いている。

正直にいった短冊の和歌も色紙の一首も、あまり名歌とは思えぬが、彼は小説家であって歌人ではないのだから、

敢えてとがむべきではあるまい。それにしても二首の歌の中に出てくる「坦路」という言葉は、私たちには余り耳馴れない語句なので、字典をひらいてみると、「坦」は「ひろし」「たいらか」とあり、「坦路」は「平らかな道路」とあった。

沖野岩三郎は昭和^{（一九五六年）}三十一年一月三十一日、百十数冊の著書をのこして、浅間高原千カ滝の山荘で、その波瀾の多い八十二才の生涯を閉じた。近年彼は明治後期の社会主義思想家として、各方面から注目を集めている。郷土が生んだ作家あるいは思想家として、私どもはもう一度、沖野岩三郎が歩んだ道を振りかえってみるのも、あながち無駄なことではあるまい。

蛙の文鎮

「紀州新聞」昭和四十七年八月二十二日掲載

もう古いことなので、ひよっとすると字句にいくらか違いがあるかも知れぬが、昭和^{（一九二七年）}二年七月四日の未明、睡眠薬によって自ら命を断った大正文壇の鬼才・芥川龍之介に、

青蛙おのれもペンキぬりたてか
という秀吟があったと記憶する。

芥川のよんだ青蛙とは、雨蛙をさしているのか殿様蛙なのか、それとも只の土蛙なのかは、私には判断がつかねるが、いずれにしてもずうっと田舎ずまいをつづけてきた私には、蛙は単なる身の小動物というよりも、もつと馴染ぶかい、つまり気のおけない幼友達として遇すべき存在なのである。

実際、いまのように毒性の強い農薬のなかった戦前は、雨蛙も殿様蛙も土蛙も、もつともつと多く、私たち子供は外のいたずらにあきると、よく蛙を相手にして遊んだものである。蛙は子供のつくった草の実の餌にも無雑作にとびついたり、腕白どもの仕掛けたたばこの脂をためらいもなくなめたり、考えてみると余り利口者ではなかった。その上に姿かたちにしても、どうにもスマートとは云いがたいか、どこかユーモラスで抜けていて、憎もうにも憎めないところがあった。詩人の草野心平であったか、ひどくこの「おどけ者」をひいきにして、蛙をうたった幾篇かのすぐれた詩を書いているが、草野の心境は私にも分からぬではない。

ところで私の自慢している文具の一つに、「南紀男山」の蛙の文鎮がある。説明するまでもなく「南紀男山」とは、文政十年（一八二七）有田郡井関村の崎山利兵衛が、同郡広八幡宮に隣接する山裾に藩許を得て陶窯を築き、主として日常雑器類を作ったもので、日用品の外に花器や茶器類も製作している。この陶場は明治^{（一八七八年）}十一年ごろまで前後およそ

四十年間にわたってつづけられ、紀州陶磁器界に独特の地位をしめ、早くから好事家の間で珍重されてきた焼物である。私の所蔵する蛙の文鎮はちょうど掌にのる程の小品ながら、背は茄子を思わせる濃紫色釉で、肌には一種微妙な色沢を帯びて、瑞芝焼に似て甚だ高雅な出来栄である。そして大きな口を「へ」の字に閉じ、両足を揃えてうづくまった足裏に、「光川亭仙馬」の刻印がみられる。即ち文鎮の作者が男山第一の名工とうたわれた仙馬であることが知られる。仙馬は本姓・塩屋政吉といい、文化十年（一八一三）に生まれ明治二十五年（一八九二）八十才で病没したと伝えられ、「光川亭」と号したことから、印南町光川の産といわれるが確かではない。

さて、それはそれとして私に、この蛙の文鎮を持ってきたのは、昭和三十六年十一月四日、心臓麻痺のため急逝した谷口秀一氏である。谷口氏は明治四十四年七月十二日いまの御坊市名田町で生まれたが、その後同町島に居を構え、明光バスの運転手などをしたというが、私の知ったころは県の刀剣審査員を勤め、傍ら書画骨董商を営んでいた。谷口氏はまた昭和二十年十二月二十五日本紙の創業と同時に入社して、営業を援けていたという。

当時、専売公社御坊出張所に勤めていた私が、どうして谷口氏を知ったかは、今ではすっかり記憶を失ったが、谷口氏は御坊の人々が「谷やん」の愛称をもってよんでいた程で、一種特異な魅力を持った人であった。谷口氏は時たま思い出したように勤め先へみえて、刀剣の話や書画骨董の話や町の噂をしゃべっては、よく太った体で自転車に乗って、飄然と去って行った。

私は時々、彼の家を訪ねて商品である書画陶器の類を―それは主として紀州の文人墨客の作品であったが―みせてもらったのみならず、彼によって此の方面の実際的な知識を得ることができた。こんな訳で私は当時、谷口氏に触発されて、手ごろな男山をしきりにさがしていた。

谷口氏は肥満している人によくみられるタイプで茫洋として、商売には抜け目はなかったが、接する人に何か安心感を与えた。谷口氏自身もこの利点を心得て活用し、街の財産家のどこへでも心安く出入りして、いろいろな骨董品を売りつけた、反対に引き出してもきた。私が男山をほしいと話すと、ややしばらくして持ってきたのが、前に記した蛙の文鎮であった。安サラーリーマンの私には過ぎた値段ではあったが、何しろ出来栄が素晴らしい上、仙馬の作であるし、お負けに幼馴染みの蛙ときている。無理をして譲り受けたが、これは今でもよい買物であったと思っている。

私はこの外にも谷口氏が引出してきたもので、やはり南紀男山の刺身皿数枚を蔵している。これは文鎮とちがって大量に作られた、いわゆる日用雑器に属するが、これはこれで別の趣があつて捨てがたく、いまとなつては谷口氏をしのぶ、よき記念品となつた。

《注》貴志康親著「南紀芸術家小伝」に光川亭仙馬の出生を文政十年としているが、これは文化十年の誤りであ

る。

古瓦片

「紀州新聞」昭和四十七年九月二十二日掲載

すでに一読された方も多いと思うのだが、九月十七日づけの読売新聞に「韓国へ帰る“千四百年前の面影”」・「唯一の面瓦―永久保存へ」という二段組みの見出しで、

韓国の慶州邑菊堂、興輪寺（現慶州市沙正洞）跡で出土した約千四百年前の面瓦、所有者の北九州市八幡区折尾町、田中敏信医師から慶州博物館に、三十七年ぶりで返還されることになった。この軒瓦は直径約十五^{センチ}、厚さ二^{センチ}の円形で、女性の面かが彫刻されている。昭和九年九月同寺跡で作業中の韓国人が発見し、古物店に売却したのを、当時慶州公立医院に勤務していた田中医師が百円で手に入れ、翌年日本に持ち帰り秘蔵していた。興輪寺は新羅に仏教が伝わった西暦五一四〜五四四年に完成した新羅最初の官寺で、一二三六年蒙古軍の侵攻で焼亡した。この瓦は興輪寺の建築の際、百済の瓦匠が郷里で死んだ愛人をしのんで一枚寺に奉納したものだろうといわれ、韓国には一枚も残ってなく、国宝級の文化財として、永久に保存されることになった。

と、大要、右のような記事が瓦の写真と共に掲載されていた。

新聞記事の紹介が思わぬ長いものになったが、要は瓦といえど「つまらぬものとなって命を保つことを―瓦全」・「取るに足らぬ物を例えて―瓦礫」と称するように、とかく安っぽく取扱われがちながら、中には右の記事でも知られるように、貴重なものもあることをいいたかったのである。

ところで又しても自慢話めいて気がひけるが、私も韓国の面瓦とは比較にならぬが、一枚の古瓦片を秘蔵している。もう十数年も以前になろうか、当時、御坊市内本町に柏木という古物店があった。まったくの古道具屋で、店頭には古箆笥や古椅子や古机、それに鋸や釘貫、金鎚などが雑然と並び、白髪の親爺がいつも煙草をふかしながら、所在なげに店番をしていた。

その頃専売公社に勤めていた私は、朝夕この店の表を通って出勤するのだが、時々店へよって親爺さんを相手にしやべりこんだ。ある日、例によって店先で無駄話をしたが、ふと埃をかむった小さな桐箱が置かれているのが目についた。何だろうと物好きに蓋をあけると、小さな瓦の欠けが二枚おさまり、箱の底にうすよごれた紙片が敷かされていた。「おやおや」と塵をはらうと、その紙に消えかかったインクで、「明治三十二年六月」「聚楽邸、桃山駅ヨリ一丁西ヨリ掘出ス」佐々木尋雄と書かれていた。

もちろん値段というほどの価額でもなかったし、署名者の佐々木尋雄氏は今の日高高校の前身、日高中学校の初代教頭で、国語と漢文を担当され、私もほんの少しの間であったが、先生から国語と漢文を教えられている関係もあって、一も二もなく買い求めた。

聚楽第というのは旧版の広辞苑によると、豊臣秀吉が京都で、東は大宮、西は浄福寺、北は一条、西は下長者町の地を限って営んだ邸宅で、荘厳・華麗を極めた。天正十四年（一五八六）に着手、翌十五年九月に落成、秀吉は大阪からここに移り住み、翌十六年四月には後陽成天皇の行幸を仰いで諸大名を集めて、朝廷を尊崇することを誓わせた。同十九年これを秀次に与えたが、文禄四年（一五九五）秀次を高野山に放逐した後、破却した。大徳寺の唐門や本派本願寺の飛雲閣と浴室は、聚楽第の建造物の一部である。とある。

これで見ると聚楽第の位置は旧京都市内であるから、紙片のペン書きに「桃山駅ヨリ一丁西ヨリ掘出ス」とあるのと付合しない。その後、誰であったか若い頃、桃山練兵場付近で、私の所蔵するのと同型の瓦を多量に掘出したというのを聞いた。してみるとひよつとすると聚楽邸は、桃山城の思い違いでないか考えられる。そうならば瓦の出土箇所が合致する。

伏見桃山城もやはり広辞苑によると、京都市伏見区東伏見山に豊臣秀吉が隠居所として文禄年間に築いた城で、南は宇治川に臨み西南に淀・山崎を抑えて京都の関門を占めた。元和元年（一六一五）江戸幕府が破潰。その一部は大徳寺や西本願寺・豊国神社などに、今も残っている。と記されている。

さて私の所蔵する古瓦であるが、二個ともいずれも軒丸瓦の破片で、大きい方は半径約七・五センチ、厚さ二・九センチ複弁菊、花文、小片は径六センチ、厚さ三センチの桐葉文で、両方とも今も燦然たる金箔が所々に残っている。現在教養文庫の「かわらの美」大川清著によると、聚楽第の瓦はその表面に金箔をはり、瓦文様は巴文であると写真を掲げている。

私の所蔵する古瓦片が、聚楽第のものであっても伏見城のものであったにしても、秀吉ゆかりの瓦であることに変わりはない。天下の覇者、太閤秀吉の瓦が四百年の後、まわりまわって私の手もとに残っているなど、奇縁というかわりに有為転変と称すべきか。まったく世の中とは面白いものである。

実全老師の菊花図

「紀州新聞」昭和四十七年十月二十二日掲載

今年も菊の美しい季節になった。一概には云いにくいですが秋をいろどる花の姿は、春夏に咲く花にくらべて、どこか物さみしい気でその生命も短いようであるが、菊の花だけは白菊や小菊は別として、豪華絢爛で花期も九月半ばごろ

から、十一月半ばまでと、二ヶ月前後に亘って人々を楽しませる。関西で菊の名所といえば枚方や「あやめが池」菊の人形、近い所では海南の温山荘が、まず挙げられるが、今年はテレビの新平家物語にちなんだ、新平家人形が登場するとかきいている。人の好みはさまざまで菊人形は、毎年なかなか人気を集めているが、私はあれはどうしても好きになれないというよりも、虫酸が走るほど嫌いである。おそらく蠟人形などと同じ様にそれが精巧であればあるだけ薄汚く、あれは人形が作ったもののうち、もつとも醜悪なものの一つではないかと思うのである。やはり自然の花は自然のままの姿が一番うつくしい。

話がはじめから妙な講論になったが、私は最近日高地方と縁の深い芦津実全老師の、自画自賛の菊花図を入手した。老師は、

嘉永三年九月四日（一八五〇）和歌山芝ノ町に生まれ、若くして天台宗に投じて叡山に上り、二十余年間教学を研鑽した。明治二年（一八六九年）から同七年まで美浜町吉原の松見寺に在住したが、師が松見寺に來山の際、おびただしい蔵書を持つてきたので、村人たちは舌を巻いたという。後（一八八九年）に京都・相国寺の園禪師の会下に参じて臨済宗に転じ、南禅寺の塔頭・金地院の住職を数年間つとめた。明治二十六年（一九一三年）米国で万国宗教大会が開催されるや、出席して大いにその宗風を顕揚した。その後国内はもとより朝鮮・満州・台湾等の各地に教化・講演をつづけ、また著述に専念して殆んど席の温まる暇もなかった。このように実全師は身をもつて衆をひきい、徳望一世に高かったが、大正九年（一九二〇年）病を得て静養、同年三月一日避寒のため和歌山に帰り、九月おおくの人に惜しまれつつ遷化した。

以上が日高郡誌の人物誌にみえる老師の略伝であるが、この外に師は滋賀県神崎郡永源寺村の臨済宗永源寺派本山永源寺の管長に就任されているし、著書に「冠註伝心法要——明治十九年刊」（一八八六年）、「皇朝天台史略——明治二十九年刊」・「禅学向上録——明治四十三年刊」・「禅鼎一味——明治四十五年刊」・「禅梁録——大正十二年刊」等がある。

迂闊な話であるが私は永源寺について、何一つ知るところはなかったが、老師の菊花図を得たのを機会に、川勝政太郎著の「近江」をひらいてみた。同書の記述に従うと永源寺は、

鎌倉時代の末、美作の国の勝山から出た寂室元光禪師に帰依した、近江守護職の佐々木六角氏頼が愛知川上流の地に、永源寺を建立して禪師を開祖とした。康安元年（一三六一）のことで、盛時には二千人の学僧が集まった。方丈の本尊は世継観世音で、開山堂には重文の塑像寂室和尚坐像がある。寺は近世二度も兵火に焼けたが、寛永年間（一六二四～四三）再興され、彦根の井伊公の外護をうけて現在に至った。開山堂から奥を含空院とよび、管長の居室と書院があり、その庭からの愛知川の眺望はすばらしい。

とある。第二次世界戦争後、各宗では本山と称する寺院があちこちにできたため、永源寺もその類ではないかと考えたのだが、どうしてなかなか由緒のある古刹である。殊にここは紅葉の名所として知られ、境内は幽邃で、若葉の

ころも捨てがたいとあった。余談になるが県文化財研究会御坊支部では、来春は伊賀上野から湖東地方へ、一泊で見学旅行を行う計画があるのと聞いたが、是非永源寺へよって管長の居室・含空院を訪ね、実全老師の跡をしのんでみたいと考えている。

さて、京都の和書専門の古書店からといた老師の菊花図は、まだ新しい杉箱におさめられ、表に実全老師菊画賛と箱書きがあった。期待に胸をはずませながら軸を展べると、かきのもとに咲き匂う十数輪の菊花に、数本の芒を配した水墨画であったが、咲き盛る菊の香りが画面いっぱい、ただようばかりの爽やかさが感じられ、とうてい一禅僧の余技になるものとは思えぬほどであった。そして画の上のところに、

陶潜句猶古り落

云々の詩句と

乙卯之菊秋

石蓮写併賛

と、この画のなった年を記してある。これによってこの菊花図の描かれたのは、大正四年（一九一五年）の秋と知られるが、それにしても嘗って松見寺の住職であった実全老師の作品が、まわりまわって今わたくしのもとにあるのも、思えば不思議な因縁である。

小熊野村から小熊村へ

「紀州新聞」昭和四十七年十一月二十二日掲載

もう久しい間これという読書から遠ざかっていた私は、ある晩、つい最近買い求めた岩波書店発行の、日本思想大系中の「蓮如・一向一揆」をとり出してみた。実はこの集の中に「名帳―みようちょう」の一項があつて、私の居村、小熊をはじめ日高地方の村々の古い名前の記されていることに、関心をおぼえたからである。

名帳というのは簡単に説明すると、初期にちかい浄土真宗の信者の名前を記載した帳面で、日本思想大系本の中におさめられているのは、外でもない今は廃寺となっているが、高家村（現・日高町高家）西円寺に伝来してきたものである。しかもこの名帳には「興国四年正月十三日始之」・「後ニ文明五年癸巳六月八日ニ之名帳写」・「釈自 了忍房 相伝之」とその成立年代を明記してあるのである。

即ち名帳をはじめたのは興国四年（一三四三）で、文明五年（一四七三）にこれを写しかえているのであるが、興国四年からかぞえたと六百三十年、文明四年からさえも既に五百年の歳月を閲していることになる。もともと西円寺の

名帳のことは、江戸時代に編纂された紀伊続風土記、高家村の条に、ほんの二、三行であるが紹介されているし、近年では故森彦太郎先生が昭和初年ごろから、新聞や雑誌上でしばしば言及されているのみならず、私の手許にもその写しが伝えられている。けれども私の所蔵の分は、何分にも写しのそのまた写しであるため、誤りも多かろうと思われるので、厳密な校訂を経ている大系本と照合する必要もあった。

さて、この名帳に記されている真宗門徒は男七一、女五八、計一二九名であつて、門徒の居住する村は、阿尾・小熊野・吉原・三尾・矢田・和佐・島・若野・天田・小坂の十カ村におよび、少なくとも五百年以上も昔の文明以前に、もはや島村とよぶ集落の存在していたことが窺われる。

それから、もう一つ私の興味をひいたのは、私の住む部落、小熊と名称の変遷である。紀伊続風土記によると小熊とは川隈（かわくま）の義であるとしている。つまり日高川の水流が、まだ堤防のなかった時代に、村のすぐ側まで入りこみ曲がつてながれていたから、生じた名前であるというのである。隈は水曲・山曲・すみ等を指す言葉であつて、美山村の熊野川や印南町の熊瀬川・南部川町の熊岡などから考えても続風土記の説は首肯しなければならない。ところでそれはその通りとして、私の村に金蔵寺とよぶ真宗寺院があるのだが、その寺院の鍾銘に「享保七子ノ十一月・日高郡小熊野村 金蔵寺什物」とあつて、私は早くからこの小熊野村の野の一字にひつかかつていた。というのは享保七年は西暦一七二二年にあたるから、今から二百五十年前のことなのだが、その前後のいろいろの文書をみても、小熊村とあつて小熊野村と書いているものは一例もみかけないのである。したがつて金蔵寺の鍾銘は何かの誤りではないか。ひよつとすると鑄造師の気まぐれではないかとさえ疑つてきたのである。

それがどうであらう西円寺の名帳には、小熊野と記されており、それが書き間違いでないことは、二カ所にわたつて小熊野と出ていることでも明らかで疑う余地はない。もっと詳しく説明するとこの名帳にのせられている男女の名は、カタカナや漢字まじりで記されているのだが、住所はすべて名前の右肩に片仮名のみで書かれている。一例をあげると

アヲノ

アオノ

ミヲノ

ミヲノ

ヲトマツ女

孫法師丸

孫太郎

クス女

という形式になつており、村名の下に悉く「ノ」一字が加えられている。そして小熊の力所には、

コグマノノ

コグマノノ

大夫二郎

四郎大夫

とあり、これを現代風に改めると、

小熊野の

小熊野の

大夫二郎

四郎大夫

となる、おそらく今から数百年前の興国の昔、高家西之庄道場（西円寺の前身）に集まって、浄土眞宗の法義に接した人々は、「わしは三尾の某、わしは阿尾の某、わしは小熊野の某」と、名のつて道場の名帳にその名を記して貰ったものであろう。何にしても古く私の居村は小熊野村と称したが、いつか小熊野の野が省略されて小熊村となった。江戸時代の諸記録にはすでに小熊野村の文字は見られないから、その時期は江戸時代より以前と考えられる。金蔵寺の鍾銘に小熊野村とあるのは、鑄造師が鍾銘を刻むにあたり、わざと古風にしたがったものと思われる。地名変遷の実例として甚だ興味がふかい。

註 後年発行の「御坊市史」・「川辺町史」にはコグマノと記載されており、「由良町誌」はコグマノノとなっている。一度現物で確かめたいものである。（章博）

岩波文庫

「紀州新聞」昭和四十七年十二月二十二日掲載

世界の国々が息をのむほどの経済成長を続けているわが国で、これは何も出版界に限ったことではないが、ここ数年来の日本の出版事業の盛況は、まことに目ざましいものがある。

殊に近年相次いで行われている豪華本の刊行は、敗戦直後の見るからに粗悪な仙花紙の仮綴じ本が、一流書店から発行されていたことを思うと、全く夢のような気がする。

ところで一冊何万円という豪華本では、下級サラリーマンの私などにとっては、あれよあれよと驚嘆するばかりで、手の出ないのは勿論であるが、仮りに何かのはずみで買い得たとしても、今度はまたその置場所で一苦労をまぬがれない。というのはこれらの豪華本となると、いずれも普通の規格判外の大形本であるため、ただでさえ足のふみ場もない狭い書齋を、すっきりふさいでしまう上、安本ばかり並んだ書架の秩序まで、收拾のつかぬ状態におとしいれる。

その点からいうと、これは極端な比較になるが、各種の文庫本は定価も安いし、第一かたちが小さいので、どこへでも余り摩擦をおこさずに、すんなりと納まる。

周知のとおり文庫本の中では、明治・大正時代は別として、昭和期に入っては先ず岩波文庫が、もっとも早くから多くの人々に親しまれているが、私はこの文庫がはじめて新聞広告された時の、有名な三木清が書き岩波茂雄が、ところどころ手を入れたという「読書子に寄す―岩波文庫発刊に際して―」と題した「眞理は万人によって求められることを自ら欲し、芸術は万人によって愛されることを自ら望む……」にはじまる、いくらか気どりのある宣言文を

読んだ一種の感激をつい昨日今日のように思い出す。

さて、文庫本の広告に胸をはずませはしたものの、第一回目に発売された書目三十一点は、万葉集や芭蕉七部集、近松の心中天網島等の古典の外、外国文学の翻訳物が多く、地方の文学青年の私には歯がたたず、ようやく正岡子規の「病状六尺」と「仰臥漫録」の二冊を求めたことにとどまる。ついで昭和二年十月、岩波書店では文庫の第二回刊行を行ったが、私はこのとき藤村の「千曲川のスケッチ」と、どういつもりであったのか妙な取り合わせだが、西鶴の「好色一代男」を買っているし、昭和三年一月の第三回発売には、正岡子規の「墨汁一滴」・長与善郎の「陸奥直次郎」・福沢諭吉著「諭吉選集」を購入している。

畏友山中不艸君は無類の読書家であると同時にまれにみる愛書家で、その家蔵される多くの文学書や美術書は、ほとんど初版本でしめられているが、ずぼらな性格の私は、その点あまり拘泥しない。しかし私の手もとに残っている岩波文庫は、前述のような次第で遇然に初版本がそろっている。

ところが人にはそれぞれ好みがあるので、私は岩波文庫でも戦後版の旧版よりも一まわり寸ずまりになったものが、どうも肌にあわず旧版のみを集めている。いまこころみにこの両版を比較すると、旧版は縦一五・八^サ、横一〇・四^サ、新版縦一四・四^サ、横一〇・四^サと縦の長さがほんの僅かだけ短いのだが、この一・四^サの差が、どうにも私には我慢がならず、所蔵する気にならない。ほかの人がきいたなら笑うにきまつているが致方がない。

わが国の経済成長の結果であるといえよそれまでの事ながら、初めに述べたように美術書を中心にした高価な、豪華本の刊行は勿論であるが、昨今の古書の高騰ぶりもまた著しいものがある。しかし文庫本だけは多量に発行しているせいか、再版が容易であるためか、殆んど大きな値上がりはみられない。その中であって、赤松宗旦著・柳田国男校訂の「利根川図志」などが、その稀有な一例といえよう。

「利根川図志」はその題名の示すように、利根川沿岸の諸村の地理から天候・物産・神社・仏閣・名所・旧蹟を、挿画を入れて記述したもので、和歌山藩における紀伊国名所図会の如き地誌と考えてよい。この書の原本は安政五年（一八五八）に刊行されているが、岩波文庫におさめられたのは、昭和十三年十一月十五日で、昭和十五年十二月二十日に第二刷が発行されている。

いま私が書架にしている岩波文庫の「利根川図志」は、この第二版なのだが、いっどこで手に入れたかは定かでない。確か大阪あたりの古書店であったような気がする。それにしても当時、まだ郷土研究などはじめていなかった私が、どんなつもりで本書を求めたのか、考えてみると不思議であるが、どうやらそれは此の書中の所々に、名所や旧蹟の挿画があることに惹かれた結果のように思われる。

それにしてもこの岩波文庫「利根川図志」、いわゆる星三つの定価六十銭本は、めつたに姿を見せないためか、昨

今では千数百円の高値をよんでいる。文庫本としてはまったくめずらしい例である。

丑の刻参り

「紀州新聞」昭和四十八年一月一日掲載

新年早々から少々物騒がせな話を持ち出して恐縮するが、今年の干支にちなんで「丑の刻参り」のことを、あれこれと取りあげてみようと思う。

人は常に自分自身や家族・親族をはじめ、友人ひいてはあらゆる人々の幸福を願ひ、もしくは願うべきはずであるが、現実でとなると人間の性は矛盾にみち、社会は複雑怪奇をきわめ、なかなか理想どおりにはゆきかねる。のみならず、時には他人の幸福をねたみ、不幸ならんことを祈ったりする。現に数年前であつたか、発掘調査中の平城宮跡から、呪いの木製人形があらわれて、おどろかせたことがあつた。

また時代はずっと下がるが江戸時代には、陰惨な「丑の刻参り」が、各地でしばしば行われて世人をふるい上らせた。この呪いの祈りは明治から大正・昭和になつても絶えることなくつづき、たしか一昨年であつたと記憶するが、私の居村川辺町でも呪いの人形が発見されて、新聞紙上を賑わしたことがあつた。

さて「丑の刻参り」であるが、いうまでもなく丑の刻は昔の時刻のよび方で、今の時間に直すと深更の午前一時にあたる。したがってこれを直訳すると、「午前一時参り」となるが、ことはそれほど簡単ではない。即ち草木も眠り人家の棟も三寸下がるという真夜中に、ただでさえ身の毛もよだつ鎮守の杜に、うらみのかさなる相手を呪殺すべく、異様な装いに身を固め、ひそかに祈願に参詣することで、それには自ら次のような装束と作法が、必要であつたらしい。

おそろしいことであるが「丑の刻参り」を行う人は、先ず頭上に五徳をさかさにしていただき、そのめいめいの脚に火をともした蠟燭を立てる。そして右手に金鎚、左手に五寸釘をもち、呪う相手に擬した木または藁製の人形をたづさえ、黒々とそりたつ神木に恨みのたけをこめて打ちつけるのである。着衣は勿論白木綿で、その胸のあたりには鏡をかける。「丑の刻参り」はこの異様な服装で、連続して七日間にわたって行われるが、満願の七日目の夜は参道に巨きな飴牛がねそべって、祈願者の行く手をはばんでいる。しかし祈願者はここで牛をおそれ引きさがると、いままでの苦労が水の泡となつて目的が達しられない。思いきつて大牛をまたいで進むと願いが達しられて、呪われた相手が悶死すると信じられた。

まったく不気味な話であるが、私がまだ青年時代には、土生八幡神社の杉の老木に、ときどき藁人形がうちつけら

れていたという噂や、夜遊びがえりの村の若い衆が、異形の女人に出くわして、あやうく氣を失いそうになったという風評を一再ならず聞いた。

直木三十五の小説「南国太平記」の中に、これは「丑の刻参り」ではないが、薩摩・島津家のお家騒動で、世継ぎの寛之助を「阿毘遮魯迦法」によって、調伏する凄惨な場面の描写があつて、読む者の心を戦慄させる。いつの時代にも人の怨念はすさまじい。

ところで、これまでも度々書いたが、昭和三年^(一九二八年)に死んだ私の祖母は芝居好きで、よく私をつれて田舎芝居の見物に出かけた。そのころの田舎へは春秋の農閑期に旅役者の一座がまわつてきて、村はずれの空地に俄か作りの芝居小屋が設けられたが、祖母の膝に抱かれてみた芝居の一つに「丑の刻参り」の一幕があつた。何という外題であつたか知る由もないが、舞台では白衣に金鎧をもった女人が、頭上に五本の蠟燭をもやししながら、ぬき足さし足で中央に進もうとするのだが、その行く手には巨きな飴牛が横たわっている。女人はいく度も行きかけてはためらうのだが、最後には意を決してこれを飛びこえて行く。もはや六十年ぢかい昔になるのだが、妙にこのときの光景が忘れずに残っている。

牛と農村

「日高新報」昭和四十八年一月一日掲載

散らかるだけ取り散らした私の部屋に、かなり大きな備前焼の寝牛がもう久しい間、埃をかむったままおいている。四十年もちかい以前、私がまだ廿才台のある日、その勤め先へやってきた行商人から、この牛の置物と湯呑みを買ったのだが、湯呑みはとくの昔に壊していまい、寝牛だけが今に残つたのである。

ところで農家ではなかったが、農村に生まれて農村で育つた私の部屋に、牛の焼物があるのは何も不思議なことではない。実際、戦後の農村はすっかり変わつて、今では農村のどこをさがしても、乳牛のほか耕作用の牛など一頭もみかけないが、つい最近まで農村では余程の貧農でないかぎり、耕牛を飼わぬ家は一軒もなかった。

こころみに手もとにある矢田村誌から、当時の畜牛の数を拾つてみる。

もっともこの際、日高郡内の各町のそれを調べあげると面白いのだが、ちよつと手数なので矢田村誌に記されている、旧矢田村だけでほかは省略した。現在、文献に残っているものとも古い畜牛調査の結果は、延宝六年(一六七六)ごろの成立とみられる「日高鑑」のそれで、それによると矢田地区の牛の総数は、一六二頭である。ついで時代がずつと飛んで昭和十三年^(一九三八年)版矢田村勢要覧では、飼育戸数二三三戸・頭数二五八とあり、さらに昭和廿四年^(一九四九年)私が矢田小の

児童に依頼して調査したところでは、二八六頭を数えた。それが耕耘機の普及によって、近々十数年の間に一頭も存在しない始末になったことは、まことに驚くべきものがある。

昭和四十八年^{一九七三年}丑年を迎えて、私は農村の各戸に牛が飼われ、農村の朝が家々の鶏鳴と牛の啼き声で明けたのどかなりし時代をはるかに回想するのである。実際そのころの農村の一日は、まず牛の餌を与えることから始まった。一家の主人は春夏の候は起床するや、何をおいても牛の飼料とする草刈りに出かけた。主婦は家族の朝食をつくると共に、藁を切り糠をまぶし麦を混ぜて、牛舎に牛の飼料を運んだ。

また、農家の子供は学校から帰ると、めいめい竹籠と鎌をもって牛の草刈りに出かけた。飼料とする草は、いたる所にあつた。村道も県道も、せいぜい牛車か馬力、自転車能通过だけで、安心して草刈りができた。おだやかな晩春の朝夕、涼風の立ちはじめた夏の夕べ、同年輩の子供達は、三々五々日高川の堤防や村の畦道で、勝手なおしやべりをしながら、草刈りをした。

時には仲間うちで埒もない喧嘩のもち上がることもあつたが、当時の子供たちは草刈り作業で手を鎌で切ったり、刺にさされたりしながら、学校の教科書にはない生活の智恵を、身をもって学んだのであつた。

私だけのことではないが、過去の回想はすべて美化される。私は丑年の年頭にあたつて、農村の牛に関して少しきれいごとのみを書いてみたが、むしろ汚い不衛生的な面の方が多かったかも知れない。例えば農家の牛小屋は、たいい住宅に接近して設けられていたため、農家を訪れると、きまつて牛糞や敷藁の醗酵する一種独特の匂いが、そこいら一ぱいに漂っていたし、蠅や蚊がわあーんと襲ってきた。

しかし、それさえも今となつては、そこはかといふ幼い日の思い出とともに、なつかしく胸奥によみがえってくる。何にしても、もう二度とあのような、のどかな牧歌的な時代が、わが国の農村にめぐってくる日はあるまい。

改造文庫

「紀州新聞」昭和四十八年二月二十二日掲載

昭和生まれの人々は、その華やかであつた時代はもとより、そんな名前の雑誌や出版社のあつたことも知る筈はないが、大正八年^{一九一九年}四月からの戦争の激化するまで、「改造」とよぶ総合雑誌が、改造社から発行者から発行されていた。

雑誌「改造」はそのころ中央公論社から発行されていた総合雑誌「中央公論」とならんで、わが国の読書人の間に大きな勢力をしめていたが、両誌とも毎号その時分の流行であつた左翼学者の論文を掲載して、時には学者間ではなばなし論戦がくりかえされ、論議をわかったものであつた。私はもともとマルキシズムのマも分らぬのだが、川上肇

とか柳田民蔵とか大内兵衛など、マルクス学者の名前をおぼえた。

改造社も中央公論社もそれぞれ雑誌を出しているほか、出版部からいろいろ単行本や全集物を出版していたが、この改造社が昭和四年二月、岩波文庫の好調をみて改造文庫を刊行した。いま私の所蔵する両文庫をくらべてみると、その大きさは岩波文庫の長さ一五・八センチ、横一〇・四センチなのに対し、改造文庫は長さ一五・三センチ、横一〇・六センチである。また岩波文庫が紙装であるのにくらべて、改造文庫は粗末であるが一応布装になっている。

山崎安雄著、昭和三十七年刊の「岩波文庫物語」にはこの間の模様を、「……………改造文庫の出現は岩波氏を驚かせ、かつ怒らせた。なぜか？ 布装でしかも百ページ十銭だったからである。岩波文庫をつくる時、出版部の長田幹雄氏は百ページ二十銭はギリギリの値段であるといった。岩波氏は長田氏を呼びつけて「こんなに安いのでできるんじゃないか」と怒りつけた……」と伝えている。岩波茂雄の立腹した心情はわかるが、これはやはり公平に考えて、自由競争の出版界では無理ないい分であろう。

事情はどうあろうとも一般の読者には、より安く本が買えるのはよろこばしいことであつた。しかし収容されている書目は岩波文庫の精選主義にくらべて玉石混淆で、読書人の期待にそわぬうらみがあつた。自然いま私の手もとに残っている改造文庫は、数も少ないし妙なとりあわせで、自分でもちよつと首をひねるようなもののばかりである。

たとえば木下利玄・前田夕暮・若山牧水・斎藤茂吉・窪田空穂等の自選歌集があるかと思えば、横瀬夜雨詩集・室生犀星詩集、かわつたところではアナキスト和田久太郎の「獄窓から」幸徳秋水の「幸徳秋水集」田口卯吉の「日本開化小史」そのほかがある。もはや四十年の昔のことで、これらの本をどこでどうして買ったのか、はたして一読したのかさえはつきりしないのだが、いまに忘れがたい一冊に、ジャック・ロンドン著堺利彦訳の「ホワイト・ファング」がある。

もともと無精者の私は、ややこしい外国の地名や外人の名前を覚え込むのが面倒で、翻訳ものは殆んどよんでいないが、「ホワイト・ファング」は一息に読み、またくりかえして読んだ。荒涼とした極寒の地に生まれた猿の子が、人間にひろわれて「そり犬」となり、闘犬となって遂に南国に移って忠実な飼犬になる物語なのだが、何しろ舞台が広大な大陸の雪と氷の世界で、悲壮・痛烈なところが、ひどく私の心をとらえた。

ジャック・ロンドンには外に同じ傾向の「野生の呼声」と題する動物小説がある。「ホワイト・ファング」とは反対に、南国生まれの飼犬が北地に行つて「そり犬」となり、やがて氷雪の山地で狼群の首領となるという筋書で、これも人間臭の少ない自然の動物の交錯に終始している。人は自分に欠けているものを、他に求める傾向があるが、生来、柔軟な私は改造文庫とは別に、これをくりかえし読みふけた。

さて私の数すくない改造文庫の中で、いまでも愛惜しているものに、葛西善蔵小説集六巻と感想集一卷がある。現代、

葛西善藏と書いても、よほどの文学愛好家でない、その名前すらきいていないだろうが、彼はわがくにで独自の発達をとげた私小説の極致ともいえるべき、いく篇かの傑作をのこした作家である。たしか改造社であつたと思うがその死後、不完全ながら数巻の全集が刊行されたが、改造文庫におさめられたのは奥書によると、昭和九年九月十九日となつてゐる。ちょうどそのころ私は人生の一転機を迎えていただけに、葛西の暗いじめじめした私小説が私の心をつよく捉えたのであつたし、いまもこの六冊の文庫本が忘れがたく、もはや背表紙などはうす赤く変色してゐるのだが愛蔵してゐる。

ところでこの六冊の文庫本・葛西善藏小説集は、つい最近の古書目録で六千円の売価がついてゐた。これなども文庫本としてはめずらしい例である。

小山 仁 示 編

田淵豊吉議会展説集

「紀州新聞」昭和四十八年四月十五日掲載

御坊市が生んだ傑れた哲人政治家・田淵豊吉翁が、昭和十八年（一九四三年）一月十五日、六十一才で世を去つてから、今年にはちょうど三十年になる。

洋の東西にわたり古今に通じる深い学識と高邁な見識を抱きながらも、翁は生前ついに一冊の著述ものこさなかつたため、今となつては翁を知るには、これを議会展説に求める以外に方法はないが、これは一通りの努力ではでることではない。したがつてあれほど国を愛し、日高地方の人々から敬慕された翁の存在も、一部の人士を除いて漸く忘れられようとしてゐる。このときにあたり関西大学助教授、小山仁示氏の編集によつて「田淵豊吉演説集―第一巻」が、同大学出版・広報部から刊行された。翁の名声をしのぶ大方の士は勿論、郷土文化に心をよせる人々にとつて、この上もないよろこびである。のみならず時があたかも翁の逝去後、三十九年目なのもまことに奇しき因縁という気がする。

田淵豊吉議会展説集―第一巻はA五判二〇四頁・クロス厚表紙の装幀で巻頭に、参議院議員、戸叶武氏の「予言的哲人政治家田淵豊吉先生の議会展説集の序文」と題する八頁にわたる序文がある。そして、

- 一、予言的哲人政治家の言動
- 二、真人田中正造と田淵豊吉

三、昼は大山、夜は田淵から学ぶ

四、田淵の文明史観と哲学

五、国会の速記録が生きている

と五部にわかれ、その中で、

「田淵豊吉さんは、一種の予言的哲人政治家で、国会を舞台とし、真の民主主義者として、先駆的な活動を展開しました。田淵哲学の理論と実践の狙いは、古来ギリシャ時代以来の政治哲学上の課題たる「賢人政治と民主政治の調和」にあったのです。……」

「議会政治家としての田淵さんは、ふるさとの人々と山河を愛し、祖国の前途を常に憂い、庶民の生活の中にうずくまって、歩きながら考え、歩きながら歩みました。和歌山県の二区を選挙地盤とし、議会政治家として登場以来、田淵さんは人民の代表として、当時の官僚軍閥の勢力を基盤とする政府に向かって果敢なたたかひを行ったのであります。

田淵豊吉は、国会において、永井柳太郎、中野正剛らと共に、大正デモクラシーのパイオニアの一人であります。

……」

「私は「田淵豊吉の前に田淵豊吉なく、田淵豊吉の後に田淵豊吉なし」と断言します。」

「十四才で突如として父を失って、茫然自失の状態におちいった私の目を開いてくれた人こそ、大隈党の後輩で、父に新知識を注入してれた、私にとつての大先輩大山郁夫教授と田淵豊吉さんです。」

「私の人生において一番愉しかった思い出は、十九才から二十五才に至までの、ロンドン留学前の学問研究に没頭した七年間であります。私は早稲田大学の教室にあつては、大山教授から国家学、政治学および社会科学の諸文献を学び、夜は田淵豊吉先輩から本郷の高等下宿の一室で、古今東西の哲学、および田淵流の独自の「物の見方と世界観」を学びました。……」

「田淵豊吉さんは、その国会の議政壇上における演説に、政治家としての全生命を賭けたのであります。それは現実が如何に苦悩に満ちたものであつても、その議会の速記録を通じて、千年の知己を求めるといふやり方でした。田淵さんは、野蛮な戦争と暴力革命に反対で、自由な言論の討議によつて、正しい結論を導きだすといふやり方を歓迎していました。したがつて田淵仙人の武器は、神や仏や爆弾や魔法でなく、あくまで言論でした。」

と、田淵豊吉の概要を紹介している。

またそれに続いて編者小山仁示助教授は「田淵豊吉について」と題して全篇を

一、孤塁を守つた代議士

二、田淵の三大演説
三、激しい反骨精神

四、戦時議會での抵抗

五、その人となり

六、真理をあらそった政治家

の六項目にわかつて、その業績と稀有の人となりを、細かく紹介している。戸叶・小山の両氏の二つの文章は、単なる序文というよりも、田淵翁の人物論とよぶべきものかも知れぬ。小山助教授の研究によると田淵豊吉翁が、最初に衆議院議員に立候補したのは、大正六年四月二十日に行われた第十三回総選挙であるが、この時は次点で落選している。翁が念願の衆議院議員に初当選したのは、次の大正九年五月十日の第十四回総選挙であつて、この選挙では田淵翁は政友会の有力候補、中村啓次郎(三、五四五票)が落選したのを尻目に、和歌山県第四区(定員二名、日高・東・西牟婁)で第一位四、六八一票で当選している。

さて本文の翁の議會演説であるが、これは

大正九年第四十三回帝國議會(特別会)

大正九年第四十四回帝國議會(通常会)

大正十年第四十五回帝國議會(通常会)

大正十一年第四十六回帝國議會(通常会)

大正十二年第四十七回帝國議會(臨時会)

大正十二年第四十八回帝國議會(通常会)

となつており、各議會演説にはそれが行われた時の政界の状況、社会状況、演説に対する議會内の反響は勿論、新聞評まで紹介の上、教授の周到な解説を加えられて、まことに至れり尽くせりの感がある。

わが国に議會政治が取り入れられて既に久しく、田淵豊吉以上の有名な議會政治家は他にもおおいが、議會演説集が一冊にまとめられて、公刊された例は聞いていない。のみならず編者、小山仁示助教授の解説は懇切をきわめ、敬慕の情あふれるばかりである。その生前むくいられることなく、不遇のうちに没したとはいえ、没後三十年にして小山助教授の深い理解と大きな努力によつて、翁がその余生命を賭けた議會演説集が世に問われることになった。翁も以て冥すべきであらう。

私はこの機会に日高地方の方々が、一人でもおおくこの書を一読の上、わが郷土が生んだ偉れた哲人政治家、田淵豊吉翁の真面目に思を馳せていただきたい。

「田淵豊吉議会展説集―第一巻」定価千八百円は、御坊市周辺で一冊でも多く買って貰いたいと、編者から私のもとへ届けてきている。御希望の向きは筆者までご連絡下さるようお願いする。

山路の松煙と墨

「紀州新聞」昭和四十八年四月二十二日掲載

現代の龍神村のうち旧上山路・中山路・下山路の、いわゆる三山路村は、昔は山路郷とよばれていたが、この地方からは古来、製墨の原料である松煙が生産され、紀州松煙として珍重されていた。

山路地方で松煙業が始まった年代は明らかでなく、天保十年（一八三九）に完成した「紀伊続風土記―物産篇」にも、有田郡山保田莊（現清水町）や、牟婁郡田辺莊の松煙のことはみえるが、山地郷のそれはとりあげられていない。有田・牟婁両郡の奥地で行われているのだから、山路方面の松煙製造も、ほぼ同時代には行われていたと想像されるが確かでない。

山路郷の松煙が初めて文献にあらわれるのは、私の知る限りでは極めて新しく、昭和二年三月に発行された森彦太郎編「紀州文化読本」の、古久保隆一書の「紀州松煙」と、昭和四十四年一月刊行の「寒川村誌」産業誌の「松煙」であるが、「紀州文化読本」では、

山路地方の松煙業は主として中山路・下山路方面で行われ、両村とも戸数三百たらずの小村であるが、その内の凡そ六割以上がこれを主業とし、大正十二・十三年（一九二三・二四年）ごろの生産高は約八千俵・一俵四貫入りで価格は大体廿万円に及び、販路は殆んど奈良市の製墨業者である。然し大正十二年下半期からは価格が暴落したため、大正末年までは好況時代の半値以下となり、生産高も漸減しつつあるので、今のうちにその対策を急ぐ必要がある。旨をつたえている。また「寒川村誌」は松煙製造の工程を略述した上、その生産は大正末期で跡を絶ったと記している。

ところで話がちよつと脱線するが、田辺市の文化人の間で、田辺市が生み、南部町とも縁故の深い墨匠・鈴木梅仙を今秋ごろ顕彰し、併せて梅仙墨とその資料の展覧会を開く計画があり、私も一日相談をうけたが、その席上で話したまたま山路の松煙に及び、大正年代にこの地方では松煙のほかには、製墨業も行われていたと聞いて、にわかに山路の松煙と山路墨に興味をおぼえた。

そこで、あちこち尋ねあわせた上、今は山路墨の終始を知る唯一の方で、且つ松煙のことにも詳しい龍神村東の古久保秀弥氏にお会いし、また旧知の同村小家の五味銀六氏にも照会したのであるが、なお、その全容を知るには至ら

ない。以下古久保秀弥氏の御教示によると、

松煙にするのは、どの松でもよいという訳ではなく、赤松の方が適當している。大体、赤松三千本で松煙小屋が一つ建てられる。松煙焚きはかなり重労働で、山路方面では子供を叱るのに、「いたずらをする」と松煙焚きにやるぞ」と云うたものである。松煙にも上級品から下級品まで三十種位あって、この鑑定がなかなか難しい。関西での主な産地は広島県や高知県であるが、紀州山路産のものは、特に良質であった。大正末年ごろから年々その産額は減少しつつあったが、昭和三十年^{一九三五年}ごろ原木の赤松の入手難のため、紀州の松煙は全く廃絶した。

一方、大正十年代^{一九二五年}になって、松煙関係者の間で松煙で売り出すよりも、墨にして販売すれば、はるかに有利であるから製墨事業をおこそうという気運が高まってきた。事実、松煙一俵からは三千挺の墨が得られた。そこで大正十四年ごろ元中山路村長・久保要三郎をはじめ保田久楠・湯川茂・杉本貞雄・真砂伊勢・川口立吉・川口善五郎他二名合計九名の人々によって、紀州製墨合資会社が創立され製墨事業をはじめた。製墨職人(通称ねり子)一名を奈良から雇入れて、専ら墨の製造にあたった。製墨工場は今の龍神村大字安井字千升(ちます)にあった。

ここで作られたのは、「天の上」・「竜頭墨」・「精華墨」の三種類であった。しかし製墨事業というのは、資金ぐりのむづかしい事業である上、販売方法も何しろ素人のことでうまくゆかず、結局資金難のために三カ年程で解散したが、創立・解散の年月は不明である。

ということである。

また五味銀六氏の来簡を引用させていただくと、

― 福井手谷(龍神村)の渡瀬さんという人は、長い間松煙を焚き、また、墨を製造した人です。これは手製で握り墨という。私も小学校二・三年ごろ使った事を覚えています。丸棒の形をした墨です。工程は松煙をニカワで練り、手で握り固め墨の形をこしらえ、それを陰干しにしたもので、工程の能率等引合わず止めた。

とある。美山村御出身の大成中学校池本多万留氏も学童時代、やはり握り墨を使ったことがあるが、ほかの墨にくらべて減るのが早かったように記憶すると話された。

また山路墨は、かつて和歌山県学童指定用墨になったとも聞いたが、これもたしかなことは分かっていない。とにかく山路の松煙と墨は、特殊な地方産業として甚だ興味ふかいものがあるが、それに関心をもちはじめて日が浅く、まったく聞書程度にすぎぬ。後日を期したい。

なお本稿脱稿後「日高郡誌―産業誌」に「松煙・大正九年^{一九二九年}二万五千円」とあるのに気づいたので附記しておく。

木下幽山と松煙

「紀州新聞」昭和四十八年四月二十五日掲載

本紙記事で説明へ

(一七八九—一八三〇)

寛政の頃に活躍したと思われる御坊市出身の画家、木下幽山については御坊周辺には作品も見当たらず幻の画家とさえいわれているので、幽山について調査している県文化財研究会御坊支部の小山豊氏はさる十五日附け本紙で、一般の協力を求めたところ直ちに反響があり、また二十二日付の随想欄で清水長一郎氏が「山路の松煙と墨」について書かれたことに関して、龍神村で古文書を発見したと小山氏から次の書簡が本社に寄せられた。

前略、木下幽山についてお世話になりました。おかげで三人の方から連絡をいただき、幽山書名の画も一点見つけりましたが、作風落款について引きつづき調査中です。またそれらに付随して他の資料もわかり良くなり、勉強になりました。

それから二十二日付随想欄、清水さんの「山路の松煙と墨」の松煙について、先日龍神村へ古文書調査に行ったとき、文政七年（一八二四年）四月「真行松煙山売渡証文」、同八年酉四月「松煙山之事願」がありました。真行とは現美山村寒川新行のことと思います。また別の家で嘉永二年（一八四九年）亥四月「松煙山売渡証文」・文久二年（一八六二年）「松煙仕切覚」・同三年亥七月「松煙仕切手形」ほか松煙関係の文書を発見しました。何分短時日ゆえ目録を取るのが精一杯で、くわしい内容は覚えていません。近いうちに再び行きますので、その時に調べて清水さんにお知らせしようと思っています。

続 山路の松煙と墨

「紀州新聞」昭和四十八年五月二十二日掲載

先月の二十二日私はこの欄へ「山路の松煙と墨」を載せたところ、折返すように四月二十五日付の本紙上に小山豊氏が、

……それから先日、龍神村へ古文書調査に行ったとき、文政七年（一八二四年）午四月「真行松煙山売渡証文」、同八年酉四月「松煙山之事願」がありました。真行とは現美山村新行のことと思います。又別の家で嘉永二年（一八四九）亥四月「松煙山売渡証文」・文久二年（一八六二年）「松煙仕切覚」・同三年亥七月「松煙仕切手形」ほか松煙関係の文書を発見しました。何分短時日ゆえ目録をとるのが精一杯で、くわしい内容は覚えていません。

近いうちに再び行きますので、その時に調べて清水さんにお知らせしようと思っています。

という好意に満ちた文章を寄せられた。松煙関係の資料が殆んど未発掘の現代、これはまことに貴重な根本資料である。是非これらの文書をみたいものである。

次いで五月二十七日付で龍神村の古久保秀弥氏からも、大要、次のようなお手紙をいただいた。

……松煙は一俵正味三貫匁入り、俵装込み三貫五、六百匁。この包装のコモの厚さにより、多少総目方に差異がある次第。新聞には一俵とありしも右の通です。墨は一表の松煙にて三千丁ありますが、一俵千丁であります。一丁型の墨はごく小さく四匁であり、四匁の六割（二匁四分）が松煙で、一匁六分が膠その他。松煙を細分すると空中に飛散するので千丁の二貫四百匁となるのです。一丁型というのは墨は減多に作らぬようです。三丁型、四丁型が主であつたらしい。

松煙職人（技術者）は他村になかった。というのはこの技術はそう容易（たやすく）身につける訳に行かぬのであります。どこどこで松煙ができたと申しても、山路人が進出したもので、松のある所へ行つたものに相違ありません。

——中略——但し油煙墨は黒い一点であり、松煙墨は黒ばかりでなく、その中に赤味も帯び青味も含み、画家たちの好む彩りがあるということである。松煙の技術が山路に伝えられた経路など、まだ私には不明であり、今後調査の上またお知らせします。

またこれより先の四月二十五日付で、旧知の印南町西神野川の桑野為一氏からも、およそ次の如き興味あるお手紙をいただいた。

……松煙についても沢山の思い出を持っております。子供の頃から昭和二十八年時分まで、私宅の山にも工場があつて、山路方面から人夫が入れ代わり立ち代わりやつて来ました。物心のついたころ松煙さん（その仕事に来る親方も人夫も、みんな土地の人はこう呼んだ）が、盆・正月の土産に菓子などを呉れるのが嬉しかった事が、今でも印象に残っています。それにも増して忘れられないのは、松煙さんの米を搗かされた事です。何日目かにきまつて人夫が三貫三百匁と書いた松煙俵を背負つて預けに来ては、その序でに持ち帰る米の供給を引き受けていたらしく、学校から帰ると母が唐臼に米を入れて待つていて、なかなか遊ばしてくれませんでした。その当時、松煙一俵の値段は九円位だったのか、この俵一俵九円やそこの値段では、飯もくえんと洒落を云つて、こぼしていたのを記憶しています。終戦前後から木材として松の価格が上昇し、松煙用材が少なくなつたのに、製品は余り値上りの気配がないとかで、各地の工場が閉鎖されたが唯一カ所（県下でも一つ）だけ近所

に残っていました。昭和二十八年七月、まだ約束の期限が三年程を残す松煙松立木の私方の分を、御坊の木材商人が買収を依頼して来たので、その交渉に中山路まで行つて買受けて来ました。その翌日に七・一八水害が発生し、結局松煙工業は大水害と共に幕を閉じた訳であります。

製墨事業が始まったのは大正末期の頃で、小学校向けの製品を沢山私方へも持ってきました。然し生徒の数が少なく売り売れなかったものか、相当の残品が二、三年程たつと無数の亀裂が入り、変形変色して商品価値がなくなりました。昔から良質の墨は永年月を経て枯らした程質がよくなると聞いたが、これは全く正反對でした。奈良の本場から来たという職人も、地場産業を守るためよい加減の仕事をしたのかも知れませんが――中略――

松煙小屋は女人禁制で家族の者でも、焚き場へは絶対に入れなかったようです。それは少しの呼吸によつて出来る煤の墨や質に関係あつたらしく、焚き子が火を切らしたり、一度に松を沢山燃やしたりすると、すぐ掃き番(一週間に一度位煤を掃き落として集める作業)の時に看破されたとききました。熊に松煙俵を引き裂かれた話、狼が夜通し小屋の付近でおぼつた話など、方々の職場を渡り歩いた老人にきかされた事もあります。

ついで五月十二日付で同氏から再び、

作業場の女人禁制は常識となつていたそうですが、戦後の人手不足と若い人々の山林労務を敬遠する風潮から、終末期には自分の娘を焚き子に連れて来ていた事もありますので付け加えておきます。尚製墨事業との関係は私の親の代の事で、当時の首脳者川口立吉氏弟川口善五郎氏とは特別に親しくしていたものか、色々相談に來ていた事を覚えています。その後両氏も親父もなくなつて、すべてが思い出の中にのみ残っている始末です。との御教示を得た。今月の随想は小山・古久保・桑野三氏の御書状の紹介のみに終始したがお許しを願いたい。

句集「紺碧集」

昭和四十八年六月二十二日掲載

近年タイプ印刷ができてからは、それ程ではないが、以前は簡単な印刷物は大抵謄写版印刷によつたものであった。私はこれまで謄写版印刷が、はたしてどの位の間、保つものかと懸念したが、これはどうやら心配する程の事はなく、半永久的な耐久力があるらしいと分かった。

それというのも私の手もとは、数十年を経た謄写版印刷物が、かなり数多く置いているが、その中のどの一冊をひらいても、インクの消えたものや薄くなったものは、一つもみられない。のみならず中には印刷後、年をかさねるにしたがつて却つて活字本や木版本とちがった、いわば庶民的な美しい趣を醸し出したものさえあつて、ついみとれ

てしまうことがあったりする。

ところで、このような謄写本の一つで、特に私が愛蔵しているものに、故井上豊太郎先生の句集「紺碧集」がある。井上先生は人も知る通り御在世中は、本紙をはじめ当地の日高新報に、殆んど連日に亘って各種の原稿をよせられていたので、いまさら紹介するまでもないが直情径行、いろいろ癖もあり批判もあったが、博覧強記で学識が深く、ともあれひとかどの方であつたと尊敬している。

さて、句集「紺碧集」は縦一九^{センチ}、横八・三^{センチ}、表紙は青いやや厚手の洋紙を用い、右肩に「習作第一年（昭和九年）」「井上紺清浄習作句集」と二行に印刷し、表紙の中央を一重のさくでかこんで、中に「紺碧集」と九号ぐらいの文字で書名を表し、左の下すみに、「起雲閣」「楽天荘」とこれも二行に印刷してある。

解説を加えるまでもなく「紺清浄」は先生の俳号であり、「起雲閣」は和歌山市三番丁六番地にあつた、先生の法律事務所兼居宅の号で、「楽天荘」は御坊本居の称である。つづいて開巻第一頁には、それぞれの前書きのある三句、二頁にも三句をのせているが、中に「俳名名付け」として、

春の海紺清浄と名付けけり

とあるのが興味をひく。次の三頁から十二頁までが「はしがき」で、末尾に「昭和十年二月吉日」「井上豊太郎しるす」とあり、以下四十二頁まで各頁およそ五首宛、百四十二句がおさめられている。また最後の奥書には「昭和十年二月二十日印刷発行」「著作印刷発行人、和歌山市三番丁六番地 井上豊太郎」「発行所和歌山市三番丁六番地 起雲閣」「和歌山県日高郡御坊町 楽天荘」とある。

もちろん、この書は全文、謄写版印刷であるが、印刷製本とも専門印刷所の手になったものとみえ、美しく整った文字で、表紙以外は和紙二つ折りにしたものである。奥書によると、この句集が発行されて、もはや四十年ちかい歳月が流れ、作者、紺清浄先生が病没されてからでも六年になって、印刷されたインクの色もすっかり枯れて落ちついた風格が行間に滲んできた。そして句集の中にある「根来寺想参」とか「秋砂川探勝」あるいは、「衣奈浦所見」「切目川吟行」の前書きをみるにつけて、かつて先生と行を共にした秋の長保寺や、興国寺や龍神温泉の夏の一夜のことが、そこはかとなく思い出されて、懐旧の情にたえない。

この句集が当時の位の部数が発行されたかは、先生なき現代すでに知る術はないが、私所蔵の一冊も、誰かにいただいたものか、古本屋から手に入れたものやらも、一向に思い出せない。自分では確かなつもりでいても、人間の記憶などは頼りないものであると痛感する。

ともあれ他人がみたら、とるにも足りぬ片々たる句集なのだが、私にとってはかけがえのない秘蔵本なのである。ところが何しろ前述の通りの薄葉の、しかも、たったの一冊だけの小型本であるため、余り大事にしまいこんだりす

ると、ついしまい忘れたりする恐れがある。そこで、外の薄葉和装の小型本とともに、封筒に入れて机の引き出しに納めてある。定形封筒に入ると云えば、その大きさは略々ご想像いただけるかと思う。

子等嬉々ともぎにし蜜柑青かりき

新田を植えなやみ居るひでりかな

松の幹透して夏の海蒼し

うたゝねの子等に釣りたる蚊帳哉

土用波沖がかりせる巨船見ゆ

以上は「紺碧集」中の句である。

明満作の庚申像？

川辺町でみつかる

県に文化財指定申請

「産経新聞」昭和四十八年七月四日掲載

全国を回って、各地で仏像を刻んだという木喰上人、明満五行（二七一八―一八一〇年）の足跡は、県下にも残っているが、このほど、日高郡川辺町で、上人の作と見られる庚申像がみつかった。同町文化財委員、清水長一郎さん（64）の調査でわかったもので、町は文化財として保存法を検討するとともに、県文化財指定の申請をすることになった。木喰（もくじき）は火食、肉食をいっさいしない戒律を守る僧のこと。真言宗の明満は、なかでも著名な一人で、行道ともいい、晩年は神道光明、明満上人と号し、全国を回って千余にのぼる仏像を刻んだ。

天明六年十一月、伊勢から那智山を経て、翌七年正月二日、由良興国寺、同年二月一日粉河寺をめぐって高野山から泉州に入った。この間、天明六年暮れ、中津川（現在の川辺町中津川）に二十日ほど滞在したとある。

清水さんは、この時、庚申像を彫ったとみているが、像はヒノキの厚さ一〇センチ、幅三五センチ、長さ一六〇センチの板に、足下に、邪鬼を踏まえた五〇センチの青面金剛を刻んである。最下部には「見ざる、聞かざる、言わざる」の三猿を配し、裏に墨書きで「天明六年十二月二十一日」の日付、それに明満行道の花押がついている。以前像を安置していた中津川の寺が焼け、いまは、同町玄子の浄土宗円通寺（豊島雄成住職）境内の観音堂内に安置されている。

五行上人の作品？

「朝日新聞」昭和四十八年七月四日掲載

川辺町 円通寺に所蔵の庚申像

書名と花押みつかる

日高郡川辺町玄子にある浄土宗円通寺（豊島雄成住職）の観音堂に所蔵されている板彫の庚申像（こうしんぞう）に、江戸末期の遊行僧木喰行道と呼ばれた五行明満上人（一七一八―一八一〇）の署名と花押があるのを、このほど町文化財委員の清水長一郎さん（64）が見付けた。五行上人の作品は県内で見つかっておらず、五行上人の作品とすれば、木喰研究に貴重な資料になるとみられ、清水さんは豊島住職と話し合っ、県文化財の指定申請をする。

庚申像は高さ一・六尺、幅三十五寸、厚さ十寸のヒノキ材に、邪鬼を踏みつけた青面金剛を浮かし彫りしてある。像の背面に天明六年（一七八六）十二月の日付と「木喰行道」の墨書があった。

寺伝によると、同寺北方にある中津川の庚申堂にまつられていたが、火災で堂が焼失、残った像は風雨に曝されていた。明治三十年（一八九七年）ごろ、この像に触れた村人が相次いで病気になる、たたりを恐れて日高川に流そうとした。これを知った円通寺の先代住職が、引き取って観音堂に安置した、という。

五行上人は甲斐国（山梨県）の生まれ。十四歳で流浪の旅に出、二十二歳のとき、真言宗の高僧に説かれ仏門に入った。四十五歳のとき、木喰観海上人から木喰戒を受け、千体仏づくりを発願、各地を回り、特異な木彫仏を残したことで有名。作風は伝統的な仏像とは異なり、肉塊の盛り上がりや強調した荒彫りで、大正初めまで余り知られていなかった。その後民芸運動の先駆者で、宗教哲学家の柳宗悦（一八八九―一九六二）が紹介、行者僧独特の造形が見直されるようになった。

柳宗悦選集の「木喰上人」によると、上人は天明六年末ごろ、川辺町中津川に約二十日間滞在していた。

これらのことから清水さんは、この像が遺作であることに、ほぼ間違いのないとしている。ただ、記録によつては、中津川滞在の日が、一月ほどずれており、像の彫りもやや綿密であるなど、疑問点も残されている。このため、木喰研究会（猪飼重明会長）に照会して確認を急いでいる。

木喰明満上人の作か

「読売新聞」昭和四十八年七月四日掲載

川辺 円通寺の板彫庚申像

日高郡川辺町小熊、同町文化財審議委員清水長一郎さん(64)は町内の玄子にある浄土宗円通寺(豊島雄成住職)の小さなお堂にまつられている「板彫庚申(こうしん)像」を調べていたが二日、江戸時代後期の木喰(もくじき)五行明満上人(二七一八―一八一〇)の作とみられると発表した。

明満は木の実や果実だけを食べて修業した木喰上人の一人。十四歳のとき故郷の甲斐(山梨県)を出て各地を放浪、二十二歳で仏門に入り、日本回国を志して全国を行脚、行として千体以上の仏像を刻んだ高僧。

この庚申像は高さ一・六^尺、幅三十五^寸、厚さ十^寸のヒノキ板に彫られた丈六十五^寸、幅二十^寸の庚申の本尊青面金剛が天邪鬼(あまのじゃく)を踏みつけた姿と、その下に三匹の猿を配し、板の後ろに「天明六年(一七八六)十二月、木喰行道、日本廻国」などの墨書と花押がある。

清水さんは、宗教哲学者で民芸研究家の柳宗悦の著書「木喰上人」「木喰五行明満上人年譜」などから明満が天明六年十一月、伊勢から紀州入りし、玄子から約一^き離れた中津川(同町)に約二十日間とどまったことがわかり、さらにこの板彫庚申像はもと中津川の庚申堂にあったが、明治三十年^(一八九七年)ごろ村人が日高川へ流そうとしたのを、円通寺の住職がもらい受け、境内へ安置したと伝えられており、清水さんは木喰上人の作に間違いないとみている。明満は県内各地を回っているが、彫刻した仏像が見つかったのはこれが初めてといわれ、清水さんはさらに明満の作風や墨跡、花押などを調査照合し、町か県の文化財に指定するよう申請したいという。

県教委文化財課は専門家に鑑定してもらおうといっている。

円通寺で発見

「紀州新聞」昭和四十八年七月四日掲載

木喰明満作庚申像

県下で初貴重な研究資料に

川辺町玄子、円通寺Ⅱ豊島雄誠住職Ⅱで江戸時代の修業僧、木喰明満上人の作と見られる庚申像が見つかった。明満上人の残した仏像は千駄を越えるものといわれているが、不思議と本県では発見されておらず、今度の発見は勿論初めてのことであり、極めて貴重なもので、地元では早速県文化財の指定方を申請すべく準備を

進めている。

発見された庚申像はヒノキを素材にした厚さ一〇^セ、高さ一六〇^セ、巾三五^セのもので、この中に五〇^セの青面金剛とこれに踏みつけられた天邪鬼、それに「見ざる、いわざる、聞かざる」の三猿が彫刻されている。円通寺にこの庚申像が存在していることは、かなり以前から一部の古美術愛好者に知られており、その裏面に木喰の文字も判読されされていたことで、その後、県文化財審議委員、巽三郎氏が木喰行道（明満の前名）が日高地方に立ち寄った記録があることから、同人の作ではないかと見解をのべていたが、今年の五月、川辺町文化財保護審議委員で郷土史家の清水長一郎氏が再び調査したところ、木喰の墨書に続いて行道の文字と花印のあることを確認、更に柳宗悦選集第九巻「木喰上人」の中に、また同書「木喰上人年譜」に天明六年十一月、川辺町中津川に約二十日間滞在した記録のあることを思い出し、同庚申像の墨書きに天明六年十二月廿？日とあることと一致、明満上人六十九才の作と判明するに至った。

この庚申像に就て地元に伝わる話によると、もと中津川の庚申堂に祀られていたのが、後火災にあつて風雨にさらすままになっていた。ところがこの庚申像に触れた村人が相次いで病気になる、これはたりに違いないと村人が相談の上、田首久七という男に酒五升を与え、日高川へ流すことになったが、久七が庚申像を運ぶ途中、円通寺住職が見つけて貰い受け、境内の庚申堂へ安置したという。明治三十年頃の話である。

一方、木喰上人というのは、木の実や果実を食べながら修業を続ける僧のことで、木喰明満上人はその中の高僧。享保三年甲斐の国（山梨県）に生まれ、二十二歳の時仏門に入り、文政七年九十三歳で没するまで諸国を巡って修業を続けながら、千駄を越す仏像を残したと伝えられる。明満上人が彫刻した供養仏に添えられた奉納額にしばしば示された「日本順国八宗一見之行想、十大願之内本願として仏を仏師国、因縁ある所にこれをほどこす。みな日本千駄之内なり」の文句がある。つまり、供養仏の彫像は明満上人が立てた十大願の本願で、この成就のため驚くべき製作意欲を燃やしていたことが想像される訳である。仏像の種類も表現も多種多様で、中でも最も多いのが観世音菩薩と薬師如来であったが、この多種多様の種類や仏鉢の伝統的約束を熟知していたことは、同人に深い注意と十分な準備があったことにほかならないのではないかとわれている。

いずれにしても木喰明満上人の手になる庚申像の発見は、同人の研究を進める上での貴重な資料となった訳で、県文化財指定を受けた上で十分な保存策が望まれるところとなっている。

ほかに木喰明満作と思われる庚申像について、毎日新聞の和歌山版でも紹介されているが、平成二十六年六月四日（水）現在、県の文化財に指定されていない。

随筆みなべ集

昭和四十八年七月二・四日

南部地方に関する二、三の粗資料

私の所蔵する資料の中に「和歌山県下地租一覽表」明治十二年二月調査^(一八七九年)の写しと、「山林所有者調」大正八年頃^(一九一九年)の写しがある。このうち南部方面の人々で、この両書写しに名前を連ねている分を次に抜書きしてみる。

まず、明治十二年二月調査の「和歌山県下地租一覽表」に、筆頭に顔を出しているのは、日高郡小松原村(現御坊市湯川町小松原)の橋本太次兵衛氏で、地租額は千円余。第二番は西牟婁郡江川町(現田辺市)原和七氏の九百円余、つづいて御坊村の小竹佐兵衛氏八百二十三円余である。橋本氏は通称橋太の名で知られた県下有数の大地主で、その盛時には水田百余町歩を有し、広大な紀の川筋の米作地帯にも、橋本氏ほどの水田地主はなかったときいている。また第三番目の小竹佐兵衛氏は「紀小竹屋」の屋号で知られた御坊切つての名門であった。

地租額	村名	氏名	地租額	村名	氏名
二百十九円	東本庄	東善八	九十円	島之瀬	植田金蔵
二百十七円	南道村	田中太二郎	九十円	西本庄	大野総次
二百十三円	気佐藤	三前伊兵衛	八十円	東本庄	佐々木林造
百七十円	北道	大江与平	五十円	山内	玉井元右衛門
百円	東本庄	東善助	五十円	北道	長井松平
百円	筋村	渡口武兵衛	五十円	山内	中村六郎
百円	東岩代	有本安平			

次に大正八年頃調査の山林所有者をみると、これも橋本太次兵衛氏の四三六町五反四畝が郡内の筆頭で、以下南部町の三前伊平氏三〇六町五反一畝、藤田町の瀬戸佐太郎氏二九七町七反八畝がこれにつづくが、南部地方の関係者は

山林面積	町村名	氏名
一八五町	南部町	三前伊三郎
一八〇町八反九畝	高城村	植田金蔵
一二七町四反	清川村	大沢雅一

一〇八町八反	南部町	田中 幸太郎
九一町二反一畝	南部町	大江 邦樹
七五町八反五畝	清川村	下村 広一
七五町 六畝	上南部村	小川 国太郎

の名が記載されている。

明治十二年といえは既に九十五年の昔であり、大正八年からでも五十余年の歳月が経過している。有為転変は世の慣いで、ことにこの間には第二次世界戦争と、その後の農地解放や、経済界の大きな変革があった。

往年の地主にも自然、変革の大嵐は激しかった。私は南部地方の現状をつまびらかにしないが、恐らくこの地方にも幾つかの盛衰がみられることと思う。

さて拙稿は、ひとまずこれで終わるつもりであつたが、古いノートをくりかえしているうちに、これも南部町と関係のふかい興味ある記載が目についた。即ち次に掲げる「御坊と南部の人口変遷」と題する数行であるが、おそらく当時、御坊で発行していた「紀南新聞」の記事と推測されるものの、その出典の明記を欠いている。その記事には前記の「御坊と南部の人口変遷」という見出しの次に、

必要があり二十余年前の官報を繰り、御坊と南部との人口の変遷のあとを見るに、
と簡単な説明があり、つづいて

年 次	御坊／人口	南部／人口
明治二十九年	五一三八	五六七四
〃 三十 年	五三七〇	五七一一
〃 三十八年	五四四〇	五九一五
大正 元年	六三一二	六〇三五
〃 六 年	八一八三	五七八八
〃 九 年	九三八八	五八四二

とその数字をあげ、さらにこれも多分新聞記者の筆と思われるが、

即ち明治二十九年には南部村は御坊村より500人多く郡内第一たり。明治三十年両村共町となる。それが明治三十八年より御坊は断然、南部の上位たり。

との解説を寄せている。御坊と南部が町制施行を行ったのが、この記事のように明治三十年であつたのかどうかは、私にはいま確かではないが、明治末年から御坊町が南部町よりも、人口において上位になり、その差が次第に大きく

なつてゆくのは、御坊町がその頃からようやく地方の産業地域としての歩みを始めたからであろうし、それが大正初年の日出紡績の設立によつて、いよいよ決定的になつてゆくのである。

水 泳

「紀州新聞」昭和四十八年七月二十二日掲載

今年も七月に入つて、暑い日がつづきはじめ、新聞もテレビも河童天国の写真や、華やかな海水浴場風景を、くりかえし報道している。私はどうゆうものか子供の時分から運動神経がにぶく、スポーツはまったく苦手であつたが、たつた一つ水泳だけは人並みにできたし、すきでもあつた。そういうのも、私の生まれ育つた場所が日高川のほとりで、その外に家のすぐ側を、村では上川とよんでいる若野井溝があり、もの心ついた時分から川で遊び、水になれ親しんだせいである。

私が五つか六つのころ、大きな洗濯用の盥に水をはつて、中でちやぷちやぷ騒いだ記憶が、かすかにのこっている。小学校へ通うようになって、上級生が先生の引率で日高川へ水泳の練習に行くのを、一年生の私はどれほど羨しく眺めたことであらうか。そんな様子をみかねたに相違ない、孫かわいさの一念であらう、当時もう五十幾つかになつていた祖母が、日高川の浅瀬につれて行き、水で遊ぶ孫をじつと見守つてくれたのであつた。

昭和二十八年^{（一九五三年）}の大水害以後、日高川の様相はすっかり変つたが、以前はもつと河原が広く、ところどころに野茨や葦の群落があつて、野趣にみちたものであつたし、いたる所に浅瀬や淵が散在して、水遊びしたり泳ぐのにふさわしい場所がおかつた。夏休みがきて、毎日、ひるまでは日高川の堤で昆虫を追い回してすごし、十一時ごろから昼寝をするのであつたが、うとうと眠りについたかつかぬうちに、村の年かさの少年達が隊をなして、がやがやわいわい喋りながら、家の側の道を日高川へいそぐ声がきこえてくるのであつた。

もう、そうなると、昼寝どころのさわぎではない。とびおきて一散に川の方へと走り出したものであつた。おかしい話であるが当時の子供たちは、水着はおろかパンツさえ着けていなかった。上級生の中には褌をしめた者もいたが、大ていはノーパンツであつた。あれは小学校の四年生か五年生の時であつたと思つたが、いつものように丸裸で泳ぎ回っているところへ、これも小学生であるが女の子の一団がきて泳ぎまわつた。女の子たちはさすがに前を布片でおおっていたが、私は、ひどくはずかしい思いをしたことが、いまに忘れられない。フロイドの精神分析をまつまでもなく、もうおさない色気が芽生えていたのである。

そのころは、まだ筏も下つてきたし、川舟も一日にいくつか上下した。時には筏を岸にとめたままで、水待ちをし

ていることもあった。そうなると子供たちの、格好の遊びの舞台で、筏の下にもぐったり飛びこんだりして時のたつのも感じなかった。あまり長時間、泳いでばかりいると、唇の色が紫色になった。体が冷えてくると河原へ上って、焼けた礫石の上にねそべって暖をとり、また河中に入るのであった。

こんな調子で、泳ぎは誰に教わることもなく、またいつ覚えたともなく、見様見まねで知らぬ間にできるようになった。

今から思うと、その時分の悪童たちは、何かというと、よく隣村の少年たちと喧嘩したものであった。私の住む小熊の向いは上野口であったので、暴力ざたとよぶ程、大袈裟なものでなく、遠くから小石をなげ合ったり

「野口の餓鬼ら何くて生ける」

と悪口を大声で叫んだものであった。むろん相手方もだまっていはいない、すかさず

「小熊の餓鬼ら何くて生ける」

「ハエ釣ってくらう」

「ハエのない時なに食て生ける」

と、やりかえしたのであった。

やがて私も……：学校を卒業して、村役場に勤めたが、もうその頃は日高川では物足りなく、炎天下を尾の崎の浜まで自転車走らせ、無心で平泳ぎや背泳ぎをしたものであった。現代、中年以上の人なら誰でも知っているように、昔の尾の崎の浜はもっと広がった。その広い海岸の焼けた砂の上を水際まで小走りしたのだが、焼けつくように熱かったことをおぼえている。

無論いまの様に海水浴の設備はなく、泳いでいる人も数える程であったので、私は一人で心ゆくまで泳ぎまわった。日高川で練習をつんでいたので、海で泳ぐのはまったく楽なもので、土用波がたつて少しぐらい海が荒れていても、却っておもしろく波に乗ったり、潜ったり結構たのしんだが、それも遠い若かりし日の思い出となった。

徳本上人と木喰行道

「紀州新聞」昭和四十八年八月二十二日掲載

川辺町大字玄子の浄土宗・円通寺（豊島雄成住職）に、木喰行道上人作の木彫の庚申像が伝えられていることは、さきに本紙をはじめ各紙が一斉に報道していた通りであるが、私は更にその後の調査の結果や行道の略伝を、今秋、発行予定されている雑誌「あかね―第四号」に詳細すべく、すでに原稿を同誌の編集部にとどけておいた。

ところが最近になって送付ずみの原稿に書きもらした興味のある事実に気づいたので、この欄でとりあげてみたい。
木喰行道（一七八一―一八一〇）は天明六年十二月二日（一七八六）伊賀・伊勢・志摩を経て本宮と新宮に入り、その後、中辺路を下って同月二十日に南部、二十一日・島田、二十二日には野島と熊野街道を北上の上、二十四日から二十八日まで田井畠（現美浜町）の六太夫方に留錫し、二十九日には田井村（現美浜町）の喜平方に立寄り、入山村のケン八方に一宿したことが、行道自筆の旅日記「御宿帳」の写真版から知られる。「御宿帳」は続いて、

一、廿九日 入山 ケン八 天明七年一月

一、朔日 千津村 市三郎

一、二日 千津川 伊助

一、二日 ソバコ志ジスレイ 大行者ヨリ

一、三日ヨリ 中津村周助 天明七未正月廿日 中津川中オクル

一、廿日 廿一日迄 東光寺村 佐七

と記しているが此の日記のうち

一、二日 ソバコ志ジスレイ 大行者ヨリ

とあるのは、二日に大行者から蕎麦粉をおくられたという意味であろうと解されるが、大行者とは、そもそも如何なる人なのか、多くの木喰行道関係書にも、この点にふれたものはなく、無論私には想像すら及ばないことであった。

ところが本月十一日、たまたま円通寺住職の豊島雄成師と雑談中、師は木喰行道が日高地方巡錫の際、徳本上人と逢われているのではないかと話された。徳本上人年表（井上豊太郎著・念仏大行者徳本上人伝）によると、天明六年二月十七日（一七八六）から、寛政三年十月（一七九一）まで、徳本上人は千津川村落合谷において、言語に絶する厳しい苦行を修せられている。

上人伝の伝えるところに従うと、当時上人の念佛唱名の声は、早曉から深更まで落合谷に絶えることはなかったと云う。行道が天明七年正月元旦、千津村（川辺町土生）の市三郎方を発って、千津川村の伊助方に赴く際、当然落合谷を通っている筈であり、徳本上人の念仏の声をきいて、上人を訪ねたとしても、極めて自然であり充分考えられることであって、豊島師の所見はまことに傾聴すべき卓見と称すべきである。

私は豊島師のお話をきいているうちに、かねて疑問としていた、木喰行道に蕎麦粉を布施した大行者こそ、落合谷において念仏修行中の、徳本行者その人に違いないと考えるにいたった。

時に木喰行道は七拾歳、徳本上人は参拾歳、千津川落合谷に庵を結んで二年目である。周知の通りこの頃の徳本行者は、米麦と一切の火食を絶ち、僅かに少量の蕎麦と豆の粉のみを用うる日常であった。このような中で徳本上人が

行道上人に蕎麦粉を贈ったとしても、これはまたまことに自然な成り行きと思われるのである。されば行道の「御宿帳」に「ソバコ志ジスレイ 大行者ヨリ」の大方者を、徳本上人と断定して、まず誤りはなからうかと考える。

それにしても避穀断塩の徳本上人も、云わば木喰修行僧の一人であり、行道は自称するように宝暦十二年（一七六二）四十五歳の時、常陸国・羅漢寺の木喰観海上人の弟子になって以来の木喰行者である。年令の上では親子ほどのへだたりがあるとは云え、期せずして二人の木喰修行僧が、落合谷の草庵に相会したのは、まことに奇しき因縁という外はない。

斯うして行道上人は中津川村の周助方に二十日間をおくり、自作の庚申像を村にのこし、再び紀州路を北上して、四国路・中国路・九州路の各地に、自刻の仏像をのこしつつ、はてしのない旅をつづけ、徳本上人もまた此の四年の後に落合谷を出て、畿内一円から北陸・関東へと念仏一途の行脚をはじめるのである。

これは、この両行者の長い生涯のうちの、ほんのひと時の小さな出来事にすぎないが、私には何か一幅の宗教画をみるような気がするのである。

墨と古文書と句集

「紀州新聞」昭和四十八年九月二十二日掲載

龍神村東の古久保秀弥氏に、かねてからお願ひしていた山路墨が、郵便小包でとどいた。これまで話で聞いただけで、まったく幻の銘墨であつた山路墨を手にして、私は今ふかいよろこびにひたっている。

古久保秀弥氏からご恵贈いただいた此の墨は、長さ八・六^サ、幅一・九^サ、厚さ〇・六^サの大きさで、墨としてはやや小形のものであるが、表に「勇往邁進」と刻み、裏には「陽気発処金石亦透精神一到何事不成」とあり、横には「紀州製墨合資会社製」の文字がある。山路墨はかつて、和歌山県学童用墨に指定されたこともあると聞いたが、「勇往邁進」の墨銘や裏面の詩句から考えて、この墨もまた本県学童指定用墨の一つであつたのではないかと思われる。

最近の新聞報道によると、日高地方と縁故の深い南部の梅仙墨が、その保存会の人々によつて、実物そのまゝの模型づくりが進み、十一月初めには其の梅仙墨の展示と顕彰が行われるというし、海南市でも郷土史家の努力で、わが国でもっとも古い松煙墨として有名な藤白墨が、五十個だけ再興されたと話題を呼んでいる。

これらにくらべると当地の山路墨は、もちろん藤白墨ほどの由緒はないし、梅仙墨の芸術性にはとく及ばないが、それだけに実用性にとみ、庶民的な味わいが深いのである。古久保氏から贈られた一丁の山路墨は、さきにも記したように、そっくり掌に入ってしまう程の大きさにすぎないが、この中には幾らかでも生活を豊かにしようと、未経験

な製墨事業にふみ切った、大正^{一九二一年}十年代の山路松煙業者の悲痛な祈りや、汗と膏が練りこめられているような気がするのである。

山路墨が古久保氏よりとどけられるより少し前、これがかねてから依頼していた、製墨の原料である松煙関係の文書が、小山豊氏からかなり多量に郵送されてきた。先年寒川・龍神方面の古文書調査の際に、発見されたもので、江戸末期から明治初年へかけての、日高地方の松煙事業を知る数すくない貴重な資料である。

そうした折柄、今度は当地川辺町市川出身の、古い毎日新聞記者で、今は奈良市に在って悠々老を養っておられる西瀬英一氏の御奔走が実を結んで、俳諧の研究家である天理大学助教授植谷元氏から、私が十余年間、懸命にさがし求めて、ついに見ることさえ得なかった「爾時庵発句集」のコピーが送られてきた。「爾時庵発句集」というのは、高野山奥の院参道の傍らにある有名な芭蕉の「父母のしきりにこひし……」の句碑をたてた御坊出身の俳僧・塩路沂風の遺吟、百八十をおさめた句集である。沂風のことは私はこれまでに二、三回本紙上にのせているためくり返さないが、その経歴に不明の点が多い。そこで、この遺句集の中に、或はそれらを知る手がかりがかくされているのではないかと、その入手に八方手をつくしてきたのであった。

しかし「爾時庵発句集」はなかなか姿を見せなかった。何しろ此の句集は享和元年の冬（一八〇一）京の寺町通二条・橘屋治兵衛の上梓であるから、発行後すでに百七十余年を経ている上、沂風はそれ程著名な俳人でないため、その句集も余り広く知られていないまま、虫鼠の害で亡失した懸念があった。

ところが西瀬氏と文通を重ねているうち、「爾時庵発句集」が古書界で得られないとすれば、俳書の蒐集で知られる奈良市から近い天理図書館にあるのではないかと、その調査を依頼した。西瀬氏は早速その友人の前記・植谷元氏照会された結果、想像した通り、この句集は同図書館にあり、ほかにも豊橋市図書館と伊丹市の柿衛図書館に、それぞれ所蔵されていることが分かった。私はすぐにも天理図書館にとんでゆきたい衝動に駆られた。が考えてみると例え図書館を訪ねたとしても、江戸時代の俳書が、三時間や四時間で全巻を通読し写本でできるか否か、甚だ心もとなかった。重ねてそのコピーをお願いしたおいたのであった。植谷氏のお話では天理図書館の同句集は虫害がはげしくコピー難しいため、豊橋図書館本をコピーされたということである。

私は現在、古久保氏からいただいた山路墨と、小山豊氏からとどけられた松煙文書、それに植谷元氏から郵送された「爾時庵発句集」を机辺において、飽くことなく幾たびも眺めている。いろいろ不明の点の多い、山路墨や松煙、俳僧沂風の研究が、これらの資料によって、少しでも前進できるよろこびは云うまでもないが、私のような貧書生の願いを、こころよくかなえられた諸先輩の、一方ならぬ御厚情に、思わず涙が滲むほどありがたさをおぼえるのである。

梅仙墨展

「紀州新聞」昭和四十八年十一月二十二日掲載

晩年を南部町で過ごし、南部町で没した近代の墨匠・鈴木梅仙を偲ぶ梅仙墨展が、文化の日を中心に十一月二・三・四の三日間田辺市の公会堂で開催された。

明治から大正にかけて、文人墨客の間で、墨と云えば梅仙墨と珍重されたこの墨も、梅仙の没後、後継者が若く死んだこともあって、いまではすっかり使い切れ、地もとの南部町や田辺市にも殆んど残っていない。わずかに田辺市の野口利太郎翁が、古くから収集されており、私も十年ばかり前にその愛蔵墨をみせていただいたが、現代どうなっているか聞いていない。

折から昨年十月十三日ごろ、印南町切目の弘龍庵から、長さ一・六呎、幅七四釐、高さ六八釐の長持一杯の、梅仙墨の木型が発見された。梅仙墨の木型が弘龍庵に移った経緯は知らないが、梅仙翁の嗣子鈴木謙次郎医伯は、その晩年弘龍庵教祖に深く帰依しておられたから、謙次郎医伯から寄贈されたのではないかと想像される。また、翁の夫人玉枝は切目の人で、その墓碑も夫人の郷里、切目の光明寺に建てられている位なので、或は夫人の実家の関係かも知れぬ。

とに角、梅仙墨木型の発見は、田辺市の人々に大きな興味をよび、にわかに翁の研究と顕彰から、梅仙墨展へと動きはじめた。そのうちどこかで耳にしたのか、かつて私が本誌上に日高先賢列伝として、翁の小伝を連載したことを知って連絡があり、二・三回、田辺の研究グループに顔を出したりしたこともある。梅仙墨展へのご案内をうけた。

十一月三日は文化の日にふさわしい爽やかな秋日和であった。田辺駅でかねてからの計画に尽力して来られた浜田竜夫画伯と一緒に、公会堂まで同車した。会場は熱心な見学者で溢れていた。寺本幸吉・長井海風・山本賢の三氏にもお逢いした。

夥しい展示品であった。目録によると木型三百組、模造墨二百点、墨拓二百枚、遺墨六十個、梅仙書跡二十七点とある。私は一つ一つゆっくり見て回った。木型が発見された時は、バラバラの状態で、どれとどれが一对になるのか見当もつかなかった。よくここまで努力されたものと、自ら頭がさがった。

模造墨も側に模型の標識がなければ、本物と見分けがつかぬほど精巧にできていたし、墨拓も実に手際よく美しくとられていた。云ってみれば墨は文字をしるし、絵画に濃淡を表せば足りる筈なのだが、梅仙墨はそうした実用性から数歩進んで、全く一個の美術品となっていた。さすがに翁が八十三年の生涯を、この一筋にかけただけの事はある

と思わず溜息が出た。

そのうち私は数多い展示品の中に、おもしろい一本を発見した。それは表に、

日高郡菌浦 野村太兵衛

裏面に

醤油製造所

と刻んだ梅仙墨であった。野村太兵衛といえ、径山寺味噌本舗、堀河屋の二・三代前の御主人に違いないと、すぐに見当がついた。それにしてもそれがどうして梅仙墨と結びついているのかわかぬ。今でも田舎の古風な商家では、盆暮れには得意先へ粗品をおくる風習があり、或はその類かとも考えたが、商家のお歳暮に墨はどうにも不似合いの感をまぬがれない。

その後この疑問を抱いて野村家へお伺いした処、私の想像の如く太兵衛氏は野村家の三・四代前の当主で書画をたしなみ、その画稿や書跡や筆墨等が、いまでも野村家に遺されているということであった。したがって野村銘の梅仙墨は、太兵衛氏が書画用として、特に作らせたものとわかった。もって太兵衛氏の書画に対する傾倒が並々でなかったことが知られる。

そのほかに興味をひいたものに山路墨があった。これは大正十四年(一九二五年)ごろ当時の中山路村長久保要三郎氏を中心とする、紀州製墨合資会社が製造したもので、最近、私は龍神村東の古久保秀弥氏から、その一本を恵送されたが、出展されていたのは、「学の友」「春がすみ」「御大典記念八千代」「精華墨」「勇往邁進」「楽太平」「千鶴万亀」「福寿墨」「鶴力城」「竜登墨」の十本であった。そして面白いことに、この一群の山路墨は、梅仙展の直前に、偶然、前記久保家の土蔵から発見されたという。久しく幻の墨であった山路墨がまとまって見られたのは、思いがけぬ眼福であった。

会場にはこの外に墨の原料、山路墨の製造工程を、浜田画伯の筆で描いた色紙や、松煙窯と採集室の実物大の模型を展示し、かつての松煙職人がわざわざ山路から出張して説明にあたっていた。

今秋の文化祭にもいろいろの催物があったが、私にはこの梅仙墨展がもっとも興味をおぼえさせたものであった。

新年随想

正月の童歌

「紀州新聞」昭和四十九年一月一日掲載

君が代の年の始めの空みれば

豊はた雲に朝日さすなり

鰯玉集第六編上の巻頭立春の歌で、作者は浜武元興とあるが、実は紀藩の国学者で歌人・加納諸平作であったのを、元興に乞われるまま譲ったものといいい、その間の経緯は雑賀貞次郎氏の「南紀雑考」に詳しい。それはともかく諸平翁自身も、得意の作であったと伝えるだけに、いかにも新年にふさわしい、めでたい歌といえよう。思えば私も還暦はとくの昔のこととなったが、元旦はやはりなにか身のひきしまるものを覚えると同時に、子供のころをすごした大正初年の、のぞかであった正月の、そこはかと思いい出が胸中を去来する。

お正月

もういくつ寝たらお正月

.....

いつの時代の子供も、正月は一年中でもっとも待ちこがれるもので、こう歌わずにいらなかったのである。「年の暮れが近づく」と、子供らは戸外に出て、近所の仲間同志で群を作って、

正月さん、どこまでござった

きりきり山の、下までござった

おみやげに何もって

小豆俵に米俵

と一斉となえてまわる風習も、全国各地に見られる景観である。無論文句に多少の異同はあるが、正月さんを早く迎え様と、待ちこがれる主旨は共通している」

橋浦泰雄の「月ごとの祭」の一節であるが、有田川ぞいの山村では、

正月は何処から

杵ふりかたげて

小豆糞たれもて

金柑・柑子・たちんほ

さては蜜柑の枝折―

と大声で怒鳴りたてるのでした――と、これは笠松彬雄著の「紀州有田の民俗誌――昭和二年刊」の中に書かれている。
また逸木盛照著「紀州民俗誌――昭和四十四年刊」には、

正月どな(殿)ご座った

杵ふり担げて

観音山の峰まで

の童歌をのせている。逸木盛照氏は西国第三番・粉河寺の管長であるから、この童歌は紀の川筋、特に粉河町界限の
童たちの間でうたわれてきたのであろう。それにしても有田でも粉河でも、共に「杵ふりかたげ」と、杵をうたつて
いるのは興味が深い。ついで同書には、

正月来たら

お雪みたよな飯(まま)たべて

割木みたよな魚(とと)添えて

碁石みたよな餅(あも)てべて

ちやらちやら履いて

かべかべしようらよ

の童歌を収めている。ちやらちやらは雪駄の童語で、かべかべというのは、孔空錢を壁に投げつけて、これを打つ
遊戯である旨の註がある。

さて、わが日高地方であるが、私が子供の頃は、すでにこれに類した童歌は、あとを絶った様で、少なくとも私の
周辺ではうたわれていなかった。しかし私の老妻はその母親からきいたのに

正月きたら何うれし

赤いべべきてちやらちやら履いて

雪みたいな飯(まま)たべて

割木みたいな魚(とと)そえて

ひっぱる餅くて遊ばんかい

の童歌のあることを記憶していた。いうまでもなく「べべ」は着物の童語である。

赤い美しい晴れ着、歩けば、ちやらちやらと鳴る新しい雪駄、まっ白い米の飯、大きな魚、ふだんは貧しい生活をお
くっていた農山村の童たちに、それを一日中着飾って、腹いっぱい食べることでできる三カ日は、どんなに楽し
く素晴らしい晴れの日であったことか、石油危機とさわがれながらも、飽食・暖衣に慣れた、今の子供には想像もお

よばないであろう。ことに最後の「ひっぱる餅くて……」の「ひっぱる……」は、屑米と蓬がほとんどで、ねばり気のない平素も餅とはちがい、戦後のいわゆる純綿の餅であることを表現して妙である。なお老妻は印南町真妻の産である。したがってこの童歌は、切目川筋でうたわれたものであろうことを附記しておく。

灯火雑談

「紀州新聞」昭和四十九年一月二十二日掲載

塵紙からはじまった買いだめが、燐寸や蠟燭にまで波及したときいて驚いた。

いくら電力不足でも、まさか家庭の電灯が制限されようとは思わぬが、戦中戦後の停電時代を経験した人々が、期せずして蠟燭まで買いだめした気持ちには、私には十分わかる。

またしても古い話になるが、電灯がつくまでの家々は石油ランプで夜をすごし、それ以前は行灯をともしていた。然し私共が物心のついた頃は、既に石油ランプの時代で、油煙で曇ったランプを掃除するのは女性の役目であったが、時には子供達もホヤを磨かされたものであった。うす汚れたホヤに息をかけて古布で磨いた記憶が、今も私の記憶の片隅に残っている。

日高地方の家庭の灯火が、行灯からランプにかわった年代は、今ちよつと明らかでないが、恐らく明治も三十年代ではないかと想像する。行灯を芝居やテレビでみると風流であるが、実際はうす暗く不便で、これに代るものとして蠟燭が併用されたものの、経費がかさむため、農山村では殆んど使われなかったようである。つまり蠟燭は当時の高級灯火、都会むきの贅沢品であつたらしい。従つて蠟燭業は明治前半まで、かなり有利な事業であつたと考えられる。

というのは昭和^{一九四四年}一月和歌山県文化財研究会御坊支部発行の機関誌「あかね」の創刊号に、尾浦浩巳氏が「ハゼの実考」を寄せた中で、

東町中川家の第四代・第五代勝蔵氏（夫々嘉永二年——一八四九、安政二年——一八五五没）が、蠟燭屋をやられ、株井峠付近のハゼの実を日高川の川舟で御坊に運んできたという話、川瀬家第九代・第十代・第十一代九助氏（夫々安政二年——一八五五、明治七年——一八七四、昭和九年——一九三四没）の頃、ハゼの実を買い集め、蠟燭用の生蠟をとつて江戸へ船積みし、今も「ハゼ倉」が残り、当時の商標生蠟を流しこんだ容器を発見した。

旨を述べていることや、昭和^{一九四五年}十月、私が菌喜太夫家で拝見した「泉屋 菌喜太夫家由緒書」の中に、七世喜太夫（天保二年——一八三一生れ）が十三才の時回船業を廃業し、十九才の時、資金を借入れして江戸送り

紀州生蠟製造業をはじめ。

と記載されていること等から容易に想像されるのである。

さて蠟燭の話はこれ位にして、日高地方の灯火が石油ランプから電灯に変わったのは、昭和^{一九六三年}三十八年日高地方社会教育研究会編の「日高地方郷土史年表」明治^{一九一四年}四十四年の条に

○町内に電灯つく

とあって、明治^{一九一四年}四十四年が初めてであると知られる。町内とあるのは勿論、旧御坊町である。また西川裕氏編「上南部誌」の年表、大正^{一九二三年}二年の条には、

六月南部町に電灯がともった。
の記事がみえる。

ひよつとすると停電時代が再現するかも知れぬとなると、前述のように蠟燭の買いだめがおこった。それほど夜の灯火は大切である。石油ランプが電灯に変わったのは、まさに生活の一つの革命であった。にもかかわらずこの村でも、いつ電灯がついたか殆んど忘れられている。拙著「矢田村誌」でも年表に、「大正^{一九二八年}七年、インフルエンザ猖獗、電灯はじめて点く」とだけ記しておいたが、この大正七年をつきとめるのに、随分骨がおれた。

今でも忘れはしない、村へ電灯がつくという話が、どこからともなく子供の耳にもきこえてきた。間もなく人夫が入りこんで電柱を立てたり電線をひいた。物めずらしいので学校から帰ると、毎日工事を見物した。やがて内線工事が始まった。大抵の家庭は飾りのない十燭光一コだけであった。いよいよ今晚から電灯がつくという日、子供の私は朝から胸をおどらせて夜を待った。夕方、一斉に電灯がついたが、どうした訳か私の家だけはつかなかった。期待しただけに泣き虫の私はワツと声をあげて泣いた。やがて電工がきてちよつと手をふれると明るい灯がともった。スイッチが倒れていただけのことであった。

何でも秋から冬へかけてのことであつたと記憶するのであるが、それが何年のことなのか一向におぼえていない。あれこれ手掛かりをさがしているうちに、この年、近所に女の子が生まれ、その祖父に当たる人が電灯の記念子であると話していたのを思い出した。その子の生まれた年から勘定すると、私の部落に電灯がついたのは、大正^{一九二八年}七年で、私が小学四年生、十一才の冬とわかつた。もはや五十余年の昔のことである。

小山 仁 示 編

「紀州新聞」昭和四十九年五月十六日掲載

田淵豊吉議会演説集(2)

近代日本史専攻の小山仁示関西大学文学部助教授編集の「田淵豊吉議会演説集」②が刊行された。第1集が刊行されて、ちょうど一年目にあたる。

哲人政治家・田淵豊吉の真価は、一般に考えているような奇人とか、変人とかで律しられるものではなく、やがてわが国の政治史上で正しく位置づけられるであろうし、人間的な面での逸話は、これまで本紙上でしばしば紹介してきているので、ここでは繰り返さない。

ただ、すでにお気づきの方も多いと思われるが、今年一月二十二日付毎日新聞「人間雑話」松岡英夫と中野好夫の対談第一七回において、

中野―それからずっと後のことですから、今度の戦争中に和歌山県出身で、田淵豊吉という代議士がいたんです。通称田淵仙人といましてね、これがまた、トンチンカンなことばかり云っていたのだけど、しかし東条が総理大臣のときに……。

中野―あのころ元気でいたんですか。

―ええ、私、聞いていたんだから。

東条が国会の壇上で演説したり、質問に答えたりすると、当時の政治家は緊張して拝聴していたわけですね。シーンとして。その東条にヤジを飛ばしたのは、田淵だけなんです。＂しっかりやれえ＂とか云って(笑い)。そうするとすぐに「やっぱり仙人らしいや」で片づけられる。しかし何回も何回も和歌山県で当選するといふことは、本当のおかしな人のできるわけはないんでしてね。＂信者＂がいて、必ず当選させたんですね。相当えらい人なんですな。これは。

中野―＂仙人＂扱い(笑い)―敬遠しておるような存在でしたね(笑い)。これはやっぱり普通の人じゃない。

だから、そういうふうに変わったところだけ取り上げて、半気違いだとか変人だとか何とかいうのは、やっぱりその人の全部を評価したものではないということを感じるのです。―

と語られていることと、尾崎行雄記念財団刊行の「世界と議会」誌一九七三年三月号(一四一号)に「国会雄弁の秘密をさぐる」(8)として第四七回議会における田淵の関東大震災時の虐殺事件追及演説が収録された。これには「人道上の悲しむべき事件」とタイトルがつけられ「日本人の良心の叫びとして、わが国の議会演説史中にちりばめられた不滅の宝石であった」と紹介されていることを報告しておきたい。

また、東京在住の日本アルミット株式会社の専務、沢村経夫氏が是非田淵豊吉伝を書きたいと、今年二月十三日御坊市を訪ねて、浄国寺の田淵豊吉夫妻の墓に詣で、田淵和男氏などから田淵氏の追想談などを聞き、再訪を約して帰京された。

こうして田淵豊吉の没後三十年、徐々にではあるが田淵再評価の気運が盛り上がりつつある。折からその議会演説集の第2集が刊行されたのである。私はさきにこの第1集が発行された際、一冊でも多く日高地方の人々に見て貰いたいと、本誌上にその紹介記事をよせたところ、各地から申込をうけ私がおとどけをしただけでも五十冊を越えた。第2集も前回の関係もあって御世話するつもりでいる。御希望の方は私宅へご連絡いただきたい。

なお第2集はA五判二四二頁。定価二千円。早稲田大学時代、田淵の親友であった益子逞輔氏の「わが友田淵豊吉」が寄せられている。

丹生都比売神社

「紀州新聞」昭和四十九年五月二十二日掲載

三月二十四日県文化財研究会御坊支部主催の「紀北六社めぐり」に参加した。文化財研究会が選んだ紀北の六社とは、

野上八幡神社 海草郡野上町大字畑

三船神社 那賀郡桃山町神田

鞆淵八幡神社 那賀郡粉河町大字中番

丹生都比売神社 伊都郡かつらぎ町上天野

隅田八幡神社 橋本市隅田町

宝来山神社 伊都郡かつらぎ町萩原

である。この六社は何れも古い由緒をもち、隅田八幡神社を除く五社の社殿は、すべて国の重要文化財であり、外に鞆淵八幡神社の神輿、丹生都比売神社の銀銅蛭巻太刀(国宝)、隅田八幡神社の国宝、人物画像鏡等、世に知れた神宝がおおい。

話は私ごとになるが、私は数年前から機会あるごとに、丹生都比売神社参拝を文化財研究会に提案してきた。それがやっと実現したのである。誰にもまして心が弾んだ。私がこれ程つよく丹生都比売神社に惹かれたのは、実は先年、井上豊太郎先生の「真妻神社御由緒、丹生都比売大神」を読んだのが動機であった。井上先生の郷里、真妻村(現印南

町)には、丹生都比売大神を奉祀した真妻神社が幾つか鎮座している。先生は「真妻神社御由緒、丹生都比売大神」――A5判三二頁、昭和^(一九四〇年)十五年十二月二十五日発行――を執筆されるに当って、同年四月二十九日、上天野の地を訪ねられている。

その後、昭和四十六年十二月十日、白洲正子が紀行集「かくれ里」を刊行して、その中で丹生都比売神社をとりあげたのを読んで、私の丹生都比売神社熱は一層かきたてられた。

今から三十五年前の四月二十九日、井上豊太郎先生はゴルフ帽子と合服のポケットに集印帳一冊を入れただけの軽装で、牛車に腰をかけて遊んでいた童児に道をたづね、峠まで二十町、峠から神社まで五町という山道を登られたのであった。

……此山坂わまことに険悪な急坂で、杖でもついてよいしょ、よいしょで登るほかはない山道であるが、土地の人達は牛を追うて往復し居る。三步あるいてわ立ちどまり、五歩あるいてわ休み、のたりのたりゆく。山にそうて段々に田があり、折ふし百姓の人達が耕耘して居る。峠で弁当を食べて居る人もある。少しのぼつてふり返れば紀泉を境する葛城山脈が雲際にのびて、その一線に登りつづくる尾根のかずかずが大方わ松であらう。黒木を負うて、それぞれの形に霞んで居り、田わあおく川もあおく、汽笛が時々静寂を破つてきこゆる。風に吹き折られた竹を伐つて居る人達が二・三人。牛を追うてのぼる人が二人、その後から汗をふきふきついでてのぼる。牛を追いぬく事が出来ない。桜が花を残してゐる間に鶯が高らかにないて居る。空気がすんでゐるからよくきこゆるのである。

青葉若葉の山々をよき日に見渡してのぼる山坂わ決してゆるくないが、凹凸になった石ころ道ののぼり、あまり景色を賞して居るとまがない。のぼりのぼつてゆくと魚棒手ふりが、天秤棒の荷物をかたわらにして一服煙草を吸っている。きけば峠まであと五丁だと云う。やつと来たかと思つて元氣を出してのぼる――

なつかしいので思わず長い引用になったが、井上先生が苦勞して登られた峠道も、今はバスでアツという間に頂上に達した。星山峠の標札が立っていた。ここからはゆるやかな下りで、もう上天野の里であった。瞬間に私はこれも文化財研究会御坊支部の主催で、数年前訪ねたことのある柳生の里を思い出した。

まったくよく似た風景であるが、上天野の方がやや規模が小さいのではないかと感じた。周囲になだらかな山々がつらなり、その中に水田を中心にした耕地がひらけ、小丘の裾に一軒二軒と農家が点在していた。柳生の里は当時テレビ放送のせいで、すっかり観光地化していたのくらべ、ここは白洲正子が「かくれ里」として取りあげた程で、あわただしい世界の動きの中で、ぼつんと忘れられたような別天地であった。道路もバスが通るのが精一杯なら、観光客らしい人の姿はどこにもなく、土産物店もみかけなかった。

細い村道をバスが苦勞して神社の前に着いた。すぐ写真で馴染みぶかい朱塗りの太鼓橋を渡る。長さ十間一尺余、広さ一間一尺で建立年代は不詳であるという。社務所で昼食後、神官の説明を聞き乍ら、一同参拝する。松田寿男氏の説によると、ここは全国に百三十八社を数える丹生神社の総本社で、祭神は丹生都比売大神、採鉦と農耕の神といわれ、大正十三年、旧官幣大社に列せられた。

「何しろ寒さのきびしい所です」と説明の神官が云われたように、三月ももうまちかいのに、境内はかなり冷え込みが強かった。

私たちが天野に来るまで参拝した野上八幡神社の神殿は、修復してまだ日を経ないし、三船神社は解体修理中であつたが、丹生神社の楼門も神殿も、桧皮葺きの屋根には落葉が積もり、極彩色の優雅な丹青の色も古びて、それが却つて森嚴さを加えているのであつた。

天野の里にはこのほか、西行堂の跡をはじめ横笛の恋塚、涌ノ宿と護摩修業の跡、貧者の一灯お照の墓、育王丸・鬼王丸の墓、その他史跡がおおい上、古くから天野の祝と御坊市の小竹の祝の伝承がある。天野の里だけに一日をかけて再遊したいと考えている。

十津川から伊勢路へ

「紀州新聞」昭和四十九年五月二十三・二十四

二十五・二十六・二十八日掲載

① 玉置神社

川辺町文化財員がつれだって、町内手取城の城主玉置一族と縁故の深い、奈良県吉野郡十津川村に聳立する玉置山上（一〇七六）ちかくに鎮ります玉置神社参拝の上、その夜は同社の社務所に一夜をすごし、翌日は三重県度会郡大宮町の国道四二号線のすぐ側に鎮座する滝原宮（元伊勢）を拝み、さらに旧紀州領の田丸城址を見学、近村宮古の広泰寺にある日高町小池出身の藩政末の土木家白井久蔵の墓前に額ずき、次いでこれも旧紀州領の松坂城址と、同城内に移建されている本居宣長の旧居、鈴屋を訪ねた。

五月八日八時一五分、一行は事務局の西瀬又平主事の運転する車で町役場を出発した。一一時一五分湯の峯温泉に下車して薬師堂に参詣、同地出身の山本元峰老師の元峰塔を仰いでその高德をしのび、一一時三〇分出発した。メーター計はここまで一一〇^キを示しているという。午後一時本宮大社を拜んで昼食をすまし、いよいよ玉置山へ向かう。本宮まではこれまでも何度かきているが、ここからのコースは初めてである。流れはすでに十津川であり、村もは

や奈良県十津川村である。新宮市から五條市に通じる国道一六八号線を折立という部落でわかれ、玉置山に登る林道に入る。見上げるような山の斜面を、車はぐるぐる回りながら上ってゆく。十津川方面の山脈がはてしなく波濤のように連なっている。護摩山登山道よりもやや道幅が狭いが、その道も尽きた。ここからは車を路傍において約五〇〇歩を、歩くよりほかはない。時に午後二時二〇分、出発して六時間余りである。

各々荷物を片手に大きな石を飛びこえたり、またいだりしながら、原生林の間を上ってゆく。所々に自然のまま枯れ朽ちた巨木が道のすぐ側に倒れている。ほとんど道と云えるほどの道ではなく、入口に「玉置神社参拝道」の木札がなかったら、誰も気がつくまい。木々の若葉が滴るように目にしみる。いそぐ道中ではないので、健脚なら二〇分ぐらいというのを、ゆっくりゆっくり上る。

ようやく平坦な道に出た。左右は黒々とした杉木立で、道の片側に植えられた石南花が、あでやかな花をみせていたが、神社の境内に入ると、どこにもここにも大きな株に成長したのが、いずれも九分咲で目を見はるばかりの美しさであった。

元禄十六年（一七〇三）に改築され、その後数回の補修を経たという。桁行・梁行ともに一二・七畧、桧皮葺き入母屋造りの本殿は境内の一段小高い地に、天をつく老杉を背後に奉祀されている。神社の発行する「玉置神社由緒略記」に従うと、

神武天皇熊野に上陸、八咫鳥の先導で悪党を亡してこの宮に兵を休めたと伝えられ、崇神天皇が玉城鎮護と悪神退散のため早玉神を奉祀し、以後玉置と名づけた。天安二年（八五八）智証大師が那智に参籠の後ここに修法加持し、以後神仏混淆となったが、平安時代以降修験道の本拠となり、熊野三所権現の奥の院として信仰を集め、花川院・白河院・後鳥羽院・後嵯峨院が参拝した。

元禄四年（一六九二）京都安井門跡派となり、享保十二年（一七二七）京都聖護院派に属し、別当高室院を中心に七坊十五カ寺が境内に点在して、社僧数百人を擁した。降って明治六年（一八七三年）十津川全土の氏神となった。本社の祭神は、「国常立尊・伊弉諾尊・伊弉冉尊・天照大神・神武天皇」であり、境内には三柱神社・若宮神社・神武神社・玉石神社の摂社・末社が鎮座する。

とあるが、神社発行する由緒略記は所詮、由緒略記である。

私としてはもう少し確かな史料をさぐりたいのであるが、あいにくなことにてもとには十津川方面の地誌を持っていない。ようやくにして、紀州山の会編著の「紀州の山々——昭和四二年四月三十日発行——」に玉置山が取りあげられているが、玉置神社については神社発行の由緒略記を多く出していない。「この点最近再版された昭和二八年と二九年の両年に行われた地方史研究所の熊野三山の総合学術調査の報告書「熊野」の第二編玉置山が、きわめて有益であ

った。いまその概略を記すと、

上代における玉置山に就いては史料に著われたものが無いのでよく判らないが、玉置の信仰は古くは山の崇拜、玉や石の崇拜に発したものである。十津川の山手谷や熊野の切畑等周囲の集落から仰いで、玉置の神秘的な山容が対象となったことは考えられる。玉や石を神体とすることは、古典や考古学・民俗学の調査の結果、多く知られている。玉置山においては山頂に近く玉石神社と称する末社が鎮座して、地上露出の丸い石を神体としている。この玉石社のことは「玉置山縁起」「玉置三所権現両部習合之巻」「入峰行所秘記」等に記され、これらの諸記によれば、玉石社は地主神・地主権現或は玉置神社の奥の院と称せられ、ここに大己貴命(おこなむちのみこと)を祀り、玉置の称号はこの石から初まるというものである。玉置はタマイとも訓じ、これは玉石から転訛したものだろう。この玉石の神体・地主人の性格・祭神大己貴命たることの三項は玉置信仰の根源である。――下略

とある。

有名社寺と云えば近年は信仰よりも次第に観光の対象になりつつあるが、玉置神社にはこの日、私ども四人のほかに一人の人影もなく、千古の老杉の中に鎮まります社殿は森厳をきわめ、神社とは本来かかるものでなかったかと思激をふかくした。本殿に参拝をすまして、私どもは社殿の背後の樹令三千年、目通り回り八丈四〇、高さ二八丈の神代杉を仰いだ、この杉のほかにまだ常五杉、磐余杉等、神代杉級の巨木が千年の翠を伝えて、幽邃さは形容の言葉もない。

ところで私はさき程からこの神社の奥の院と云われる玉石社に、しきりに心が動いていた。出発に先だつて読んだ「熊野」にも記されている通り、玉石社の御神体の玉石こそ、玉石神社の根源であり原始信仰の姿を、そこに見られるに違いないと考えたからである。

玉石社は本殿からさらに一八〇丈程の山上にあった。二本の老杉の間にちょうど鏡餅を大きくしたような円い石があった。周囲には簡素な瑞垣をめぐらし、小さな遙拝所があった。恐らく古代の人々はこの石に、神が降りられたと信じ拝んだのが玉置神社の起源であろう。私は古代人の原始的な信仰をそこに見るような気がした。

山の夜は暮れるのが早い。私たちは三万平方丈の境内に叢生する老杉群の中の、権現社時代の高室院を改装したものという桁行三一丈、梁桁一六丈の社務所に落ちついた。各室は杉の一枚板に狩野派の絵師が筆をとった極彩色絵の板ふすまで仕切られているが、その描かれた画題によって、鳳凰の間・竜虎の間・鶴の間・孔雀の間・老松の間等にわかれ、板ふすまは総べてで七〇枚におよぶ豪華さであった。私たちは鶴の間に宿泊した。

さて日高郡誌等に従うと、和佐手取城主玉置氏は、その遠祖で玉置神社の神官左衛門尉直光の二子が日高郡山路に

来住し遂に、和佐手取城と山路鶴カ城にわかれると伝えるのであるが、山路と玉置山とはかなり遠隔の地であるのに、
どういふ理由で日高の地に来住したものであろうか。玉置山に現存する古文書はすべて江戸時代のもので、この経緯
を明らかにする史料は見るを得ないという。

② 滝原宮

五月九日、雨の音で目をさました。外は深い霧が立ちこめていた。八時二五分、今早朝この宮に辿りついた東京の
青年一名を加えて、一行五名が下山の途についていた。八時五五分折立を通過、一二時二〇分滝原ノ宮に到着した。

滝原の宮は国道四二号線のすぐ側に鎮座している。古くから元伊勢と称され、老杉を中心とした鬱蒼と茂る広い社
叢は、伊勢湾台風によって荒らされた伊勢神宮の社叢よりも、はるかに神々しい。私が滝原の宮を知ったのは数年前、
この地を観光バスで通った時であったが、無論、下車する自由はなく車窓から眺めただけであった。その後、昨年で
あったか一昨年であったか、再び観光バスでここを通り、その見事な社叢を驚異の目で眺めただけで素通りした。

数年来の念願がかなって、ようやく其の神苑に足を入れることが出来た。細かな雨が降っていた。ところで滝原の
宮のことも出発に当たって諸書で下調べしたが、三重県の地誌をもたぬ私には詳しいことは分からず、ようやく鳥越
鳥越憲三郎の「伊勢神宮の原像」と、金達寿の「日本の中の朝鮮文化④」によって、その一斑を知ることが得た。

滝原宮と伊雑宮（いざわのみや）は、古くから元伊勢と称されてきた。両宮ともに内宮の別宮とされていたもの
である。

元伊勢という用語は、そこがかって天照大神を斎き祭った所であることを意味する。両宮が内宮・外宮と地理
的に遠く離れていても、特別に重視されていたことが分かる。内宮・外宮の和魂・荒魂の宮に次ぐ重要なもの
であったのである。「延喜式には」

○ 滝原宮一座

大神宮の遥宮・伊勢と志摩との境の山中に存す。大神宮を去ること西九十里。

○ 滝原並宮一座

大神宮の遥宮・滝原宮地の内に存す。

右の記事で滝原の宮は、伊勢と志摩の境の山中とあるが、現在は度会郡大宮町に属し、紀勢本線滝原駅に近く、
国道四二号線に沿っている。桧の巨木の参道を進むと、奥まった宮地に滝原宮と滝原並宮（ならびのみや）の社
殿が並んでいる。他の別宮と同じ形式の社殿である。

ところが実は滝原宮の前の道が、古代の紀南にでる主要道路で、後に熊野から伊勢に向かう参宮道でもあった。

この地理的位置は特に重視しなければならない。滝原の宮のある場所は、古く熊野四郡を支配していた熊野国造の旧領域の入口にあたっているからである。

というのは古代の戦いにおいては、まず敵地の入口で神を祭り、その神域によって征討が行われたからである。熊野地方の征討の場合も同じで、熊野の入口で天照大神の戦勝祈願が行われ、敵の守護神との間で、まず神と神との戦闘が開かれる。強い霊力を持つ神を守護神とする部族が勝と信じられたのが、古代の戦いに見る宗教観念であった。滝原の宮を熊野地方を征討の際に神祭りした場所と見ると、後にそこが元伊勢とよばれ、別宮として特別に扱われた事情も分かるであろう。「倭姫命世記(やまとひめのみことせいき)」や「御鎮座伝記」の神道五部書では、梅原の宮の祭神を水戸神(みなとのかみ)、即ち速秋津日子神(はやあきつひこのかみ)とし、並宮は妹速秋津比売神(いもはやあきつひこのかみ)と記している。滝原には四八滝があつて、地名もそれによると云われるが、後世に祭神が不明になって滝にちなみ、神話で創造神の伊弉諾尊・伊弉冉尊が所生したという水戸の神に結びつけたのであろう。

現在は社殿の前に表札があつて、滝原宮を天照大神の和魂、同並宮を荒魂であると記している。その説明はともあれ、元伊勢とよばれる以上、かつてそこで天照大神を祭られたことは確かである。

以上が「伊勢神宮の原像」の中の滝原宮要点である。

参道は巨木におおわれて薄暗い。ここもまた一人の参拝者もない。神宮庁の建造物が型の通り設けられているが人影はない。所々に立枯れになった巨木が朽ちている。やや明るい広場に出たが、ここに伊勢神宮をいくまわりも小型にした、同じ型式の神殿が並んでいた。まったく飾り気のない古代の神社の型式が伝えられているのである。近くに建築小屋があつた。伊勢神宮と同じく遷宮をされる工事がはじまっているのである。

同じ道を引き返す途中で白衣の三人の男に出逢った。遷宮工事の宮大工であつた。

昨日参拝した玉置神社は海拔千以上の余の、人跡絶えた原生林の中に鎮座していたが、梅原の宮はまったく平地の中の深い社叢の奥にひっそりと鎮まっていた。神の鎮まります地は、本来このような姿であつた筈であると、何か古代の人々の心にふれたような気がした。

③ 田丸城址

旧藩時代、三重県の松坂と田丸、それに白子付近は紀州藩に属し、勢州一八万石といわれた。「南紀徳川史」によると、

田丸領 六万二千十三石

松坂領 七万四百七十三石
白子領 四万七千八百二十石

とある。このうち田丸領の鎮め田丸城は、現在の度会郡玉城町にあったが明治五年^(一八七二年)廢城となり、今は城跡のみがのこっている。先年私はこのすぐ近くにある玉城町商工会を、二回にわたって見学しているが、両度ともついに城址を訪れる機会を得なかった。

すでに雨はやんでいた。総面積十町歩に近い遺構は、かねて想像していたよりも堂々としていた。本丸・天守台・二の丸への石段をのぼる。いわゆる平山城のことで石段も余り高くなく、道の左右は雑木と雑草が茂っていた。本丸跡に歌碑があり、それには、

田丸町の久しく望める城山の町有となりし時
幾千とせかはらぬことを祈るなり

この城山はさとの神

勲二等 村山竜平

とあり、碑陰にはこの城の由緒を次のように刻してあった。なお村山竜平は周知のとおり、朝日新聞の創立者で、かつ社長であった人である。

田丸城ハ初メ田辺郷田丸ノ城ト称シ伊勢古名城中最モ著ル。此地ハ古ニ所謂外宮丸ノ御厨ニシテ神宮ノ御領外衙タリシモ中古武家ノ所領トナリ延元・正平ノ間南朝ノ諸將此ニ拠リ伊勢国司北畠顯能公ニ属シテ忠勇義烈克ク吉野朝廷ノ藩扉トシテ威ヲ振ヒ攻防力戰屢々足利ノ大軍ヲ擊破セリ。爾来北畠ノ族愛洲氏ヨリ田丸彈正弼親忠・織田信雄・稻葉藏人道通等ヲ経テ元和五年ニ至リ徳川頼宣公紀伊ニ封ゼラルニ際シ將軍秀忠公特ニ久野丹波守宗成ニ賜ヒ城郭ノ結構頗ル雄深ヲ加ヘ連綿三百年英俊相承ケ嚴トシテ封守維レ堅シ。久野氏ハ代々敬神尊皇ノ志深ク常ニ神宮ノ守護ニ任ジ屢々神馬ヲ獻奉ス。又憂国ノ念厚ク安政年間^(一八五四年)他藩ニ率先海防ヲ整備セリ。明治二年^(一八六九年)城地返上廢毀サレ帝室御料林ニ編入大正十年^(一九二一年)御料地ヲ解除セラル。蓋シ城山ハ田丸町發祥ノ記念ナルヲ以テ夙ニ永久保存ノ議アリ数次払下ヲ請テ就ラズ出願更ニ回ヲ重ルニ及ビ遂ニ昭和三年^(一九二八年)五月御料地面積九町九反六畝廿八歩ノ払下許可指令ヲ得タリ。田丸出身ニシテ深ク郷土ノ興隆ヲ念トセラルル村山竜平翁ハ有力ナル町ノ指導後援者タルノミナラズ城山遺蹟保存ニ就キテ年来熱心首唱アリ払下ニ際シ金三万円ヲ町ニ寄附セラシ。多年ノ宿願茲ニ初テ成就。町民ノ歡喜何物カ之ニ若カン。田丸町ハ久野城主ノ恩沢ニ浴シ神ヲ敬ヒ国ヲ愛シ淳厚ノ民風今ニ存シテ忠誠ノ精神永クカワラズ。由緒深キ城山ハ実ニ是町ノ鎮護ナリ。即チ村山翁ニ国風一首ヲ請ヒテ碑ニ刻シ其ノ篤志ヲ感謝記念スルト共ニ我等ノ為ニ示サレタル尊キ教訓ヲ不朽ニ伝ントシ茲ニ要旨

ヲ誌ス。

昭和六年二月^{（一九三一年）}

田丸町民一同

長い文章である上、必ずしも名文と云いにくいだが、後日の参考のため四人がかりで読み下したり写しとった。「日本城郭全集」によると、

元和五年（一六一九）頼宣の時、松阪城と共に和歌山藩領となり、家老・久野宗成が入城した。以後代々支配して明治に及んだが明治五年^{（一八七二年）}廃城した。その後昭和二十年^{（一九四五年）}代にこの遺跡を破壊して学校の敷地とした。現在鉄筋コンクリート建築のあるところは、代官屋敷の跡である。

と説明している。

城址を下った私たちは更に車を走らせて、同町宮古の禅刹・広泰寺に、この地の人々によって天保十四年八月（一八四三）に建立された、日高町小池出身の土木家・白井久蔵の墓を拝んだ。久蔵の事跡は「日高郡誌―人物誌」に詳述されているから、就いてみたい。

④ 松坂城址と鈴屋

翌十日八時五五分鳥羽の旅館を出て正午少し回った時刻に松坂城址についた。まず近世国学の大家・本居宣長を奉祀した本居神社に参拝して、すぐ城内に移転した鈴屋と、本居記念館を見学する。

本告宣長については今さら説明の要もないが、近世国学の大家で古事記伝の著者という外、特に紀州とは縁故が深く、寛政四年（一七九二）には、徳川治宝に仕官して五人扶持を受けている上、同六年一〇月一〇日紀州公の招きによって、松坂を出て一七日和歌山に入り、一月二六日には有田郡千田の須佐神社に詣で、同夜はその神官宅に泊り、後に「紀見のめぐみ」の一書をなしている。また宣長随筆「玉勝間」には日高地方のことも、しばしばとりあげられていて、私にはなつかしいのである。

さらに最近刊行された立原正秋の紀行文集「風景と慰藉」の中で、「伊勢路をゆく」として、伊勢神宮や本居宣長を論じ、

上田秋成に、宣長と論争した「往々笑解・呵刈菟」という一文がある。宣長の古代に関する論を読むと、何とも神がかり的なものが多く、上田秋成はこれに対して明晰ともいえるほどの批判を加えている。それは、宣長の国学的信念に対する合理的な批判であった。宣長は秋成との論争で、都合がわるくなったり、自分の弱点をつかれたりすると、「いと愚かなり」と罵倒している。和辻氏もこの点についてふれ、「これはもう議論にも何も

なるものではない」と宣長を批判している。――下略――

とあるのを興味ふかく読んだばかりであったが、それはそれとして宣長の国学古道と言語音韻学上の大きな業績は、常人のよくするところではない。

私たちは記念館内の宣長の遺品や著書を見て、記念品館に続く鈴屋の前に立った。質素な住居である。現代のサラリーマンの住宅と同じで、この中二階で古事記伝をはじめ数々の名著が生み出されたと思うと、自ら襟を正さざるを得ないのであった。

もう昼食の時刻はとくにすぎていた。鈴屋のすぐ側が有名な藤の大株のあるところで、もはや盛りを越したとは云え、蔵棚の面積一〇五坪、樹令三〇〇年、幹周五^ノ余との標札のある見事な大藤の花を賞しながら軽い昼食をとる。さて、松坂城について手もとの参考書に従うと、本丸・二の丸・三の丸からなり、共に石塁を築き、本丸の中心に三層の天守閣があり、各櫓や表・裏門等棟数一一を構えていたという。現在は本丸跡に松坂開府の碑というのが建っており、その碑文は次のとおりである。

松坂開府の祖は蒲生飛彈守氏郷であり、天正十六年西暦一五八八年八月築城と共に城下街の創設を了え同十八年八月十七日氏郷が会津若松に移った。

その後服部采女正一忠を経て古田兵部小輔大膳太夫重治の代二十五五年間の在府に城の修補と商工都市の整備を遂げ、次いで元和元年^{一六〇〇年}五月徳川大納言頼宣これを鎮して明治維新に及ぶ。開府以来三百六十余年、今茲に郷土先人の事跡を回想してその徳沢を追慕し、録して之を後人に伝える。

^{一六〇〇年}
昭和二十五年六月

松阪市長

庄司桂一 撰文

松坂城跡の見学をもって今回の旅行の目的がすべて完了した。玉置神社といい、滝原の宮、また田丸・松坂の両城跡、或は鈴屋と私の久しい間の宿願が達せられ、今は思い残すところはなかった。軽い足どりで大手門の石段を下った。

(昭和四十五年五月十九日)

信覚上人の碑について

「紀州新聞」昭和四十九年六月十二日掲載

菌・無名氏からの御手紙について、旅行から帰った上で、お返事を申し上げる旨、本紙談話室を通じて御連絡いた

しましたが、雑用に取りまぎれ、大変延引いたしました。

御手紙の内容は私だけではなく、他の読者の方々にも参考となる所が多いと思われますので、失礼ではございますが、その一部を公表させていただきます。

―常に紀州紙を通じて先生の御文を拝読させていただき、茅屋に坐して各所の精緻極まる光景に接する思いして有難いナアとひとり悦に入っております。

老いていよいよ老耄の域におるのに、ものを知りたいと思う心が消えず、先生の碑巡礼など興味をもって拝読さしていただきます。五・二六日付の碑巡礼五七三、来迎寺境内の信覚上人の碑の文面中のいっ●ち●よう●の●文字●に●思●わ●ず●ひ●つ●か●かり●ま●し●た●。●写●真●の●碑●の●文●字●も●正●し●く●い●つ●ち●よう●で●あ●り●先●生●も●い●つ●ち●よう●と●お●読●み●さ●れ●て●ご●ざ●い●ま●す●。●私●眞●宗●者●と●申●せ●ば●は●ば●かり●ま●す●が●、●眞●宗●本●願●寺●派●の●壇●信●徒●の●一●人●で●あ●り●ま●し●て●、●仏●教●に●い●さ●さ●か●興●味●を●も●つ●て●(●眞●宗●の●み●)●お●り●ま●す●。●本●願●寺●派●で●は●現●在●僧●分●の●席●順●、●親●座●以●下●を●略●す●。●直●・●特●・●正●・●上●・●本●・●列●の●七●級●で●、●各●級●を●又●七●等●分●し●て●四●十九●に●細●分●し●た●順●序●が●あ●り●ま●す●。●他●宗●派●の●事●情●は●全●く●知●り●ま●せ●ん●が●、●上●藤●・●一●藤●・●二●藤●な●ど●聞●い●た●こ●と●が●あ●る●気●が●し●ま●す●。●角●川●書●店●発●行●の●古●語●辞●典●を●よ●そ●か●ら●お●借●り●致●し●ま●し●て●見●ま●す●と●、●一●藤●・●一●臘●は●共●に●年●の●意●か●ら●僧●の●修●業●を●し●た●年●数●を●い●う●。●又●一●藤●は●最●も●修●業●の●功●を●積●ん●だ●長●老●格●の●僧●を●言●い●、●次●席●を●二●藤●と●い●う●と●あ●り●ま●す●。

上藤は年功を積んだ高僧、または身分の高い人、身分の高い女性、身分の高い女官二位三位の典侍なっております。井上先生の書といい、先生の読みといい、そこにソツのあり得ようがありません。

無学の私、老いてまた一つ智識を得たと喜ぶのであります。

ご多忙の折柄つまらぬことを申し上げ、貴意をお煩わし申してはと思いましたが、気づきし俚申し上げました。以上が無名氏のお手紙でありますが、つまらぬことどころではなく、大変ありがたい御教示であります。本願寺派の僧分の席次などはお手紙ではじめて知ったわけで、こちらの無学こそはずかしい次第であります。

さて問題のいっちょうの文字でありますが、私の原稿では写真の文字のとおり、一ちょう即ち草冠に腸を書いたので仮名書きはしていませんでした。しかしあの文字は割合使用されることの少ない、特殊な文字であるため、恐らく新聞社の方で活字が見つからなかったものでありましよう。編集室で仮名書きに改められたのであります。実は私も一ちょうにの仮名書きに先ずひっかつたのであります。と、間もなくやはり読者の方からお電話で、あの読み方は「一ろう」の誤りではないかとの申し出があり、私も深く考えず「一ろう」の誤りですと、お返事しました。その後へ、あなたのお手紙が参りました。

そこで、初めて手もとの辞典を二・三調べて見ましたが、写真にみられる草冠に腸の文字の読みは、いずれも「ち

よう」であって「ろう」ではありませんでした。或は「臆」の旧字ではないかと、その点も調べてみましたが、そうでもなく全く別の意味をもった文字であることが分かりました、なお不安が残りましたので諸橋博士の大漢和辞典にも当たってみました。ところが私のはあとの原稿を書く際、日高郡誌を参照しなかったことを思い出して、今度は同書の人物編をひらいてみました。同編「学雄」のケ所に、

―初め丹生来迎寺にて得度、信覚と称し、文政十年（一八二七）同寺住職となり在住十年。後京に上り禅林寺に

碑（いぶき）土礼 (573)

信覚上人の碑

清水長一郎

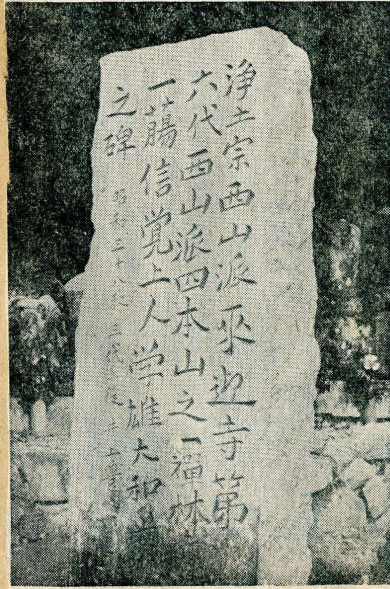
浄土宗西山派来迎寺第十
六代西山派四本山之一禅林寺
一ちやう信覚上人学雄大和尚
之碑

昭和三十八 三代之後

井上豊太郎 建

来迎寺の境内に足を入れたとたん、思いがけぬ碑が目についた。井上豊太郎先生が建立した信覚上人の碑である。信覚上人の生涯を日高郡誌から抄録すると、

上人は印南町崎ノ原、井上清右衛門の弟で、初め丹生・来迎寺に於て得度し信覚と称した。文政十年（一八二七）同寺の住職となつて、十一年間在住した。後には京に上り禅林寺の役僧を勤め、また洛北の宝池寺にも住んだ。学は仏教と儒をかね歌と俳諧をた



しなみ、書に巧みで武芸にも秀でていた。ただ大酒をしたため体を書ねて村に帰った。一時、瀬見善水に漢籍を講義したこともあったが、後西牟婁郡日置町の正覚寺で遷化した。上人の在京中、尾張の福林寺の任職の候補にのぼったりした程で、すぐれた僧侶であつたらしい。

私は井上先生から屢々、上人のお話を耳にしたことがある。同じ井上姓である点から考えて先生が三代之後と自称されているように、同族に当るのであろう、それにしても先生が信覚上人の碑を建てられたお話は、きかされたようでもあり、きかなかつたようでもあり定かでないが、先生晩年の特徴のおおい文字に接して、なつかしさがこみあげてくるのを覚えた。

（昭和四九・二・二三）

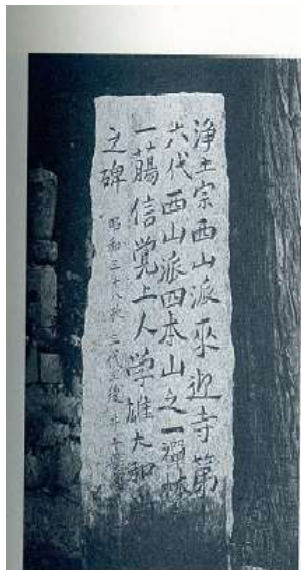
印南町 52

52 信覚上人の碑

浄土宗西山派来迎寺第十
六代西山派四本山之一禅林寺
一藤信覚上人学雄大和尚
之碑

昭和三十八秋 三代之後

井上豊太郎 建



上 昭和四九・五・二九「紀州新聞」掲載「

「信覚上人の碑」

一ちやう信覚上人学雄大和尚と見える。

右 「日高路の碑巡礼」平成十年十月十日発行

「紀州新聞」連載をまとめたものの部分
コピー。

一藤と校正している。

一藤の役僧を勤め洛北宝池寺住す。―下略

とあり、碑にある一ちようの文字は、一藤の意味で使っていることがわかりました。とすると、一藤、或は藤と書くべきところを、どうして「ちよう」の文字を用いたのか疑問がのこります。

あなたも申されるように、井上先生ほどの方が、間違つて「藤」の文字を選ばれたとは考えられませんか、石工の彫り誤りとも思われません。この点いまのところ私には考えが及びません。大方の御教示をいただき得ましたら幸いです。

なお、一藤の意味については、貴説のとおり、仏教辞典や大言海などにも記されていますが、お手紙を拝読してよい勉強になりました点、心からお礼を申し上げます。

卯年の聖僧

法灯円明国師

「紀州新聞」昭和五十年一月一日掲載

毎年、正月が近づくところこの家庭へも出入りの商人などから、新しい年の暦がとどけられるが、それらの暦にはきまつて生まれ年の干支による運命判断や、性格をのせている。ふかく意にするほどのことはないが、炬燵の中で読み流したりするのも、正月らしくて、ちよつと楽しいものである。

ところで日高地方に縁のふかい今年の干支、卯年生まれの人を挙げると、まず由良町、鷲峰山・興国寺の開山、法灯円明国師のことが心にうかんでくる。

国師は土御門天皇の承元元年（一一二〇）丁卯年、信州は東筑摩郡神林庄で生まれた。松本市から西に八^キばかりの地で、ここには今も館の跡がのこり、国師生誕の記念碑があるという。父は神林の地頭・常和泉守兼久、母は妙智とよばれ、この地から北約一〇〇^キの戸隠観音に、聖子の授からんことを祈願して国師を生んだと伝えられる。

国師は幼名を鷲丸と称したが、承久の変のあった承久三年（一一二一）十五才で戸隠神社の別当顕光寺に入つて、仏学と儒学を学んで英才の誉れが高く、在院十五年、二十九才のとき郷里を出て奈良東大寺の忠覚律師の門を訪ね、更

に同年高野山に登って伝法院・正智院・次いで金剛三昧院で仏道を研鑽して禪門に入り、心地覺心と称した。その後、高野山に留まること約十五年に及んだが、入宋の志やみがたく建長元年（一二四九）、高野山を下って由良庄に移り、興国寺の前身ともいふべき西方寺に入って、入宋のため由良港から海路、九州の博多に向かった。法灯国師が日高の地に足跡を印し、由良の村里とのふかい縁を結ぶに至ったのは、この時にはじまる。

同年四月、国師は無事に宋の港につき、国内各地に求法の旅をつづけること六年、すなわち建長六年に帰朝して、今の和歌山港から紀ノ川ぞいに高野山に登り、金剛三昧院にとどまった。翌七年金剛三昧院首座となり、ついで正嘉元年（一二五七）には金剛三昧院長老に補せられた。国師の学徳のひと通りでなかったことが知られる。しかし国師はそれらの栄光には目もくれず、正嘉二年、由良庄・鷲峰山に入って西方寺を禪刹に革め開山となり、終生をここで過ごすことになった。時に国師五十二才、今から七百二十余年の昔である。

国師が西方寺の開山となるや、その徳風を敬慕する道俗は遠近を問わず群がり、その会下に参ずる者数を知らず、宗風大いに興って法化一世を風靡し、関南第一の禪林とうたわれた。こんな話がある。

国師が八十七才の時、多くのお弟子さんたちの強い希望で、その像をつくることになった。某というのはそのころ聞こえた仏師で、懸命に腕をふるったが、老国師の澄み切った眼のうちに湛えられた英知の輝きだけは、どんなに技をつくしても写しとることはできなかった。ああでもないこうでもないとい人苦しんでいるうちに、仏師はとんでもないことを考えた。

「和尚め、あんなに悟りきった顔をしているが、わしがこの鑿でブスリとやってみろ、たちまちお陀仏だ。してみると……」

ほんの一瞬の妄想であつたが、その途端、

「おい、何を下らぬことを考えているのじゃ」

という国師の声が聞こえてきた。仏師は頭の上から不意に、大きな石臼が落ちてきたように、思わずその場に平伏した。

このようなエピソードをもつ国師の像は、今も興国寺の開山堂の奥ふかく安置されているが、像高は一一二・一センチで寄木造。椅子に安座して膝上に両手を重ね、禪定の姿をあらわし、きわめて写実的で高僧の気品と、禪定の静寂が、自らあたりにただよい、側には「あかだ」の杖がおかれ、さながら生けるが如き容相で、拝む人の心を思わず肅然とさせる。国の重要文化財である。

このほか国師の木像はもう一軀、川辺町和佐の通称開山、光性寺の開山堂にも安置されている。法量、製作年代ともに興国寺の像とほぼ同じもので、国師四十二才のお姿という俗伝があり、四十二才は男の厄年にあたるため、厄除

けの信仰がひろく知られ、正月元旦・二日・三日と祈願のため参詣者が絶えない。

なお森彦太郎先生の「鷲峯余光」によると、「永仁六年十月十三日（一二九八）夜子刻遷化、寿九十二とある。また元徳二年（一三三〇）龜山上皇より法灯禪師号を、後醍醐天皇より重ねて円明国師の勅諡（おくりな）を賜う」とあり、さらに興国元年（一三四〇）後村上天皇より興国寺号を賜り、以来興国寺と称するに至ったとある。遺芳千載という言葉があるが国師の高風を物語るものである。

紀州日高地方における

地主制資料刊行によせる

「紀州新聞」昭和五十年一月二十二日掲載

すでに先般の本紙においても詳しく紹介されていた通り、大成中学校教諭の谷口恒一先生が、十年ばかり前から、第一線の中学校教諭としての、いそがしい毎日の合い間を縫うようにして、こつこつと取り組んで来られた「紀州日高地方における地主制資料」が見事に実を結んで、いよいよ二月中に和歌山県文化財研究会御坊支部から刊行の運びとなった。十年という歳月を、余暇のすべてをこの一筋に打ち込んできた著者のよろこびは、筆舌につくし難いものがあるうかとお察しする。と同時に私ども日高の地方史研究に志を寄せる者にとっても、感激のひとしおなるを覚える。そればかりではない、これは単に一日高地方の誇りであるにとどまらず、わが国の近代農業経済史研究に寄与する成果は、まことにはかり難いほど大きい。

その後、自費出版のことは、サンケイ・読売新聞の地方版にも大きく取り上げられたが、著者の新聞談話にも見られるように、明治二十年（一八八七年）から昭和二十年（一九四五年）におよぶ五十七カ年にわたる日高地方十カ市町村（旧二十八カ町村）における、十町歩以上の地主四十七名の、各年毎、各大字別の田畑の所有高の変遷を、市町村の尨大な土地台帳から、一つ一つ拾い出して整理・集計の上、検討を加えるという、常人には気のとくなるような面倒な作業を、うまずたまわず積みかさねて、本書は完成したという。この超人的な努力にはまったく何人といえども驚嘆せずにはいられない。

さて、本書は一見ただけでは、ただ無味乾燥な数字の連続である。しかし数字は人間のように嘘は一切つかない。余計なおしやべりはしない。一片の詩情もまじえない。ありのままの姿を正確に、しかも雄弁に語るのである。

明治二十年から昭和二十年までと云えば、ちょうどわが国が封建社会の残滓を払拭して、ようやく資本主義社会へ

と移行し、やがて爛熟の結果、都市では労働争議が激化し、農村では小作争議が各地で展開した時期で、わけでもわが日高地方では日本の小作争議中でも最も大規模な、激しい長い闘争がくりひろげられた。この時期において紀南の一地方である日高郡内の地主層が、どのような道をたどって形勢成長していったか。そして第二次世界戦争。敗戦・最後のあの歴史的な農地解放の前夜を一見、無表情な本書の各頁の数字が、私たち読者に適格に物語ってくれる。

仄聞するところによると、この著書はわが国に学界においても、ほとんど類をみないという、誰もがその必要を痛感しながらも、その余りにも労多くして酬われるところの少ない作業に手を下そうとしなかったのである。にもかかわらず谷口恒一氏は敢えてそれを克服して、B五判二〇〇頁の大書としてまとめあげ、わが国近代農業史の貴重な基礎資料を完成した。研究家のおおくは今後その各々志すところにしたがい、本書から実にさまざまなものを発掘して、ひろく活用するであろう。

また、これは当然のことながら、本書に収録されている十町歩以上の地主四十七名のうちには、現代もますます繁栄を続けられている方々もあれば、すでに栄光の座から姿を消された方々もある。いずれにしても四十七家の人々にとっては、本書はその一家の正確な一つの、しかも栄光ある記念文献である。この機会に是非座右に備え、永く子孫に伝えたいものである。これは著者にかわっておすすめる次第である。

思えば谷口恒一先生と私との交わりは古い。何でも先生がまだ和歌山大学に在学中の一夏、私方へみえられたのが初めであると記憶するから二十年ぐらいにもなるうか。その後、日高郡公民館連絡協議会編集の「紀伊日高地方民話伝説集」刊行の際、同じ編集委員として先生と仕事を共にし、また、今回の続日高郡誌編集刊行に当たっても、拾年余にわたって苦楽を同うしてきた。ほかに川辺町文化財委員としても、平素から世話になっているだけに、先生の今回の新著の刊行は何にもまして慶びにたえない。うれしさの余りにペンを執り、ひろく諸者各位にお奨めする次第である。

海鳴りの和歌の軸

「紀州新聞」昭和五十年二月二十二日掲載

一月二十六日午後、歌集「糸巻」の著者である故阪本徳枝夫人のお内へ、近くの歌人仲間が集まるから、私にも出て来ないかと、御案内をいただいた。

それというのも何時であったか、何かの話から、私が以前から蒐集してきた紀州の古い歌人達の短冊を、お見せすると約束したまま、つい延び延びになっていることを、思い出されてからのことであろうと想像された。私も久々で

皆様方とお逢いして、歓談できる日を心からたのしみにしていたところ、あいにくその数日前から体の不調で寝こんでしまった。それでもその前日の夕方、関富次ご夫妻がおみえになったので、短冊帳とちやうど一月の初めに表具のでき上がった数本の軸をおことつけして、ようやく数年来のお約束だけを果たしたのであった。

後日のお話によると、当日、阪本邸に集まられたのは、中田宇南・要海正夫・古田武光の三大人と、田淵文子・中村兼子・二本松節子・笹野とみえ・中田みよし・関祥子の各夫人方であったといい、席上で拙宅からおことつけした井上豊太郎先生の和歌の半切をめぐって、ひとしきり話がはずんだとのことであった。

話題になった軸は

海鳴里之聞由留頃と成留かも

青真深幾紀伊尔住美馴留

井上豊太郎

と書かれている一首で、この書風も墨色も先生晩年のものと大分おもむきが異なる、はたして先生の書であろうかというのが、論議の中心であったようであった。昭和何年ごろであったか、とにかく紀州水害の後であったことだけは確かなのだが、先生は身辺を整理されて、その所蔵の品々を、樂天荘に出入りする誰彼に、それぞれ頒たれたことがあった。ちやうどそのころ私の勤め先が樂天荘に近かった関係もあって、新聞の切り抜きをはじめ、雑書や反古類まで、箱に何杯ももらったことであった。問題の和歌の半切は、他の二・三枚とともに、その時反古の中でくしゃくしゃになっていたのを、後日整理した際表具に出したもので、そのうちの一枚を小谷緑草氏にお分けしたと記憶するが氏はどうされたであろうか。

さて、この歌を詠まれた時期であるが、たしかなことは先生亡きいまとなつては知る由もないものの、先生の自叙伝「積翠録」の中に、

……一時京橋に移り商売に手を出して失敗。大井・大森と転々して考えている内に魔がさし、くだらない連中の口車に乗って郷里に帰り……

とあって、御坊に帰られたのは関東大震災後の大正十二・三年ごろと推定される。したがって「海鳴りの……」の一首はそれから余り遠くない、大正十四・五年ごろにつくられたのではないかと私は考えている。

先生は晩年、書道にも心を寄せられ、入木道とか大師流とか云う言葉を、しばしばお聞きしたことがあり、書風も大きく変わったが、それ以前のものは、例えば私が常に離れ座敷にかけている「神武天皇八紘一宇聖勅」と題する大時代的な大幅なども、書風といい墨色といい、「海鳴り」の軸と全く同じ傾向であり、井上豊太郎の署名がいつも見慣れたなつかしい筆跡を示し、先生の筆であることは疑う余地はない。しかし先生晩年の書に親しまれた人々には、

少々奇異に感じられたものと思われる。

また、その際お届けしておいた別の一幅は

仰真観清浄観

広大智慧観

悲観及慈観

上願常胆

昭和三五夏

南紀樂天莊主人謹書

と明らかに揮毫の時を記されているが、文は経文中の一句かと推察されるものの、文意は仏家の御教示をいただくねばよく分からない。それにつけても先生の御在世中、ときどき仏教に関するお話を承ったが、そのときはあまり意にとめず聞き流してしまったことが悔やまれる。

いずれにしても先生は、直情径行で妥協性がなく、誰とでもすぐ喧嘩をはじめ、自慢もしたし酒を好んで奇行がおおく、さまざまな批評もあったが、学問の幅が明治人らしく広く深く、新しい文芸にも関心をよせ、記憶力が絶倫で理解力にすぐれ、やはり得難い偉い人であったと敬慕している。私なども何度となく叱られたり、新聞で散々毒づかれたり絶好を申し渡されたりしているが、根はやさしいよい人で、先生から随分かわいがられたものであった。

ようやく表具のでき上った先生の軸を前にして、御在世中、樂天莊にお伺いして冷たい茶碗酒や、ほこりだらけの茶碗にたてられたお茶を御馳走になった日のことを、しみじみと思いがえしている。早いもので去る十二月三十日で、先生が亡くなられてから、もう丸七年になる。

何事にもせつかちな私は二十二日当番のこの随想を、十三日夜一応書きあげた。ところが翌朝の本紙で阪本徳枝氏の急逝を知った。一月二十二日の集いから、わずか二十日余りしかたっていない。二十二日夜その日の集いの記念にと夫人からとどけられた短冊には

蚕かひまゆをつむぎて若き日ぞ

わが手に織りぬ祭りのきもの 徳枝

と近詠が揮毫され、短冊の裏面に

十七才の秋織る

と認めて、その下に夫人手織の絹縞の一片が貼られていた。いまは夫人をしのぶ唯一の形見となったが、それにつけたも、人生無情の感がひしひしと身にせまるのを覚える。

謹んで夫人の御冥福をお祈り申し上げます。

自画自賛

続日高郡誌

「紀州新聞」昭和五十年四月二十二日掲載

今春三月下旬から四月初めにかけて刊行の上、配本できる予定であった続日高郡誌は、何しろ上下二巻で三千頁を超す大冊のため、その校正が予想以上に手間どったのが影響して、印刷製本が思うに任せず、予約申込をいただいた各位のお手元へ届くのは五月中旬ごろの見込みとなった。まことに申し訳ないが今しばらくお待ちをお願いしたい。思えば日高地方公民館連絡協議会から、本誌の編集を委嘱されたのは、昭和^{九六}三十八年であったと記憶するから、もはや十二年も昔のことになる。続日高郡誌はその書名が示すように、先学森彦太郎先生が編著された大正^{九二}十二年刊行の日高郡誌の後を受けたもので、大正後期から昭和四十年代へかけての、日高郡市内のあらゆる変遷推移を調査編集するというのが基本方針であった。したがってそれなら期間も短いし余りむつかしくもあるまいと、割合かるい気持ちでお引き受けした。

しかし、いよいよ編集にとりかかってみると、わずか半世紀ほどの間とはいえ、その間には大きな災害がいくつもあり、何よりも満州事変からはじまる長期の戦争と、それに続く敗戦を契機にした、わが国を根底からゆすぶった社会変革や、科学の飛躍的な発展があつて、これを整理して後世に伝えるのは、予想以上に困難な作業であることが分かった。

また当事者がこんなことを云うのはおかしいが、編集委員の各氏は、私を除けばいずれも三十代、四十代のちょうど油ののりきった粒よりの研究家ぞろいであつたが、反面各委員はそれぞれいそがしい勤めがあつて、時間的な余裕はきわめて乏しく、資料の蒐集や調査研究・整理・執筆は、すべて夜間や日曜日や祭日、或は春・夏の休みや年休を利用してよりほかはなかった。それでも各委員はその少ない時間を利用して、郡市内の各地を精力的に調査をつづけたのであつた。

もち論、十二年の間には何度か挫折しそうな危機にも見舞われ、編集委員会も重苦しい空気につつまれたこともあつたが、その都度、当時の連絡協議会長であつた要海正夫・大野惣一郎の両氏や、事務局を担当された日高地方教育事務所の東公・岡本健一・榎本浩巳の三氏に激励されて、ややもすれば阻喪^{そそう}しようとする気力を、また奮いたたされ

たのであった。

本誌は当初の編集基本方針にしたがって、さきの日高郡誌刊行後の当地方の変遷をたどることに主眼をおいたが、関連事項の都合で日高郡誌が記述した時代もふれたところもある。また日高郡誌以降に発見された資料や遺跡・遺物・研究・学説等によって、日高郡誌の欠を補うべきは補い、正すべきところはこの機会に正した。

あれは、たしか昨年六月二十日であったと思うが、日高県事務所内の町村会会議室で、編集委員会が開催され各委員が原稿を持ちよって打合せを行った。席上、各委員はめいめい担当執筆した分を校正の上、再校は編集委員長が行うことになった。いつであったか本紙の随想で要海正夫氏は「年をとるのも芸のうち」と書いておられたが、編集委員中、私が最年長のせいで編集委員長を仰せつかった。総頁数三千頁を超す大冊を一読するだけでも大変なことなのに、校正となるとこれは容易ではない。私は何とか逃げ出すべくあれこれ抗弁したものの「お前は編集委員長ではないか。それ位のことはやれ」と云われたので一言もなく引き下がった。

さて、いよいよ面倒な校正がはじまった。私はこの冬中、夜も昼も部屋にとじこもって赤いボールペンを執った。骨の折れる作業ではあったが、また興味のある毎日でもあった。各委員の原稿に目をとおしながら、各委員がよくここまで努力されたと幾度か感嘆した。正直に言うとな編集に着手して十余年も経過している。その間に中たるみもあったし、はたしてどんなものができるだろうかと、一抹の懸念もないではなかったが、それは私の杞憂にすぎなかった。もちろん本誌にはさまざまな批判も出るであろうが、これなら続日高郡誌として世におくってはずかしくはないと自信をもって云える。

おそらく今後、日高地方の歴史と文化・経済・自然に関心をもつ人々にとって、一つの大きな拠り処として、ながく親しまれるであろうと、ひそかに自負している。

それというのも、各編集委員や関係者各位の並々ならぬ努力苦心はもとよりであるが、同時に本誌の成立にあたり長い間、いろいろご協力いただいた郡市内の各位のおかげである。私はいま続日高郡誌のまさに成らんとして、実に数え切れぬほど多くの方々の、これまでの温かい御厚意をしみじみと噛みしめている。御予約いただいた方々に、やがて堂々たる装いをこらした上下二巻の続日高郡誌が、机辺におとどけできる日も、もはや近いことを御報告申し上げたい。

消えんとする

大正の名残

「紀州新聞」昭和五十年五月二十二日掲載

御坊市役所の旧地へ新築中の紀陽銀行御坊支店が完成して、移転の上開店したのは去る十二日であった。戦前の銀行の建物とは極端な形容をすると、豆腐のように四角な、堂々としているが何か重苦しい感じのものが多かったが、最近はその風潮を反映してか、軽快な明るい建築に変わってきた。

私などは年に数回も出入りするのであらうか、余り銀行とは縁はないが、やはり威圧的なものより近代式の開放的な構えの方が這入りやすい。紀陽銀行御坊支店が現在地に移ると聞いてから、市役所時代から市民に馴染まれてきた数拾本の桜の運命を気遣ったが、それはそのまま遺されて、何かほっとしたのは、恐らく私ひとりだけではあるまい。来年の春もまたこの桜の花が見られる。ありがたいことである。

こうなるとまた欲がでて次は中町で空き家になった旧銀行の建物はどうかと、よいなことが気にかかる。一時は市立図書館に転用してはという話もあったが、その後どうなったのであらうか。何しろ御坊市民をはじめ附近町村の人々に長く親しまれ、町のシンボルのような立派な建造物であるだけに、むざむざとりこわされるのは惜しまれてならない。思えばこの建築物ほど数奇な運命をたどったものも市内では一寸すくない。

続日高郡誌編集委員山本賢氏編の「御坊市年表―第一次案」によると、「明治十一年四十三銀行が設立される」とあり、近刊の「紀陽銀行史」には「明治十一年四十三国立銀行継承」とある。いま手もとに確かな資料を欠くが、これらによって、もと四十三国立銀行であったのが、この年国立銀行の業務を継承して、民営の四十三銀行となり、御坊支店が設立されたものと思われる。その後四十三銀行は、わが国の経済の繁栄とともに発展を続け、日高地方の金融界に君臨し、大正十四年一月、四国の佐伯工務店の施工で、御坊で初めての本格的な石造建築の店舗を完成した。この工費十一万円。支店長は岩橋啓次郎氏であった。（北裏虎楠氏談）

ところでこの工費十一万円の重みを当時の米価から考えると、この時川辺町土生の地主であった湯川熊二郎の家では、玄米壺石最高三十八円、最低三十五円、平均三十六円二十五銭で売却している（矢田村誌）。かりに全部を最高価格で売却したとしても、玄米二千八百九十五石、四斗俵で七千二百参十式俵の計算となる。ちよつと気の遠くなるような工費である。しかしこうして御坊の中心街に、石造の偉容を誇った四十三銀行も、その後次第に業績がふるわず、昭和五年七月二十七日の株主総会で解散が決議され、当時政友会の長老であった和歌山県選出の岡崎邦輔代議士等の幹旋で三十四銀行に吸収合併され、間もなく昭和八年八月三和銀行となり、さらに昭和四十六年三月、三和銀行の御坊支店廃止に伴い紀陽銀行の手に移った。つまり四十三銀行、三十四銀行、三和銀行、紀陽銀行と四度建物の所有者

が変わった訳である。

私が銀行へ使いに行きはじめて大正末年から昭和初年ごろは、行員はまだ和服で袴をつけていたように記憶する。当時の支店長は前に記した岩橋啓次郎氏で、顔の面長な品のよい、どこか岡崎邦輔に似た風貌の人であった。支店長席の後の方の壁間に時計がかかっていたが、この時計のねじを巻くのも人がきまっておおり、他の人が巻くと御機嫌がわるかったとも聞いたことがある。春夏の日の長い季節の夕方、栄町を通ると銭湯帰りの岩橋氏をしばしば見かけたのをかすかに覚えている。

岩橋氏が退職された後三十四銀行時代か三和銀行時代か定かでないが、現紀州信用金庫理事長塩路浩一氏の厳父が支店長に就任された。そしていつ銀行へお伺いしても、支店長席に端然と腰をおろしておられたのが印象にのこっている。勿論、片方は銀行の支店長であり、こちらは無名の一青年で言葉を交わしたことは一度もないのだが、人間の記憶など不思議なもので、妙なことを覚えているものだと、時々考えるものである。

旧四十三銀行の石造店舗を語るつもりが、いつもの癖で横道に脱線した。最後にあの建物ができた大正十四年といえ、関東大震災の二年後である。したがって建築にあたっては耐震の点を特に考慮し、少々の地震にも耐え得る様、堅牢につくられていると聞いた。それだけに御坊に残っている唯一の、大正の洋風建築が時の流れとはいえ、今や姿を消そうとしているのは、何ともさみしいし、勿体ない気がする」と云っては、老人の感傷と笑われるだろうか。

真妻山

「紀州新聞」昭和五十年六月二十二日掲載

仰げば高し真妻山

のぞめば深し和田の海

わが師の恩は海山に

いかなぞらえくらぶべき

.....

今はどうなっているのか知る由もないが、私どもが小学生のころ、毎年三月に行われる卒業式には、「蛍の光」とともに、きまってこの歌も合唱したものである。勿論しかるべき本歌があつて、真妻山に和田の海の地名を置きかえたのであろうが、この歌や「蛍の光」をうたっていると、子供心にも何か別離の思いが胸にこみ上げて、もの悲しかったことをおぼえている。

ところで何処へ行ってもその土地土地には、母なる山とでもいうべきであろうか、代表的な懐かしい山が一つや二つはある。例えば田辺人の高雄山（六〇六・四^ノ）をこの上なく愛するし、有田では千葉山（五四一・九^ノ）がよく持ち出されるが、御坊近在では何といっても真妻山（五二三・六^ノ）が高さといひ山容といひ大正時代から昭和初年にかけて、小学校の卒業式にうたわれ、古くは幕末の歌人、加納諸平や瀬見善水にこの山を詠んだ長歌や短歌がある位で、日高人の心の山として仰がれてきたのであった。

五月十七日、私は五拾年ぶりで真妻山に登った。同じ川辺町内の山なのだが、なかなか機会がなかったのである。折から目下進行中の川辺町誌編集作業のうち、植物篇担当の吉田謙委員が真妻山の植物の第一次調査を行うときいて、それならあまりいそいで登のであるまいから、私の脚でも頂上をきわめられるであろうと、同行をたのんだのであった。一行は吉田委員のほかに、この事業にご協力をいただいている和田小学校の宮井一朗教諭、御坊歩こう会々長山中三郎氏、町教育委員会の西瀬又平氏と私の五名であった。

前回の真妻山登山は大正十三・四年^{（一九二四・五年）}ごろの一月だったと記憶する。当時私は御坊市藤井の塩路医院でご厄介になっていた。塩路家の令息有氏とその友人で私と同年輩の宮崎伊佐夫氏の三人で、山野まで自転車走らせ、ここで山へかかる道を尋ねたが、三人ともそのころ学生の間で流行していた厚歯の学生下駄であったので、村人から「下駄で山へ登るのか」と笑われたことをおぼえていが、下駄を草履にかえたかは記憶がない。

間もなく行く手にそびえ立つ峯が見え、これが山頂かと意気こんで登ると、その向こうにまた更に高い一峯が姿をみせ、かなり骨の折れた思い出があるのだが、今はこの山の四分の一位まで小型自動車の通れる農道ができている。吉田・宮井両氏は途中から車を降りて調査にかかったが、私たちは車の通じるところまで車で走って二人を待った。やがて二人もみえて愈々山道に分け入った。風の強い日であったが、山中は存外おだやかであった。両氏が熱心に植物群に眼を光らせ記録をとったり、カメラを向けたりしているが、植物のわからぬ私は、一人でひたすら山道を歩いた。道は幅一米もあるかなしの小径ながら、両側の雑草や雑木が刈りあげられ、大した急坂もなく想像していたよりも峻しくはなかった。

雑木林の間や植林した樹陰や草原の間を、いく度か通ってやがて山頂に着いた。山上附近は大木がなく一寸した広場になり、ここに千手観音（石像）を安置する小祠があり、もう一段高いヶ所に三角標石があつて、それには一等三角点の文字が刻んであった。ここからみる景観はすこぶる雄大で御坊近在から日高平野はもとより、南東は白浜から晩秋の空気のすんだ日は、恐らく市江崎あたりまで、また北東は護摩壇山から十津川方面の山々、更に北西は高野山あたりまで遠望されるのではないかと思われた。私たちはここで一息入れて、西瀬氏が用意してくれたジュースを飲みパンを食べたが、何しろ空腹と軽い疲労の後だけに、ちよつと忘れがたい程であった。

私は山頂の草原に腰をおろして、私をはじめてこの山に登ってからの、五拾年間のわが人生行路をふりかえってみた。その間には実にいろいろなことがあつたが、よくもこの年令まで無事にこられたものであつたとの感を深くした。その間には実に多くの友人、知人が私の前にあらわれ、そして去ってゆき、ある人は戦死を遂げ、ある人は病を得て死んでいった。私もこのあと、幾年の命か分からないが、こうして山へ登れるのも、も早ここ数年であらう。今のうちに日高地方の山々に、例えば清冷や矢筈山に、また小谷峠や三里峯を是非歩いてみたいと考えた。

それにつけても昭和三十一年十一月三日、故芝口常楠先生は大阪から訪ねてきた日高高等女学校時代の教え子・井関くに（ペンネーム関久子）昭和四十五年十月、歌集艸炎の著あり、大阪在住の婦人運動家」と御坊市島の自宅から川辺町山野まで二十四^キを歩き、折から降りはじめた小雨の中を真妻山に登っている。時に先生は七十五才の高令であつた。昔の人の健脚ぶりには全く驚嘆する。

祝歌

「紀州新聞」昭和五十年六月二十五・二十六日掲載

要海 正夫

○ 悠久の歴史の空に輝きて

続日高郡誌わが一つ星

これは去る六月十日、続日高郡誌の出版記念式に、苦節十二年の結実を祝して、編集委員の皆様にお贈りした拙作の祝歌である。元来字も絵も下手糞で、冊尺などめったに書いたことのない僕だが、この日ばかりうれしくて、うれしくて、少年のようににはしゃぎながら、横なぐりに書きまくった。もとより委員諸氏の功績を三十一文字の中に表現することは無理な話で、歌もまた稚拙極まるものだが。僕なりの感恩の真心をこめたつもりである。高名のうた詠みでない僕の冊尺など一文の価値をもつものでないが、それでも十二年間のご縁につながった僕のただ一途の慶祝のもりだった。

○ つくばいて爪を剥ぎたる男坂

あえぎつゝ楽は終章に入る

郡誌並びに郡誌にたぐいする地誌は、日本国中、どここの地方でも残されていることだろう。わが日高郡の場合も、大正十二年に刊行された日高郡誌がある。森彦太郎氏編集にかかると、数ある郡誌中白眉として、今に江湖の絶讃を博しているのは、先刻御承知の通りである。しかし、まだどこも、その続篇を手がけたという話は聞かない。恐

らくわが続日高郡誌をもつて嚆矢とするのではなからうか。その土俗学的価値については、歴史的審判をまたねばならないのであろうが、これによって、大正十二年以降の日高地方歴史の空白を曲がりなりにも埋めることのできた意義は大きい。

例えば十二年間、生爪を剥ぎながら、前人未踏の男坂を、よじのぼり、一段々と這いつくばって、詳細をつくし、やっと出版記念式という終業章を迎えた委員諸氏のよろこびはいかばかりであろう。然し歴史の悠久から考えれば、この終章は、今日の終章であって明日の終章ではない。五十年、百年の後には、又誰かの手によって、続々日高郡誌が書かれなければならないのである。

○ 草に伏し野に寝ね苦節十年(としせ)あまり

続日高郡誌茲に成りたり

○ 留魂の野を踏み分けて遠つ祖(おや)の鼓動

きゝたり地誌をあまんと

戦後、否応なしに日本の土に植えられた民主々義は、滔々^{とうとう}としてアメリカイズム・マルクスイズムにムスボイルされていった。その中で私共は、ひそかに留魂の教育を考えていた。それは反動でもない復古でもない。むしろ民主々義の正しい定着を考えていたのである。即ち日本の文化を伝統の上に、民主々義をどう定着させるかという問いかけであった。

日高地方公民館連絡協議会が、昭和^{一〇九六〇年}三十五年以降に手がけた一連の郷土資料シリーズは、実はこんな動機と決意に発したものであった。それからは「各地の祭をたずねて」(昭和三十五年度刊)「日高民謡集」(昭和三十六年度刊)「紀伊日高民話伝説集」(昭和三十七年度刊)等、次々と留魂の狼火を打ち上げ、昭和三十八年度に於て、「続日高郡誌」編集という大事業の敢行に踏み切ったのである。今度は誰しも二の足を踏んでその成功を危惧したが、僕はきつとやり得るという確信にみちていた。というのも、昭和三十七年「紀伊民話伝説集」が出版された折、僕は事務局の東公君と県・公・連の席上へこれを持参し、以上のような趣旨を述べ、さらには県下社会教育振興の一助にもなると、歩調を揃えて祖先のこころを発掘する仕事をやろうじゃないかと提案した。無論全員賛成で、有田地方や、西牟婁地方は、早々とその準備にとりかかられたようであったが、結局は線香花火のように消えてしまった。それなのに、わが日高郡だけが何故出来るものか、人の問題かと云えば、各郡市とも日高郡のそれにも増して錚々たる郷土史家がたくさんおられる。それでやれないというのは、結局するところ人の和がなかったからであろう。もともと土俗学という学問は、足にまかせ、根にまかせる仕事である。いわば孤独との闘いの学問である。したがって孤高^{ここう}狷介^{けんかい}の人が多いのかも知れない。その点わが委員会の総師、清水長一郎さんは稀に見る人格者であり、温容、円満、誠実で、まとめ

役としては打ってつけの諸人柄である。又他の委員氏も、円満・真摯な学究の徒で、若さとバイタリティーに富んでいる。いやしくも一匹狼を誇示して、和を乱すような方々は一人もいないし、又途中で筆を折るような方はこれ又一人もない。このスクラムこそ幾星霜の風雪にも耐えぬく力だと僕は心ひそかに信賴申し上げていた。幾山河を越え去り越え来り、「続日高郡誌」が茲に見事な結実をみせたのは、一にかかつて、この人の和と若さの力であったと思うのである。

○ 終章に入りたる樂に涙しつゝ

乾杯の酒高くかかぐる

○ おのおの苦勞話の種はつきず

続日高郡誌酒に飲み奪(と)る

其の夜、関係者一同、天下晴れて酌み交わした酒のうまかったこと、天下の美酒とは、まさにこのことで、誰も彼も、わが生涯最高の美酒であつたろう。いつもなら案外へバリ易い小谷緑草君も、今日ばかりはいくら飲んでも崩れなかった。時々僕の方をみて「あんたもよう飲むのう、こんなに飲んだの始めて見たで」とひやかす始末だった。飲んで、歌って、踊っても飲み足らない、歌い足らない、日本一のうたげだった。

祝続日高郡誌の発刊

「紀州新聞」昭和五十年七月二十七日掲載

堀 勝

このたび続日高郡誌が発刊され、祝賀会が開催され、私もその末席に列する光榮に浴し、九名の執筆者とこれらの人々を長年にわたつて援助してきた事務当局の人々との円滑な調和が、この結果をもたらし、大事業の完成になったことと察するものである。

旧編日高郡誌は明治四十三年(一九一〇年)から大正十一年(一九二二年)まで十三カ年間の歳月をついやし、弱冠二十三才の森彦太郎先生を中心に資料の収集・現地調査の協力で、全巻千七百余頁、それに活字は小さく、全巻を通じて、紙面を少なくするようなご苦心なされたことが伺えるのである。

その上内容の豊富と正確、然も先生の学者として識見の高きに対しても深く敬意を表するものであるが、あれだけ大部のものを原稿用紙に書くだけでも唯ならぬ大事業であつたと察し、その精力絶倫であつたと察し、改めて尊敬の

念を厚くするものである。そして全国に数ある郡誌の中でも最高の名著であると聞くと、当日高郡の誇りであるばかりでなく、私達後輩の指標として感激の念を深くするものである。

今回刊行の続日高郡誌は執筆者九名が各々その専門分野によって執筆され、全巻二三〇〇頁という膨大なもので、内容も前篇以上に豊富で、後編としては誠にふさわしいものである。

執筆は前編の森先生お一人に対し今回は九名であるから、担当が分化されたとはいえ、それでも内容が多岐にわたっているのも、もっと多人数の方が好都合かとも思われる点もあるが、一人で広範囲にわたるご執筆に対し、ご苦心のほどを察し感謝に堪えない。

私は内容の全般にわたって到底知る由もないが、前編に比べ後編は第一編自然誌の項が一段と重視されていることがうれしい。

元来郡誌・市誌。町村誌などの執筆者は、人間社会の文化史(歴史)の専門家が多く、自然科学面に不得手な人が多いから、勢い人間関係の歴史にかたより勝ちであることは止むを得ないにしても、人々が集落をつくって定着した生活のうちには、自然環境のよい所は段々と発展して都市となり、悪い所ではあまり発展しない様に、人間社会の繁栄特に近代都市の発展には自然環境に影響されるところが多いのである。御坊付近に例をとると、日高川・日高平野・和田・松原の砂丘、この三者が長年に亘って続けられた自然の営みが現在御坊付近の自然である。更に気温・風雨等の気象条件も加わった自然環境の中に、繁栄してきたのが御坊市及びその周辺の町村である。即ち都市発展の基礎である自然環境を究明することが、基本条件であることに思いを致さねばならん。

今回の続篇では執筆者九名中池本・木下・後藤三氏を配し、第一編自然誌として二九〇頁を費やしていることは前篇とちがって大きな進歩である。

といって私は前編は自然法を軽視しているのではない。いまから半世紀も前のことであるから、自然科学全般にわたって学問が今日ほど進歩していなかったのである。

いま一つ自然環境について考えなければならぬことがある。それは自然が人の性格におよぼす影響である。日本でも東北地方の人々は、寒い季節が長く室内に籠ることの多い関係で、性格は鈍重で明るさを欠くが粘り強い。温暖な関西地方の人々は明朗であるが、浮薄であるといわれるように、大平原に住む中国人や、アラビアのような熱帯砂漠の人、北欧のように草原に住む遊牧民等、各々その性格が異なるばかりでなく、日本のように気候の温和なモンスーン地帯に栄える仏教、熱帯砂漠に栄えるマホメット教など、そこに栄える精神的な宗教までが異なってくることを思えば、自然環境が如何に大切であるかと、心すべき大切な問題である。続編では公害問題まで言及され、自然保護に意を用いられたのは有難いことである。

最後になったが敗戦後の科学の進歩が、産業・通信・交通にまで一大革新がもたらされ、生活様式が一変された折に、古い記録を残し後世に伝えることは最も大切な時であり、この時にあたり続日高郡誌を編集したことは、誠によいチャンスであったと改めて敬意を表し感謝する次第である。

氏子札

「紀州新聞」昭和五十年七月二十二日掲載

御坊市本町の芝時計店の仏壇の抽出から、古い書き物が出てきたと聞いて、ある日お伺いした。書き物というのは巻物ふうに仕立てた、江戸時代もおそいころの劔術稽古の入門書のようなものであった。

芝時計の先々代はたしか岩太郎という方であったと記憶している。お話をしたことはなかったが、体格の立派な人で、いつも和服を着ておられた。岩太郎氏は時計店を経営される傍ら、土地売買の仲介をされ、今の御坊税務署の敷地も、芝さんの幹旋によるものであることを、誰かにきいたような気がする。しっかりした方で、人いち倍気むづかしかった井上豊太郎先生も、芝さんの言葉はすんなりお受けいれられたと、これは田端憲之助氏から何かの折りに、おききしたことをおぼえている。

巻き物をみせていただきながら、私はそんな古い他愛のないことを思いかえしていた。私はお伺いするまで、芝姓を称されるからには、御先祖はひよっとすると、川辺町玄子あたりの御出身ではないかと、ひそかに想像してきたのであるが、段々お話を伺っていると、私の考えどおり何代か以前に、川辺町から出て来られたことがわかり、こんな物がのこっているのですと、数枚の古い氏子札を持つてこられた。

氏子札というのは、(二八六八年)明治初年に、政府が一時宗門帳に代わるものとして、各町村の神社が発行の上、人々に交付させた制度である。芝家所蔵のそれは長サ八・九寸、幅五・七寸、厚サ三ミリのほどの桧材らしいもので、表に、

紀伊國菰浦

松浦友吉

園八幡神社氏子

(二八六八年)文化十一年甲戌十

二月二十九日生

とあり裏には、

神官

小竹田道真

明治五年壬申正月(二八七二年) 印

とあつて、他の三枚も同じ様式で

松浦友吉

女

とみ

(二八五六年)
安政三年丙辰十月

十八日生

友吉

男

松浦鹿蔵

安政五戊午五月五

日生

友吉

男

松浦安吉

(二八六二年)
文久二年壬戌三月

二十日生

とそれぞれ墨書してあつた。氏子札は当時どこの家にもあつたものであるが、発行後百余年を経た今では、めずらしい存在となつた。私は劔術入門の巻物もおもしろかつたが、たまたま見せられたこの四枚の氏子札に、一層興味をそそられたのであつた。

ところでこの氏子札で気がついたのは、現代では御坊市園と書いているのが、この札では草冠のない普通の園を用いている点で、これは単にこの氏子札の場合だけのことなのか、それとも当時は園と書いたのか、今は他の文書を調べる時間を持たないのが残念である。次に芝氏の御先祖が明治五年前ころは、松浦姓であつたという事実である。これについて御主人が先々代あたりからの伝承として、次のような興味ふかいことを話された。

松浦氏の御先祖は古くは、和佐・手取城主玉置氏に仕えた、今も川辺町玄子には古い先祖のものと伝える五輪塔がある。御坊へ出てきたのは何時の時か明らかでないが、明治初年ごろ今の芝時計店のあたりは畑や空地がおおく、屋敷の近くに芝原があった。安政五年（一八五八）生まれの鹿蔵の代に、この芝地に因んで、松浦姓を芝と改めた。

旧御坊町の地名の中に、島とか向河原とか或は梅田（埋田）・椿原・紀小竹（岸野）・簗田など、ここに集落ができはじめたころの地形をしのばせる地名が、今もいくつか遺っている。

そして、これは誰もが知っているように、江戸時代まで庶民には姓はなく名前だけで明治五年ようやく姓を名づけることが許された。この時どの家でもあわてて姓をつけたが、そのおおくは居住地の地形を家の姓に用いた。例えば岡下・池尻、川端・山西・小川がそうであって、芝姓などはその伝承がはっきりしている典型的なものであり、かねてからの私の持論を、証明するに足る資料の一つである。

随筆 日高郡誌

「日高新報」昭和五十年七月二十九日掲載

古田 武光

戦争も終わりの昭和二十年^{（一九四五）}の五月と六月の二ヶ月私は姫路に居た。部隊は当時の姫路高等学校に駐屯し、私は姫路城の真裏、道一つ隔ててお城の森と濠に面した二階の部屋を借りていた。菜穀火のなずさう播州平野の麦秋。遠い播磨の港の街尾根を金褐色に染める瀬戸内の夕焼。

それらが夕霧に消える頃、窓さきの森とお濠の間に螢の光が細く交錯し、その上にお城の影があった。

姫路はその年の五月まで一度も空襲を受けていず、五月になって始めて、近所の川西航空とその付近工場が二度のB29の空襲を受けただけなので、一般市街地はまだ健在であった。

私は、用もないので街へ出ることも無かったが、駅前通りの本屋へは時々行った。本屋に本の無い時代で、古本が少し置かれているに過ぎなかったが、それでも何がなし満たされるものがあつたのであろう。

私か始めて日高郡誌という本をみたのはこの店先である。＂という本＂という意味は、日高郡誌について聞いてはいたが、見たことが無かったからである。

姫路に日高郡誌が？

いぶかりながら奥書を調べてみたが、まぎれもなく和歌山県日高郡の郡誌である。私らの部隊は近日姫路を発つて

西に向かう。行く先は勿論、己の生死の程も分らない。私は分厚い日高郡誌を手にして、もう再び見ることがないと思つていた故郷がまだ此処にいるような不思議な思いにかられた。生憎その日は金を持ちあわしていなかったので、又来ることにして、それ迄に売れてしまわないよう、その本を書架の隅へ匿すように戻して置いた。

私らの部隊に西下の命令が下ったのはその翌日か翌々日である。終日てんやわんやの果、朝の四時頃の汽車で姫路を發つた。駅前通りの例の本屋は無論曉闇に戸を閉ざしていた。姫路大空襲はその数日後のことであるが、あの日高郡誌もおそらく私が置いたままの書架の隅で、灰燼に帰したのではなからうか。

旧制中学を田辺へ通った私は、毎朝自転車で裏道から西川を渡り御坊駅へ行った。途中、西川の堤防か、それまでの田中の道で、老令で小柄な先生タイプの方とよく出遇った。黒い鞆を小脇に、何時も下を向いて小走るように足早に、今すれちがったばかりと思つてふりかえると、もう遙か向こうを風に飛ばされるように歩いていられた。あれが常磐義塾の森彦太郎先生だと知ったのは大分経ってからであるが、それ以後、私は先生に遇う毎に自転車の上から頭を下げたが、下を向いて歩かれる先生にはついぞ一度もお氣付きにならず、そのうち私も頭を下げるのをやめてしまった。

一言、お早うございます、と言えはよかったのであろうが、少年の敬意は初恋同様相手に知られなかった方が懐かしい。

ともあれ、戦後日高郡誌も手に入れ、近日、続日高郡誌も頒けていただいた。

続日高郡誌執筆の諸先生の御苦労、御功績について、私如きが今更言う必要はないが、多くの恩恵を受ける一人として、ひそかにお礼を申し上げると共に、これも又平和な時代に生きる喜びの一つであると、近づく八月十五日を前にして(仕^{脱落})切りに思うのである。

随筆・垣のうちに寄せて

「紀州新聞」昭和五十年八月二十・二十一・二十二日掲載

①

今年度の県文化財研究会総会が、去る六月二十九日に、和歌山市の紀の国会館で開催され、御坊支部からも大勢の会員が出席した。お昼の休み時間に、数名つれあつて近くの茶房で雑談にふけたが、この時中田さとみさんに

「お父さんの随筆集は、どのくらい進んでいますか」とお伺いしたところ、

「すっかり出来上がって、昨日、印刷所からとどきました」というお返事であった。

翌日、テレビを見ながら夕食をしているとき、関祥子夫人が、

「中田さんから頼まれました」

と夜中わざわざ随筆「垣のうちより」を持参下さった。

中田さんには昭和三十八年、歌集「河」を上梓された際、いただいている。これで二冊目になる訳である。それにもかかわらず私の関係した出版物は、例えば「矢田村誌」にしても「日高民話伝説集」にしても「癸羊園叢考」にしても、買ってもらっている。のみならず最近「田淵豊吉議会展説集」全三冊も、厚かましく押しつけ売りをしている。全く恐縮のほかはない。

私は夕食をそこそこに終えて、「垣のうちより」を取り上げると、思わずアツト嘆声をもらした。三五三頁、厚表紙、箱入りの本の感触がずつしりと、こころよく伝わってくるのである。表紙「垣のうちより」の文字と、垣にまわりつく蔓草の絵は、もちろん中田さんが筆をとられたものである。つづいて見開きには

こつこつと一人はたらくわがくらし

ぼろいもうけのあるはずはなし

謹呈

清水長一郎雅兄

と著者の文字が記されている。中田さんから雅兄といわれる柄ではない。穴があれば入らねばならぬ。

正直に云って中田さんは器用なお人ではないような気がする。早いはずはなし本書の中でも「僕は、自転車に乗るのは好まない。」などまるで大会社の社長のようないことを、ぬけぬけと書いているし、たまたま自転車に乗って南谷小学校へ、学童の歯の検診に行った時の一文など、読んでいるこちらがはらはらするほど危なっかしい。中田さん自身も他のケ所で、「恐らく印南で、中田宇南ほど、ドンクサイ男はなかるうなア、と言うにきまつている」と述べておられる。しかも文学を書かせると、本書の表紙のように味のある文字を書くし、絵はちよつと素人ばなれしている程うまい。さらに随筆にいたっては、まったく余人の追隨を許さない。

いったいこれはどういうことなのか。不器用では歯科医はできなかった筈である。努力か天才か、その両方なのか。いくら考えても分からない。しかし小谷緑草君の序文にもあるように、歯科医の免状を検定試験で取得し、鍼灸技術の大半を独学で会得し、易断もやり絵も描き短歌をよくし、活け花、庭木の手入れもやる、ただし一つのことを会得するのに、人一倍努力し、ものすごい辛抱強い男であるというのは事実であろう。やはり彼は尋常の男でないのだあ

る。それが今日の中田宇南をあらしめた秘密にちがいない。

②

私はここで文章論を展開するつもりはない。私はそれほど文学者でも文学評論家でもないし、この一編の目的でもない。しかし近代文学の中で、最も愛好するのは森鷗外であり、次いで永井荷風、谷崎潤一郎の文章に強い魅力をおぼえている。

また別な意味で岩野泡鳴や葛西善蔵、嘉村磯多の文章にふかい愛着を持っている。いずれもわが国の大正・昭和の文学の主流からはなれているが、独特の趣のある文章をのこした。特に岩野泡鳴の文章などは、義理にも名文とはいえない。どちらかというと悪文という方がふさわしいかも知れない。それでいてそれが妙に私をひきつけるのである。中田さんの随筆もいわゆる名文とは趣がちがう。どこか、ごつごつしたところがあるが、そこから何ともいえぬ、ほのぼのとした香気がたちのぼって、私を酔わしめるのである。中田さんの文章はいわば絹織物のそれではなく、ごわごわした田舎の手織木綿の手ざわりとでもいえようか。破格の名文なのである。

それに形容詞の使用が、心憎いまでにうまい。例えば蛙の鳴き声を「ガボロ ガボロ ガーイ ガーイ」と表現している。宇南にこう書かれると、実際、蛙はガボロ ガボロ ガーイ ガーイと鳴いているように思われるから不思議である。蛙をこよなく愛している詩人に、草野心平があつて、彼は「蛙」と題する詩集を出し、蛙の鳴き声を克明にいく種にも書きわけているが、中田さんが無雑作に表現した「ガボロ ガボロ ガーイ ガーイ」が、新平が精魂こめてうたいあげた蛙の鳴き声にくらべても、決して遜色はみられない。

また自動車のクラクションの音を、「雷の屁のような」と形容した所もある。「雷の屁」という奇想天外の言葉が、どうして思い浮かんだのであろうか。云い得て妙というほかはない。

こんな風に一つ一つ例をあげていては、切りがないから、ここらでやめておくが、全篇このような警句とも何とも云いようのない語句が、いたるところにきらめいている。私はこの一冊を、ある時は笑いをこらえながら、ある頁ではしみり感慨にふけりながら読んだ。そして、そこに、一本ふといヒューマニズムの流れが、静かにとどまることなく流れていることを感じた。

そして、この一冊を生み出した世にも美しい中田一家を羨ましく思わずにはいられなかった。中田宇南は検定試験で歯科医師の免許を取得し、ペンを執れば余人のまねる能わざる随筆を書く男である。しかし世俗的には気の利かぬこと夥しく、外出すれば股ボタンをかけることを忘れ、汽車に乗れば切符を失い、たまたま金を持たすと京都の真ん中で、お札を路上にまいて、あわてふたむいて拾い回る男である。根は心のやさしい男でありながら、骨の折れる正

月のお餅搗きは奥さんと子供にまかせて、自分はぬくぬくと夜具の中に居て、でき上がった餡餅を枕もとへ持ってきて食べて食べる。勝手な小暴君である。

たいていの家なら、このような得手勝手な振舞をすれば、恐らく家族中の総攻撃を受けるにきまっている。しかし中田家ではこの主人の気ままな行爲を敢えて咎めることはなく、笑って温かく抱擁してゆくのである。のみならずみよし夫人を中心に、子女が実に細かく気をくばっているのである。勿論、中田さんは表向きはそうみえても、古い言葉を用いるなら志操堅固・品行方正、家長として成すべきことは、きちんと果たしているからに違いないし、一つには中田さんには自らにして、そなわる人徳のしからしめるところであろう。

③

最後に随筆集「垣のうちより」の著者は、いうまでもなく中田宇南さんと、故中田ほづみさんであるが、これは中田家総ぐるみの著書といえるのであろう。現に私が六月三十日の夜、この書をはじめて開いた途端、中から枝折がわりの可愛ゆい、姉様人形の折紙が出てきた。長女さとみさんの作であるときいた。ただ一つ残念なのは最初によ

「お父さん、随筆集、是非出しよしよ、お父さんの随筆には、何とも云えぬよい処があるさか是非出しておきよしよ」

と進言した二女ほづみさんが、若くして既に世を去られた事であるが、中田さんはかたみとして、ほづみさんの随筆「垣のうちより」一編をおさめ、かつ書名とし共著という形で故人の名をとどめるなど、細かい配慮をしている。

また巻頭には故人の写真を掲げている。関祥子夫人は、過日、日高新報紙上に寄せたこの書の読後感の中で、故人の写真に触れて「さらさらと黒髪の音までよみがえらせる」と、女性らしい感想を述べられている。私がはじめて中田家をお伺いしたころは、まださとみさんも故人も啓吾君も、高校生か中学生の時分であった。ある年の正月、中田さんのお宅で御馳走になって酔後、打揃って切目王子神社に参拝し、社頭で撮した写真が今も私の手元にある。ほづみさんが開いていた御坊市新町の英語塾へ、何かの用件でお訪ねしたこともあったし、あれはいつであったか文化財研究会御坊支部の一行が、有田市小豆島の浄妙寺を見学した際、誰が撮したのか同寺薬師堂の前に腰をおろしている、ほづみさんのスナップ写真がのこっている。

随筆「垣のうちより」を読んでいると、あれこれと過ぎし日のことどもが、次々と去来して止まるところを知らない。

歩きさん

「紀州新聞」昭和五十年八月二十二日掲載

大型の台風五号が北上を続け、十六日朝には紀伊半島の太平洋岸に接近、同日夕には四国から紀伊半島の太平洋岸に上陸する公算が大きい、という気象情報がテレビを通じて知らされたのは、たしかお盆の十五日の午後であったと記憶する。

昭和九年九月二十一日の室戸台風をはじめ、昭和二十五年九月三日のジェーン台風、さらに昭和三十六年九月十六日の第二室戸台風と、いくつかの猛台風に遭遇し、台風のすさまじさを胸身にしみる程、脳裏にやきつけられている私は、以来一種の台風ノイローゼ気味になって、台風が発生したと知ると、テレビの気象情報に神経を尖らせては、いつも家人にわらわれている。

台風という表現が用いられはじめたのは、おそらく第二次世界大戦後のことと思われるが、それまでは暴風。もつと古くは庶民の間では、何のかざり気もなく大風とよんでいたようである。私の子供の時分にも台風はあった。そのたびに祖母と母と弟と私の四人で、必死になって今にも吹きぬかれそうな雨戸を押さえ、祖母がときどき大きな声で、「ほおいい、ほおいい」と外にむかって叫んだことを思い出す。こうして家の中から大声で叫ぶと、風が逃げ出すのであると、祖母からきかされた。気のせいかな祖母が大声で風を追うと、しばらくはたけり狂う風勢も、いくらか弱まるように感じたから妙である。

台風情報が出た翌日の八月十六日は、朝からしとしとと静かな雨が降っていた。昭和二十五年のジェーン台風の朝も、いわゆる嵐の前の静けさで、無風状態の中で音もなく糸のような雨が降っていた。勿論そのころはテレビはなく、ラジオさえあまり普及していなかった。ジェーン台風当時さえ、そのようなぐあいなのだから、それ以前は台風圏内に入るまで、誰にも風の襲撃を知る術はなかった。

ただ多年の経験と勘で海辺の人、特に漁師たちは、ある程度風のくることを予想したし、農村地帯でも雲行きや波の音で気象の判断をしたものであった。例えば私の居村川辺町大字小熊辺りでは、空を仰いで雲が日高町志賀方面に、飛ぶように流れると大風。また、浪音が御坊市名田から印南町印南の方から高くきこえてくる場合も大風といわれていた。

八月十六日の朝、庭に降る細かい雨脚をながめながら、私は何時間か後に荒れ狂うであろう台風を想像し、或はかつて私たちの父祖が遭遇した災害の苦難と、自然とのかかわりあいを思った。そして炎暑の後で今日のような雨のあった時は、それこそ旱天の慈雨とばかり、数時間後に襲来する台風を知る由もなく、よろこんだにちがいないと考えた。

近年は一般に休日が多くなって、農村でも日曜休日を実施している所が少くない。しかし戦前の農村では、その

ような気のきいた制度のあろう筈はなかったが、そのかわりに毛付休み・牛休み・虫送り、或は五風十雨のおだやかな天気が続くと、順気休みという風流なものがあつた。さしづめ十六日朝のような雨でも降ると、早速、雨休みになつた。

矢田村誌によると、川辺町矢田地区に村内放送施設ができたのは、昭和（一九五八年）三十三年十二月二十二日で、村内三十三カ所に拡声機が設けられたとある。以来、区長からのさまざまな連絡事項は、すべてこの放送施設によつて流されるようになった。その後これが有線放送電話にかわつて、町民へのあらゆる連絡はこれによつて伝達されることになつたが、こうした便利な施設のなかつた時分は、特定の人が各戸へ触れ回つたものであつた。

これは「歩き」とよばれて、どの字にでも一人づつ置かれていた。森彦太郎先生の非常な苦心のあげく公刊された「日高近世資料」中の「日高鑑」は、日高地方の近世史を研究する上で、欠くことのできない基礎資料であるが、その中に各村の村勢を記して、庄屋・年寄等、藩政時代の村役人を載せているが、ここには必ず「壺軒ありき」と、歩きのことを併記している。庄屋や年寄とは役柄（がら）こそちがうが、やはり藩政時代は公的な存在であつたと見られる。

川辺町ではいま同町誌の編集が進められているが、藩政時代の文書をみていると、「歩きを以て触れさせる」という言葉が、しばしば出てくる。私たちが子供のころ字に何か事があると、必ず歩きが戸ごとに触れまわつてきた。さしづめ今日のような待望の雨に恵まれた時は、きつと「雨休みでございます」と触れまわつてきたのである。

私は降つたりやんだりする弱い雨脚をながめながら、子供のころ触れまわつてきた幾人かの、「歩きさん」たちのなつかしい面影を思ひうかべた。

歩きさんは、どちらかというと村でも比較的、ゆたかでない人が何年か交替で勤めたが、おもしろいことにどの歩きさんも妙に人のよい、酒好きの人が多かつた。「今日は雨休みでございます」もうとつとくに故人になつた大正・昭和初期の歩きさんの声が、今にも植込みのかげから聞こえてきそうな錯覚が、いつか私の頭をおおいはじめた。茫々何拾年か昔のことであるのに。

随想紀州第二集を拾い読みして ①

「紀州新聞」昭和五十年十月十五日掲載

中野 伝一

清水長一郎氏とは二回ぐらいお会いしている。いずれも郷土史に関してだと思う。氏の「矢田村誌」は有名で、私も市町村誌編集にいろいろ参考にさせてもらった。おそらくその後に出た地方誌で、「矢田村誌」に負うことのないものはなからう。

「続日高郡誌」の方も、ほんこのあいだ拝読した。そしてもうすこし早く見られたらよかったのにと思った。というのは、私は都合で日高出身の郷土史家であった井上豊太郎氏の出生地なり、出生年や、若い頃のことを知りたいと思ひ、大分あちこち煩わしたのであるが、すべてダメ、しまいには井上氏の息女にまで問い合わせたのに、父の幼い頃のことは何も存じておりませんのご返事しかなくて失望した。こんなことなら、はじめから清水長一郎氏にお聞きすればすぐ分かったのにと「続日高郡誌」下巻の人物誌を読んで後悔しているものである。

氏は森彦太郎先生の直弟子だけあって、まあ「郷土史の虫」といつてもよく、日高にとっては貴重な存在である。文はさすがに郷土史随想だが、氏も書きなれているので、ぎこちなさは知らなかった。しかし歌はあまり感心しない。正直にいつて歌が邪魔している。むしろ挿入しない方がよかったと思う。「おらが春」が気に入った。そして青春の残像に共鳴し、喝采を贈りたい。

氏は日高の民謡集だの、民話伝説集などを出され、「続日高郡誌」の企画刊行にも一役買っているとのこと。なかなかよい仕事を残しているのに敬意を表しておく。

堀内喜一郎氏には多くをいう必要がない。大正の昔、氏が当時の「紀南新聞」に載せた「大地を踏みしめて」の大論文以来畏敬している。それは御坊校での氏の教育革新運動が当局―その頃は郡視学であるが―忌いにふれて、東内原校へ突然転任されたうつぶんを、約一ヶ月にわたり堂々と連載したもので、これは日高教育界に大きな反響を生んだ。実は私もそれを読んで大いに青春の血をわかしただものであるが、あのときから氏の文はうまかった。

氏には「教育に生きる」と「教育随想」などの著もあるとおり、たしかに文筆家であり、文を書くのに億劫ではないはずなのに、最近あまり書かれないようである。やはり体調のためと思うが、集中三篇も四、五年前のもので、新しいものがなくて折角の期待がはずれた。正直なところ、教育界での堀内氏の存在は、単に日高地方だけでなく、和歌山県に大きいことから、氏の再起を期待してやまない。



いま御坊市教育長をしている高垣俊雄氏もよく存じている。はじめの教育長時代にたびたびお目にかかったからで

ある。小柄であるだけに動きがよく、好感の持てる方であった印象がいまも残っている。あれからお目にかからないが、御坊中学校や大成中学校長をされて、またもとの古巣にもどっているらしい。

「朝起き」と「じじばか」によく氏の人柄が表れているように思う。「文は人なり」はたしかといえる。遺憾ながら「日の丸」はいただきかねる。

随想紀州第二集を拾い読みして②

「紀州新聞」昭和五十年十月二十三日掲載

中野 伝一

― お詫びなど ―

十二日から十六日まで、四回にわたって本誌上を汚した拙稿は、はじめにもお断りしたように、生憎私の体調が悪くて執筆がぞんざいであるのであったのを反省するのであるが、それにも増して思いつくままにいい加減なことを書きなぐり、随筆執筆の皆さんにご迷惑をかけたことを、重ねてお詫びせねばならぬ。ところがどうした間違いか、十五日付けの紙上に出た清水長一郎氏の終末に、要海正夫氏のものが混入し、おかしなものになったので、これは訂正しておかねば誤解を招くから、この稿を起すことになったのである。

これは多分印刷の方で私の原稿を一枚分ぬかしたためにこうなったものと思われるが、「しかし歌はあまり感心しなかった」から以下は、要海氏に対するもので清水氏とは無関係であり、そのかわり要海氏の前半が全く抜かされているので、それを補うことにする。

実をいうと、清水氏の文末も消えているわけで、「桃の花」のところでは雛祭りにきつと取り出すとある自慢の軸、野際白雪の紙雛の半切りには、本居大平の歌一首の讃があるのを羨んだのと、「灯火雑談」には雑談にことよせて、日高地方の家庭灯火の歴史をちゃんと説いているあたり、お手際鮮やかというようなことを書いたつもりであることを付記しておく。

○

さて肝心の要海正夫氏であるが、氏は印南町の教育長をしているとき、何かの問題で日高と有田の教育長有志が、印南町役場か公民館かに集まった折り、はじめて会ったきりだが、早いものであれからもう二十年近くになる。あの

頃の氏は四十台の油の乗り切ったときで、意気当たるべからざるものがあつた。その後県立潮岬青年の家所長などして活躍されたのに、停年退職をして、いま一介の商人生活を送っているとのこと。「商人の歌」で公職を失った者のわびしさをかこっているが、まだまだ老兵は消えて行く歳ではない。私とは一まわり以上も若いのだから、商人になり切らないで多方面で活躍したもらいたい。氏は相当弁舌が立つようだが、文筆も達者なもので、これだけ書いたらこの方面でも大きな期待がもてるわけである。

実はここらあたりから「しかし歌はあまり感心しない」に移って行つたのだが、ただし歌は感心しないといったのは、文にくらべてのことで、歌そのものは拙いというのではない。折角作歌を楽しんでいるのに、水をさしたものでないから、ご勘弁願いたい。

それから楠ハナエさんの次男に、私の家内の姪が嫁いでいるとしたのは、長男の間違いだとか家内か注意を受けたので、序にこれも訂正せねばならぬ。



実をいうと、あれから二ヶ月間ほど悩んだ私の健康も、幸いなことに日高の煙樹ヶ浜にある国立療養所竹中院長さのおかげで、ウソのように回復してもとの元氣を取りもどしたので、こんどは拾い読みではなしに、すっかり読み終わった。そして日高に文筆家の多いのにますます感心した。筆者は年代・性別・職業などから見てもバラエティーに富んでいるので、読む者を飽かせなかった。そのうち特に印象に残つたものを挙げると、郷土史家の小谷緑草氏のくだけた文は面白かった。氏は禿頭の持主らしが、そこから妖氣のようなものが発散して人を引きつけると、新聞販売業をしている細尾伊三郎氏が書いている。その細尾氏自身も文には人を引きつけるものがある。

税理士の志村亘美氏の「怪軽笑辞典」（会計小辞典）は、税法・会計など、堅固しくてむづかしいものを、あれだけくだけて書けたものだとか関心のほかない。いま職業訓練校の嘱託になつていという中山直春氏の文も、お歳に似合わない若々しく、三十年あまりも教師をした堅さがすこしもない。観光旅館経営の畑木久夫氏は、辿つてきた職歴から見て意外にも軽妙な文であるのと、医師の西川清定氏は、川原河で三代にわたり、医は仁術なりを守り続けている点が伺われて、その誠実さに好感がもてた。

女性達も多彩で、文筆家を目指す石原滝子さん、作家を指向する酒井絹江さん、歌人の中村兼子さん、テレビのドラマ作歌の谷出常代さん、料理学校経営の福田百合子さんなど、それぞれ年齢のちがいがあ、個性があつて面白かつた。

こんなことを書き並べて行くと、いくらでもあつて尽きないが、とにかく堀内喜市郎氏から恵まれたこんどの「紀

州随想」の第2集は、私にはいろいろの収穫のあったのを喜びとするものである。

小学生の頃

「紀州新聞」昭和五十年十月二十二日掲載

この数年前から小学校の百年史の刊行が全国的に行われているようである。

何でも集めることの好きな私は、郡市内のどこの小学校の百年史でも、発行されるごとに、ごむりをお願いしては手に入れているが、それが今では十六冊にもなった。まだそのほかに和歌山市西和佐小学校や同じく宮小学校のもの、県外では大阪市立中大江小学校のものがある。この三冊は私が小学校百年史を集めているときかれた堀先生が、わざわざお届け下さったものである。

郡市内十六校の百年史といえば、これまで日高地方で発行された小学校百年史のほとんどを、ほぼ網羅したことになるが、ちかくの稲原西小学校のものが欠けている。これは私がうっかりしていて、気がついた時はすでに全冊が配本された後で、どうしようもなかったのである。

集まった小学校百年史はそれぞれの编者や編集方針にしたがって、体裁もちがうし内容も精粗さまざまであるが、私のように地方史に関心をよせている者にとっては、得がたい資料の一つであるし、ともかく二十冊ちかくそろったところは、一寸した壮観といっても過言ではない。

ところで今まではよその百年史ばかり眼を向けていたが、こんどは自分の方へもお鉢がまわってきて、私の母校、川辺西小学校でも来春二月、創立百年の式典をあげ、同時に百年史も刊行すべく目下編集委員の間で、着々その作業が進められている。顧みる^{一九九四年}となど書くとはひどく大袈裟な形容になるが、早いもので私が川辺西小学校の前身、矢田小学校へ入学したのは大正三年四月、七歳の時であるから、ちょうど六十年の昔になる。

当時はランドセルや鞆など気のきいたものを持っていた子供は、まったく云ってよい程すくなく、教科書も学用品もすべて木綿の風呂敷に包み、木綿の筒袖を着て履物に自家製の藁草履であった。木綿の筒袖がいつごろ学生服に変わったかは小学校百年史の卒業写真をみてゆくとはっきり分かってくる。

いよいよ今日から学校へ行くという朝、村の上級生のリーダー格が、子供の一隊をつれて、「〇〇〇はん学校へ行くかんかいよ」と、家まで誘いに来てくれた。「行つて参じます」とあいさつをすると、私は元氣よく鞆をかけて家を出た。布製の粗末なものではあったが、他の誰もがついていない鞆を用意してくれたのは、たぶん父親のないわが子への、母の精一杯の心やりであったのにちがいない。大事なことはすぐ忘れるくせに、一年生のとき毎朝上級生が、

「〇〇〇はん学校へいかんかいよ」と誘いにきてくれた、一種独特のアクセントが六十年を経た今も耳にのこっている。

小学校は部落の中央の見晴らしのよい高台にあった。私は小柄で泣き虫で成績の悪い、パツとしない生徒であったが、複式授業で同じ教室の上級生が、親切にいろいろ面倒をみてくれた。担任は後年すぐれた教育家として知られた阪本浅之助先生であった。けれども一年坊主の私たちには、むろん先生のお人柄がわかるう筈はなかった。

大正四年十一月十日、京都御所で大正天皇の即位大礼が行われ、日本中は慶祝の行事にわきかえり、小学二年生の私は全校生徒にまじって旗行列で村をまわった。どんな道順であったかは忘れたが、手に手に日の丸の小旗を打ちふり打ちふり、奉祝の歌を大きな声でうたった。何でも歌の終わりに、「万才万才、万々才」とあったのだけをおぼえている。いまから考えるとあれは、千津川のどこかであったような気がするのだが、折から旗行列で学区内をまわっている中津川小学校の列を遠くからみかけ、互いに小旗をうちふり万才を高唱しあったのが、つい昨日今日のこのように思い出される。

小学校から細い道をへだてて、東に竹藪があった。何年生の時であったか、竹藪と小学校の間の溝にかけられた小さな石橋の下に、何か得体の知れぬ動物がひそんでいると、上級生が騒ぎだしたことがあった。やがて先生も加わって網を張り、片方から大勢が竹棒でつついたところ、大きな狸が飛び出して生けどりにされた。狸は金網をした箱に入れられて生徒が蜥蜴や川魚を捕ってきて飼育した。人も世間ものんびりした時代であったが、人を化かす筈の狸までも、こともあろうに、小学生に生けどりにされたのである。よほど世の中が悠長であったものと思われる。

小学校に学校図書館というほど整ったものではないが、数十冊の生徒用の貸出本があつて、本好きの上級生が毎日借り出しては読んでいた。私も四年生か五年生のころからこの貸出本を読んだ。巖谷小波の「世界お伽噺」という叢書であつたが、これが少年にとっては、この上なく面白い読み物であつた。叢書の中の「世は情」・「朝星夕星」・「魔法のランプ」などは、七十に手のとどく今でも、なつかしく思い出される。

龍女がくれた宝珠

「紀州新聞」昭和五十一年一月一日掲載

①

由良町・鷲峯山興国寺の開山・法灯国師八拾五歳の御時、興国寺禅堂で説法を続けていると、座中にあつた若い女が歩み出て、妾に五戒を授けてほしいと懇願した。国師はこの女が実は龍女であることを知り、ねんごろに菩薩戒を

授けた。女は妾はいま無上妙法の戒を受けることができた。この御恩は必ず三日のうちにお返したいと礼を述べると姿をかき消した。

その翌翌日の午の刻（現在の正午ごろ）、法灯国師が僧堂で小憩していると、どこからともなく美妙的な音楽が流れてきて、急に空がかき曇り雷さえ鳴り出したかと思うと、大地が震動して天の一角から何物かが鋭い光を放ちながら、鷲峯山の頂上に落下した。国師は時を移さず人々をひきいて山を分け登ると、美しい玉が三個、石の上に並んでいた。国師がこの玉を手にして大いに飲んでいると、さきの日菩薩戒を授けた女が、忽然としてあらわれて云うには、

妾は、まことは龍女である。この三つの珠は仏がこの世におられた頃から、龍宮城に秘蔵されてきた如意宝珠である。妾はいま前日の大恩に酬いんため、この珠を国師に献じて、永く仏の正法をお護りしたい。

またこの地は南海補陀落山と境を分かť大霊場である。これを世に知らしめ永く世に伝えるため一字の伽藍を建立し、珠石山長谷寺とよんでほしい。

と述べるや龍女の姿は消えていた。

このことをきいた村人たちは、歓喜して先をきそいで浄財を喜捨したので、たちまち莊嚴な一字ができ上がった。現在の由良町畑にある珠石山長谷寺である。

②

龍女が天から降らしめたと伝える宝珠は、ある記録によると一箇は埋めて山門の鎮めとし、一箇は円山に埋めたが、誰にもその場所は分らない。残りの一箇は興国寺の宝珠箱におさめられ、老師一代にただ一度だけ拝むものとし、昔から俗に開山の玉とよばれ、測ることのできないほど靈驗あるものとされていた。

また村の云い伝えによると寺の盛んな時は、夏になるとこの玉は自然と汗ばんでいたもので、日照りが続くと玉を捧持して由良湾の桜島に行き、海に沈めると俄かに一天が曇って、待望の雨が沛然と降るのが常であった。しかし江戸時代の中ごろから寺運が衰えるにしたがい、この玉も折があつたら逃げ去ろうとする気配をみせた。そこで遂にこの玉を焼いてしまったため、以来、祈雨の靈驗がなくなった。

また元禄ごろ書かれた寺の什宝帳には、「この宝珠四十年前、盜賊に奪い去られた」とあるという。いつであったか興国寺に伝わる宝珠というのは、或は隕石ではないだろうか、うがった説をもちだした人もいたが、やはり龍女が国師に献じた、龍宮の秘宝如意宝珠としておいた方が、ほのぼのとして奥ゆかしいではないか。それにしても寺運が傾きそうになると、さつさと逃げ出そうとするなど、なかなかこの玉は当世向きでユーモラスでもある。

明治初年の日高川改修

「交通と公害」昭和五十一年一月一日掲載

今は日高川の川口から水源地の護摩ノ壇山まで乗用車やトラックで行けるが、これはついこの間からのことで、大正時代はまだ、ヤット牛馬車や人力車が通るくらいの細い道であった。

もっと古い時代、明治も半ばごろまでは、人や馬が通るだけの、いわば山道が川と山裾の間を、縫うように通じているにすぎなかった。したがって山間部の木材や木炭をはじめ、いろいろの物資は、筏や川船で幾日もかかって御坊まで運ばれてきたのであった。つまり日高川は現代の県道にかわる、重要な輸送ルートであった。いまでも日高川の所々に、「南無阿弥陀仏」と彫りつけたり、中には仏像を大きく刻んだ大きな岩がのこっているが、昔の筏師や船頭たちが、朝夕、航路の安全を祈りながら、川を上下した名残りである。それ程、日高川にはいわゆる難所や激流がおかつたのである。

もう今では思い出す人は少ないが、江川村（現川辺町江川）に瀬見善水という人があった。江川組の大庄屋をつとめ、明治になってからは日高民政局知事ををはじめ、神奈川県租税課長などになったばかりでなく、和歌・国学をも究めた文化人でもあった。

ところで、この瀬見善水が明治初年、^{二八六八年}日高民政局知事の時代、日高川の輸送ルートを重視して、川中の巨岩を取り除き航路の安全をはかるべく、下は川辺町三百瀬から上は龍神村までの川筋を調査して、火薬を使って一つ一つ爆破したことが日高郡誌にあるが、当時の関係絵図が現代も御坊市の某家に秘蔵されている。それによると明治二年十一月まず火薬による碎石爆破試験を行ったとある。

明治二年已十一月ヨリ火薬弾力ヲ以碎石

為試験、下和佐村内千曳ニテ同村奎右衛門所持田中ニ古来所有ノ大石破碎スルコト左記ノゴトシ

大石、上面六・七疊モシクベシ。高土際ヨリ凡一丈ヨ。^余土中凡三・四尺。初メ三発ニテ響割放レテ更ニ三発ニテ割放レテ四キレトナル。跡小割イタシ大川除営繕ニ用ユ

川船三十二ハイ

此貫目六千四百貫目

同 十八ハイ

此貫目三千六百貫目

一くだきノ直

凡銀八百廿五匁替

外ニ板石小割石多分有之貫目不詳

これが絵図面に記された原文である。

なおこの時、爆破した岩に一つ一つ番号を付け、岩の大きさ爆破の状況、日月、所在ヶ所も明記しているが、その最下流のものは、

壺番 三百瀬ハカリ岩 長四尺ヨコ三尺高四尺

午十二月十三日 二発ニテ砕去ル

で最後は

百廿一番 東村

長横高五尺ヅツ

酉第一月七日一発ニテ砕去

（一九七〇年）

とある。参考までに記すと午十二月は明治三年十二月であり、酉第一月は明治六年一月にあたる。また東というのは龍神村東のことであるから、約三年がかりで三百瀬から龍神村までの日高川中の巨岩、百二十一ヶを順次爆破して行った計算になる。当時としてはまさに大きな河川工事であったといえようし、大正中期ごろまで、この工事によって日高川の水運が、どれだけ便利をこおむったか量りがたいものがあつたである。

交通史話

汽船が通っていたころ

「交通と公害」昭和五十一年二月十五日掲載

第二次世界戦争でわが国が無条件降伏をして、しばらくは全国交通機関、特に汽車や電車は混乱を極め、駅の窓口には連日長い列が続き、やっと乗車券を手に入れてもどの列車も超満員で、乗客はガラスの破れた窓から降り降りするという、いまから思えばまるで夢のような騒ぎであつた。

しかし平和な時代とはまったくありがたいものである。いまはどの列車にも殆んど冷暖房装置がゆき渡り、朝、御坊駅を発つとその日のうちに東京都まで行けるようになった。江戸時代ならおよそ一ヶ月ちかくもかかった道のりである。明治初年ごろの人にみせたなら、恐らく目をわすにちがいない。わずかに二、三十年來の出来事である。

私は明治四十二年^(一九〇九年)に生まれた。続日高郡誌の「国鉄・和歌山本線年表」によると、この年十二月和歌山県選出の代議士山口熊野が有志とともに紀勢鉄道建設案を議会に提出し、衆議院を通過したが、四十四年三月、貴族院で否決された、ある。

猿のせてゆくや熊野の山の旅

という句がある。多分そのころできた句であろうが、熊野のような僻地へ鉄道を敷いて一体誰が乗るのか、せいぜい猿でも乗るのかと、多分に輕蔑の意をふくめた句である。けれども明治の末年、幸徳秋水を迎え西村伊作を生み、大石誠之進と詩人佐藤春夫を育てた熊野人の反骨精神は、明治四十五年^(一九一二年)(大正元年)十二月四日、新宮鉄道を勝浦、三輪崎簡に走らせ、翌二年三月一日、これを新宮まで延長した。

そのころ日高地方では唯一の交通機関として、大阪商船の緑川丸・竜田丸(各鋼船、四〇〇^ト級)が御坊港に寄港していたに過ぎない。港へ寄港するというものの周知のように、御坊港は遠浅で、沖合はるか波間に錨をおろし、本船までは日高川口から小さな「はしけ」で旅客も貨物も手漕ぎで運んだものであったが、少し海が荒れると船は比井の港についたものであった。私は今から思うと残念なことに、当時の汽船(そのころ蒸気と称した)に乗った経験はないが、食事は船酔いのはげしい日御碕沖で出すなど、商業主義とは云いながら、随分ひどいものであったらしい。汽船時代に最もこの航路を利用したのは、当時の県会議員、故夏見康太郎氏と御坊新地の芸妓の周旋業の某という婆さんであったと聞いている。

大正十年^(一九二一年)一月紀勢西線は和歌山市駅を起点として工事をはじめ、昭和二年^(一九二七年)八月十四日湯浅駅まで開通した。これに先だつこと数ヶ月、大阪商船は紀勢西線の南下に対応して、これまでの紀州航路の七〇〇^ト級を改めて那智丸・牟婁丸(各鋼船、一六〇〇^ト)を、同年十二月末から就航せしめた。この両船の汽笛はその時分はフイトとよんでいたが、これまでとまるで変わった一種独特の大きな音を、御坊周辺の町村一帯に響かせた。今から思うとまったく笑話の限りであるが、それはあたかも噂にきく狼の遠吠えにも似た、底力のこもったものすごい響きであった。

今だから正直に白状するが、田舎者の私はこのようなすさまじい音を耳にするのは、生まれて初めてのことであった。したがってこれはつきり狼の遠吠えにちがいないと、もしそれであったなら何の役にもたつ筈はないのだが、勇気をふるって風呂焚用の割木をひっさげて、家の周辺を警戒したことを五拾年を経た昨今でも、どうかのはずみでハッキリ思いうかべることがある。よほど印象が深かったのにちがいない。

こうして大阪商船紀州航路の花とうたわれた豪華船、那智丸・牟婁丸も昭和十三年^(一九三八年)八月六日、別府航路に転じて同年十二月紀州航路にピリオドを打った。思えば世の中がすべて、おだやかなよき時代であった。

龍のはなし

「紀州新聞」昭和五十一年一月一日掲載

①

辰年を迎えるにあたって、とり散らすだけとり散らした机の周りをかたつけながら過ぎこし方や、やがて来たるべき新しい年を、一人あれこれ思いめぐらしているうち、辰の年に縁の深い、むかし読んだ、鎌倉三代将軍源実朝の八大竜王の一首が心に浮かんできた。

この歌は周知の通り実朝の家集「金塊集」の最後に、

建暦元年七月洪水漫天土民

愁歎させむことを思

ひて一人奉向本尊聊祈念

と云う

と前書きがあつて、

ときによりすぐれたればたみのなげきなり

八大竜王雨やめたまへ

と載せられている一首である。

前詞の意味は建暦元年七月（一二二一）天下に洪水がおり、国民が憂い歎いているであろうことを思い、念持する本尊に向い奉って祈念するというほどのことであろうか。今から数えて七百六十五年前の古い話である。つづいて和歌の方は、これは八百年ちかくたつた現代でも、誰にでもわかるくらい平明である。すなわち雨も風も大事であるが、それも度がすぎると国民に禍をもたらし、人々の大きな嘆きとなる。雨を司る八大竜王よ速やかに雨をやめたまえということになる。

私たち戦前の教育を受けた者は、源実朝は頼朝の次男で、建仁三年（一二〇三）征夷大將軍、後に右大臣になったが、生来柔弱な質で京の文化にあこがれ、和歌風流を好み、どちらかというと源氏武士団の頭領としてはふさわしからぬ器であつたと教えられてきた。

しかし彼の家集「金塊集」をみる限り、実朝は決して和歌三昧の柔弱武士とは思えない。例えばこの八大竜王の一首をみても、その詠いぶりの堂々として、祈念などというやさしい調べとはちがひ、雨の神八大竜王よ、御身たちの降らした雨のため、わが国民はかくも嘆き悲しんでいるではないか、直ちに雨をやめ給えと、威風あたりを

払うばかりに、征夷大將軍実朝が、大声叱咤する声が凜々と響きわたるのをおぼえる。

ところでこの歌に詠まれている八大竜王とは、水神であることはすぐ想像されるものの、一体どういう神々なのであろうか。私は机辺の整理をそのままにして、手近にある一、二の参考書を取り出してみた。まず南方熊楠全集第一巻十二支考の竜の部をひらくと、南方先生一流の博引ぶりで、竜に関する東西古今の話が語られているが、こういう書き並べられると、今度は読む方の頭がこんがらがってくる。そこでこう云うとき一番わかり易く要領のよい広辞苑に拠ることにした。

広辞苑曰く

八大竜王

八体の竜王・難陀・跋難陀・娑羯羅(しやがら)・和修吉(わしゅきつ)・徳叉迦(とくしゃか)・阿那婆達多(あなばだた)・摩那斯(まなし)・優鉢羅(うはつら)

さらに同書の竜の部をみると

竜

海中または池沼中にすみ、神秘力を有するという想像上の動物。姿は巨大な爬虫類で、胴は蛇に似て剛鱗をもち、四足。角は鹿に、眼は鬼に、耳は牛に似、地上では深淵・海中に潜み、時に自由に空中を飛翔して雲を起こし雨を呼ぶという。インドでは仏法を守護した説話が多く、——中略——竜王はその威力を神格化したもの。

わが国では竜神と呼ばれる——下略——

とある。

②

そういえば日高郡には、この竜神を奉祀したことから、ついに村の名前となった温泉や、中山介山の小説「大菩薩峠」、有吉佐和子の「日高川」で知られる龍神村がある。「紀伊続風土記」龍神村の条には、

——以上の小名を合わせて竜神村と云ふ。竜神の名は湯本に難陀竜王社があるより起れり。古より此地に世を避け乱を逃れし人多くして、遺蹤山谿の間にありて村老の口碑に遺るといへども、其伝区々にして分明ならず。とあり、ついで小祠五社を掲げてその第一番に

難陀竜王社

社地周廿八間。湯本にあり。湯本の産土神なり。勧請の年代詳ならず。山中に竜神を祭る事深く由緒あるべ

し。或は竜神氏此地に居して祭る所といひ、或は竜神は古よりの鎮坐にて、竜神氏は此地に来れる故氏とすともいう。

とある。

日高郡誌によると、竜神氏は姓は源氏・治承四年五月（一一八〇）源三位頼政宇治に敗死の際、末子頼氏遁れて日高郡竜神谷に落来り、其の地を領す。因りて竜神を以て氏とす。とあるから考えても、この難陀竜王社は竜神氏以前から奉祀されていたのちがいない。

前記「紀伊続風土記」の記述にしたがうと、この難陀竜王社は社地周廿八間というからまったく小祠にすぎない。しかし社地が広大で社殿が壮麗であるから、必ずしも由緒のふかい古社とは限らない。むしろ村里の片隅にひっそりと忘れられたように、まつられている小祠こそ、古くから村人の信仰をあつめてきたとも云える。殊にこの難陀竜王社は竜神村の名の起源とさえなっている。ところが竜神村にとって、これほど大切な竜王社も、湯本には今まつられていないのではないかという気がする。というのは日高郡誌にも続日高郡誌にも、すでにその神社の名が見当たらないからである。

もし私の推察どおりとすれば、恐らく明治末年の神社合祀令によつて、近くの皆瀬神社に合祀されたものであろう。神社合祀の強行は当時、南方熊楠翁が気狂い扱いにされながら反対されたように、明治政府の、大きな失政の一つであつた。

昔を今に成す由もがなで、今さらいくら嘆いたところで、どうにもなるまいが返す返す惜しい気がする。

辰の話が正月早々ともないところへ脱線したが、実朝が八大竜王を叱咤した意気で、昭和五十一^{一九七六年}年辰年を乗り切つてゆきたい。

いろいろのことはあらんも わがやからまもらせ給えと初詣でする

交通雑話

汽船が通っていたころ

「交通と公害」

はじめに

前号で私は「交通史話・汽船が通っていたころ」と題する雑文を書いたが、「交通史話では少々、題名が大袈

装にすぎる上、史話と称するほど学究的な内容でもないので、今回以降はこれを「交通雑話」と改めて、気楽に昔の交通状況をあれこれと書き続けることにする。

さて私は前号において昭和初年・大阪商船株式会社が紀州航路に、那智丸・牟婁丸（一六〇〇ト級）の新鋭船を配したことを述べたが、当時の資料によると船賃は大阪〜御坊間二円、ほかに急行料金行料金参拾銭が加算されて、二円三十銭。和歌浦〜御坊間八拾銭、急行料金三十銭、合計一円十銭ぐらいであったという。その上そのころになると食事も余程改善され、船内では一流旅館程の食事が出るし、船員が素人芝居を上演して船客を慰めた。紀勢鉄道の南下のため、会社も旅館のサービスにいろいろと苦心したのである。

所要時間は大阪〜御坊間約五時間、和歌浦〜御坊間約二時間、田辺市へ一時間であった。急行や特急が二時間足らずの時間で、天王寺〜御坊間を走る。今から考えると、まるで夢のような気がする。いま私の手もとに大正十五年九月の汽船の時刻表があるが（下表の通りで）、それによると、

ところで、今も昔も同じことで、御坊港は遠浅で港灣らしい設備は殆んど備えられていない。従って少し海が荒れると、汽船は御坊港を素通りした。せっかく乗船するつもりで来た人も、浪のおさまるまで宿屋住まいをするか、一旦自宅で待機するより外はなかった。その点規模は小さいが、隣村の比井浦（現日高町）は天然の良港なので、少しの風波にも比井港へ汽船が着いた。自然これらの人を受け入れるために旅館があつたし、御坊附近の人は比井港で下船して、小坂峠を越えて村々まで販ったものであつた。

少し古いが大正^{（一九一七年）}六年に編纂された「比井崎村誌」の交通誌をみると、比井港の乗降客数を次のように記している。同じ頃の御坊港の記録と比較すると面白いのだが、今わたしの手元にはその資料欠いている。なお、前記「比井崎村誌」中「宿屋」の条に、

「本郷土は他郷土より漁業に来れる者の宿泊所及び帆船の水夫が風浪を避難して浦泊まりする所謂漁民宿或は船宿等数多あれども公然鑑札を有して旅客或は行商人、或は巡廻官吏、或は汽船の乗降客を止宿せしむる旅館

往		復	
港 名	時 間	港 名	時 間
大 阪	午後 3:30	勝 浦	午前 8:30
和歌浦	〃 6:30	串 本	〃 10:15
比 井	〃 8:30	田 辺	午後 1:50
串 本	〃 11:30	和歌浦	〃 6:00
勝 浦	〃 9:30	大 阪	〃 9:30

大阪〜勝浦急行船

は大字阿尾に三戸のみなり」

として次の三戸をのせている。

何しろ半世紀も昔のことである。

もはやこれらの三戸も旅館を廃業しているであ
ろう。

比井港汽船乗客数

年 度	乗客数	降客数
大正元年	4,903 人	4,986 人
大正 2 年	5,030 人	5,092 人
大正 3 年	6,219 人	7,119 人

比井	錦 山	北 出	650 番地	糸谷 シズ
比井	松の山	北 出	674 番地	上西 邦助
比井	勝浦屋	波戸ノ内	450 番地	勝浦 方松

道成寺の縁日

「紀州新聞」昭和五十一年四月二十二日掲載

今年も道成寺の二十七日の大会式が近づいてきた。戦後はどこもここも観光ばかりで、道成寺へも毎日観光バスが列をつらねて、参詣客を送りこんでくる。しかし私のおぼろげな記憶をたどると、戦前は、むしろひっそりした、た
たずまいで平日は参詣する人影も、きわめてまばらであつたような気がする。

私の子供のころは、まだ汽車もなかったし、道成寺へ通じるどの道も細い畦道がおおかつた。二十七日の会式の日
は子供達はその細い畦道を、胸をはずませながら道成寺へ急いだものであつたが、子供達ばかりでない、四月も半ば

をすぎると、大人たちまでも会式を待ちかねて、何か浮き浮きした様子が子供の眼にも感じられるのであった。

この日は道成寺にとつては、一年中で一番大勢の人がお詣りする日でもあったが、これは道成寺だけでなく、御坊近在でもっとも人の集まる日でもあった。ところがこの日は実は御本尊の千手観音の縁日かと思ひこんでいたのであるが、本当は三重塔におまつりしている大日如来の縁日であると、これは以前わたしくが矢田村誌を編集した際、管長にお聞きして初めて知った。三重塔が再建されたのは宝暦年中のことと言われるから二十七日の会式も、そのころからはじまったのであろうか。

ともかく以前は汽車もなく、平素は娯楽らしい娯楽は何一つなかっただけに、年に一度の二十七日の会式は、大人も子供も参詣にかこつけて、年に一度の最大の楽しみとしたのであった。この日は朝から道成寺へ通じる道という道は、絶え間なく道成寺詣りの人が続いた。恐らく御坊周辺の村々ばかりでなく、西は由良や比井崎あたりから、東は船津村や川中村、稲原あたりからもお詣りしたのではないかと思う。

当時、私の家の親類が稲原村の明神川にあつたが、例年この日が来るとその家の人が、筍を土産に持って立ち寄り、昼食をして道成寺へ出かけるのが、きまりになっていた。

貨幣価値もすっかり変わったが、そのころ子供達は親から、五銭か拾銭の小づかい錢を貰ったのを、後生大事に道成寺へといそいだ。門前からの人波にもまれながら境内に入ると、右も左も板店がずらりと並んで、客を呼ぶ声や香具師(やし)の声が、わんわんむんむん一種の熱気をおびて、いやが上にも少年の心をかきたてたのであった。

本堂の西の方には「のぞきからくり」の小屋があり、裏手へ回ると「軽業小屋」が盛んに客をよび、三重塔の南には不気味な蛇を何匹も体にまきつけて、怪しげな薬を売る香具師が、人を食った口調でまくし立てている。その間にもジュウジュウと亀焼を焼く脂の匂いや、煙硝玉の音が立て込める。子供たちは親から貰った小づかいを、如何に有効に使うべきかと考えをめぐらす。

いずれにしても御坊周辺に子供時代をすごした者には、四月二十七日の道成寺の会式の思い出は、折にふれてなかしく心にうかんでくるのである。

この日がすぎると道成寺は、またもとの静かなたたずまいを取りもどし、農村の仕事も次第にいそがしくなるが、麦刈りや田植えがひとかたつきした、七月十七日が一般に十七夜の名で親しまれてきた。今度は道成寺の夜の会式である。これは十八日が本堂の御本尊の縁日にあたるところから、前晩の十七日夜参詣するのである。

すでに季節は夏に入っているから、夕食をすまして、納涼がてらに参詣する人で賑わった。境内参道の両側には二十七日ほどではないが、夜店がずらりと並んで、アセチレン瓦斯特有の匂いの漂よう中で、子供はあちらの店こちらの店と、のぞきこんでは何を買おうかと思案するのであった。

まだ其の時は、キャンデーやジュースなど、しゃれた飲み物はなく、肉桂酒や店のおやじが、ねじり鉢巻で削り氷りに蜜をかけたのや、小豆をまぶした金時、氷り飴が主な飲み物であった。また果物では李や杏が並んでいたし、玩具では煙硝玉や線香花火が割合やすくて子供達の人気をあつめた。

十七日に続いて八月九日の夜、世間では十日堂と言われる縁日があった。この日も御本尊千手観音のおまつりで、俗に千日参りともよばれ、この日の参詣は平日の千日の参詣にあたる功德のある日と伝えられる。

十七夜ほどでないが、やはり納涼をかねて近在の人々が、大勢お詣りした。ちょうど西瓜の出まわるころで、夜店では氷の上にのせた冷やし西瓜を売っていた。

世の中いそがしくなったせいとか、近年は十七夜も十日堂も、お詣りする人が少なくさみしくなったが、少年のころ味わった、この三つの縁日のことが、何かの機会にふっと頭にうかんで郷愁をおぼえる。

交通雑話

汽車がついたころ

「交通と公害」昭和五十一年五月二十日掲載

昭和三年十月廿八日、国鉄紀勢西線は、湯浅―由良間九・四キが開通した。日高郡民一同が明治以来、数拾年間にわたり、待望久しかった汽車がはじめて日高郡の一角に乗り入れたのである。矢田小学校（現川辺西小学校）沿革史、昭和四年二月二十六日の条に、

京都御所拝観、京阪地方見学ノタメ児童四十六名 教員五名 早朝出発。午前八時二十七分 由良駅発ノ列車ニテ奈良ニ向フ。三月一日無事帰校ス。

と記されている。小学校から由良駅まで山坂を越えて、約六キはあろう。たとえ修学旅行という楽しい目的があったとはいえ、朝の暗いうちから子供の脚で、よく歩いたものである。今ならバスを雇うか、父兄の自家用車で送り迎えしたにちがいない。時代の流れもさることながら、まことに今昔の感がふかい。

次いで昭和四年四月二十四日、由良駅からトンネルを通って内原駅・御坊駅の二駅が同時開通した。越えて昭和五年十二月十四日、御坊駅以东の道成寺・和佐・稲原・印南の四駅が同時に開通し、黒い煙をはきながら列車は日高平野を走った。同日、印南町で盛大な開通祝賀会が催された。

再び矢田小学校沿革史を引用するが、沿革史、昭和五年五月一日の条に

紀勢西線工事、学校前マデ進歩

とあり、さらに六月十二日の頁には、入野鉄橋工事竣工と鉄道工事の進捗状況に関する記事がある。また十二月十四日の条には、

紀勢西線、道成寺・和佐・稲原・印南駅間開通祝賀会、午前九時中津川校ト合同デ和佐駅マデ試乗ス。

と記されている。ようやく一駅間の試乗にすぎないが、この時の大きなよこびがうかがわれる。

話の順序が逆になるが、紀勢西線由良―御坊駅間の工事開始は大正十五年四月であり、御坊―稲原駅間の工事は、昭和二年十一月にはじまった。工事請負者は和歌山市の西本組、西本健次郎氏で、沿線の村々には下請け業者の飯場が設けられ、多くの人夫が入りこんできたが、近村の農村の人々も農閑期には臨時人夫として働きに出た。

もちろん其の時はブルドーザーはなく、トラックさえ余り使われず、ツルハシやスコップが主な工具で、もっとも進歩した運搬工具としては、わずかにトロツコがあるだけであった。

終戦後、私有線が尊重されるようになり、鉄道複線用地や国道用地、その他、公共用地の買収もむつかしくなったが、紀勢西線の建設工事のころは、公益優先の観念が強かった上、鉄道がきてもらえるというよろこびもあって、用地の買収は殆んど問題なく進んだ。

「続日高郡誌」によると、稲原方面（現印南町）では、反当たり時価二百円〜三百円の土地が八百円位で買い上げられ、地主はほくほく者であったという。

交通雑話

日高川の船運

「交通と公害」昭和五十一年六月二十日掲載

今春公刊された川辺西小学校の「百年百思」の中に、たぶん大正中期ごろの撮影と思われる、野口村のしも手から白い三反帆いっぱいに風をはらませ、日高川をさかのぼって行く、きわめてめずらしく貴重な数隻の川舟の写真がのせられている。

私は大正九年に矢田小学校を卒業したが、当時の校舎は小熊部落のほぼ中央の小高い位置にあって、教室の窓からは日高川口や、日高川を下る筏、その間を縫う上り下りの川舟が手にとるように見え、授業中につきその風景を他所見して、よく先生に叱られたものである。

日高川の舟運がいつごろからはじまったか、たしかなことは分らないが、森彦太郎先生編著による「日高近世資料」中の「日高鑑——一六七八年成立」舟津村の条に川舟拾七艘とあることによって、江戸時代初頭にはすでに舟津と御坊附近の間に、ある程度の舟便のあったことが知られる。

この川舟は長さ約九米（五間）、幅は広いところで一・八米（一間）、一隻に二人の船頭が乗り、日当壱円五拾匁から貳円（普通の労働では五十匁）、労働時間は一日十五時間であったという。

舟は深夜の午前二時ごろ一斉に舟場を出て川を下り、野口村あたりで夜明けを迎える。つみ荷は主に木炭で、その外に「楮」や「椎茸」・「杉皮」などの山産物。木炭なら通常で百三十俵、渇水期には八十俵であった。こうして午前六時半ごろ川口について荷をおろし、七時すぎから衣食料品や日用品を積みこみ川を上りはじめるが、船頭のうち一人は「引き子」とよんで、舟に綱をつけて川岸の小径を浅瀬づたいに舟を引き、もう一人は「カリ子」と云い舟の上で竿を使って舟をあやつり、測にかかると櫓を押して川を上った。

このうち「引き子」は浅瀬を歩く時、「ピシヤ」・「ピシヤ」と足音をたてるので、「ピシヤ・ピシヤ」ともいい、冬季などは随分きびしい仕事であったため、舟津地方では子供がいたずらをすると「ピシヤ・ピシヤ」にやるぞと叱つたと伝えられる。それはともかく、こうして舟は午後三時ごろに舟津について、すぐ各問屋の倉庫に積荷を納め、さらに翌日の荷を積みこんで、ようやく一日の作業が終わるのである。昔から船頭は一升飯を平らげ、一升酒を呑むといわれる程はげしい重労働であった。

やまがなれども船津は都

出船いり船五十五はい

という船頭歌もあるくらい、舟津は寒川、等奥日高との物資の中継地として栄え、数軒の船問屋もあったが、その後陸路の開発につれて輸送は次第に陸路にかわり、大正十年ごろには舟便はまったく姿を消すにいった。

後記

本稿はその大部分を昭和^{（一九七一年）}四十六年、日高地方社会科教育研究会編集の「郷土の姿——中津村」を引用していた。ここに同研究会の方々に深謝いたします。

あとがき

一、七月二十一日に近畿地方の梅雨明けがあつたと大阪管区気象台から発表があつたが、梅雨明け前から当地方は晴天続きで、今年は小雨の梅雨だった。また、和歌山南部と京都・兵庫の北部では近畿地方でも天気は大きい違いで梅雨入りも梅雨明けも近畿一まとめはむつかしいと思う。近畿で小雨の分関東では不順な天気が続いている。

一、遺文集⑥やつとできあがつた。読者にとつては、こんなものよくもアップしたと失笑を買うかも知分らないが、すでに忘れられ去られたこと、今書き残しておかねば忘れられてしまう、ことが殆んどで、わたしより十才年下の地区に育った人にきいても伝承がない。各地の市町村史にも紙数の関係で記載のない土俗的なことが殆どを占めている。どうしても残しておきたい事項も含まれている。

平成二十六年七月二十五日（金）

清水章博